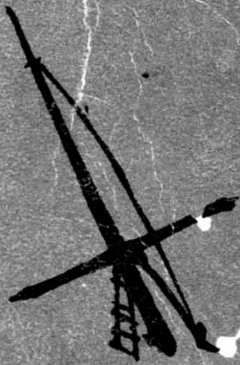


時事新報社翻譯

露艦隊

幕僚戰記





露艦隊三戰記序

予嘗テ海軍勳功表彰會ノ著ス所日露海戰記ヲ讀ム其記
ス所詳密精確ニシテ能ク日露海戰ノ終始本末ヲ網羅シ
其後世史料ノ爲メ益スル所小少ナラサルヲ知ル今又同
會ノ發刊ニ係ル露艦隊來航秘錄同幕僚戰記及ヒ最期實
記ノ三篇ヲモ併セ讀メリ其來航秘錄ト稱スルモノハロ
ゼストウエンスキー提督ノ幕僚タル造船技師ボリトウ
スキー氏ノ著ス所ニシテ西曆千九百四年九月十日始テ
クロンスタツドニ於テ軍艦スワロフニ乘艦ノ日ヨリ始
マリ翌年五月廿三日即チ日本海々戰ノ前四日ニ終ハル
之レ同氏カ乘艦以來日々艦隊行動ノ實況ヲ手記シ以テ

其細君ニ通信セシ實錄ナリ幕僚戰記ト稱スルモノハ第二艦隊幕僚某氏ノ著ス所ニシテ其記事ハ五月廿五日臺灣海峽附近ニ於テ既ニ會戰ノ近キヲ察シ運送船ノ一部ヲ解放シ上海ニ回航ヲ命シタルノ日ニ始マリ開戦後口ゼストウエンスキー提督重傷ヲ負ヒ最後命令ヲ發シタルノ時ニ終ハル又最期實記ト稱スルモノハ實戰者ノ一人タル某將校ノ著ス所ニシテ其記事ハ五月九日第二第三艦隊カ始テホニコ一へ灣ニ會同セシ時ニ始マリ口ゼストウエンスキー提督ノ坐乘驅逐艦ペトウエイ號ノ投降決議及ネボカトフ提督ノ降伏談判ノ時ニ終ハル其記スル所ノ要各異ニシテ一ハ則チ萬里遠征ノ苦味艱難ヲ詳述シ一ハ則チ專ラ艦隊苦戰ノ狀ヲ描寫シ又其一ハ則

チ戰策ノ利害得失武器ノ優劣等ヲ詳論セリ故ニ此三者ハ互ニ相補足シ讀者ノ研鑽ニ利スル甚タ多シ若シ此三者ヲ併讀スルトキハ露國艦隊ノ裏情一トシテ其要ヲ得サルモノナク且ツ其悲惨ノ狀炳然トシテ眼中ニ映スルカ如シ讀者チシテ無量ノ感ニ禁ヘサラシムルモノアリ抑モ彼レ艦隊カ旅順浦鹽艦隊ノ敗衄ヲ聞キ萬里ノ波濤ヲ凌キ苦辛艱難ヲ極メ之レカ應援ニ努メタル大膽不撓ノ勇氣ハ之ヲ稱スルニ餘リアリト雖モ其出征準備ノ盡サハル所アルト兵員ノ研磨訓練ヲ缺キ航行十餘ヶ月ノ間孜々トシテ此ニ努メサリシハ將帥タルモノ、能ク心ヲ用ヒタリト言ヲ得ス開戦ノ時ニ臨ミ屢ハ隊形ノ不整ヲ來シ炮火ノ効力ヲ著明ナラシムルヲ得サリシハ豈ニ

其レ之レカ罪ナラサランヤ且ツ其兵員カ屢ハ反心不羈ノ形勢ヲ示シ司令長官ノ信賴ヲ薄弱ナラシメタルハ平生軍紀ノ頽廢ヲ表白セルモノニシテ是亦敗戦ノ一原因タルヲ疑ハス所謂戦ノ勝敗ハ地ノ利ニ如カス地ノ利ハ人ノ和ニ如カストハ是此ノ謂ナリ蓋シ此書ハ能ク敵ノ缺窬ヲ明示シ之ニ依テ將來益ス我カ士氣ヲ鼓吹シ忠君愛國ノ至衷ヲ發揮セシムルノ良箴トナスヘキカ曩ニ著ス所ノ日露海戦記ハ我カ艦隊ノ實見觀察ニシテ所謂表面ノ顯象ナリ此三戦記ハ彼レ艦隊ノ實見觀察ニシテ所謂裏面ノ寫影ナリ此二者ハ則チ表裏相照シテ能其眞象ヲ示スモノナリ勳功表彰會カ前後彼我ノ海戦記ヲ發刊シ世ニ公ニセシモノ蓋シ其意焉ニ在ラン予聞ク此三戦

記ハ嘗テ時事新報社ニ於テ稿ヲ購ヒ之レカ譯ヲ施シ上梓發刊ノ企圖アリ然ルニ偶々勳功表彰會ニ於テ佐世保紀念館設立ノ舉アルヲ聞キ此稿ヲ寄贈シ以テ其資ヲ幫助セリト果シテ然ラハ此書ノ讀者ニ與フル裨益ハ獨リ勳功表彰會ノ賜モノトミニアラス其一半ハ則チ時事新報社ノ賜モノト言フヘキカ今其梗概ヲ略記シ以テ之カ序トナス

明治四十年初冬

海軍大將 柴 山 矢 八 撰

拜啓先頃御來訪被下候翌朝新聞紙を閲し候處前日回向院の大相撲にて太刀山常陸山を破り而も其手解は人々によりて觀る所を異にし太刀山自身も亦確と記憶せざる由記載有之小生は之を讀みて感懷今更の如きものあるを覺え申候東西二人角牴の贏輸すら真相を窺ふの難きと是の如くなるに况や日露兩帝國百餘隻の軍艦か日本海に於て二日間奮闘を續け其區域南北三百餘海里東西二百餘海里に亘れる未曾有の大戦に候得は其大要たにも研究するの至難なる事は申までも無之次第に候へども我れ無比の大勝を制し以て戰役の大局を決せしめたる此の海戦の顛末を知るは海國民たる面目上缺く可らざる事なるに同時に未來の發展に關しても必ず研究し置くべきもの、一ツかこ被存候海戦の當時東郷大將の公報及諸將校の談話等にて兎も角も我戰況の大要こそ知られたれ露國側の行動に至りては具體的のもの殆んど無之頗る遺憾に存じ居り候處今般貴會にて曩に時事新報紙上に掲げ世間の喝采を博したる露艦隊に關する紀事三篇を一巻に收めて御發刊相成候趣洵に結構なる御企にて斯くてこそ彼我勝敗の原因も略ほ究められ従つて國民を裨益すること多かるべきは小生等の信じて疑はざる所に有之候知彼知己百戰不殆との孫武子の言は嘗に軍事當局者か作戰上に必要なるのみにては可無之と被考候先は右迄勿々不備

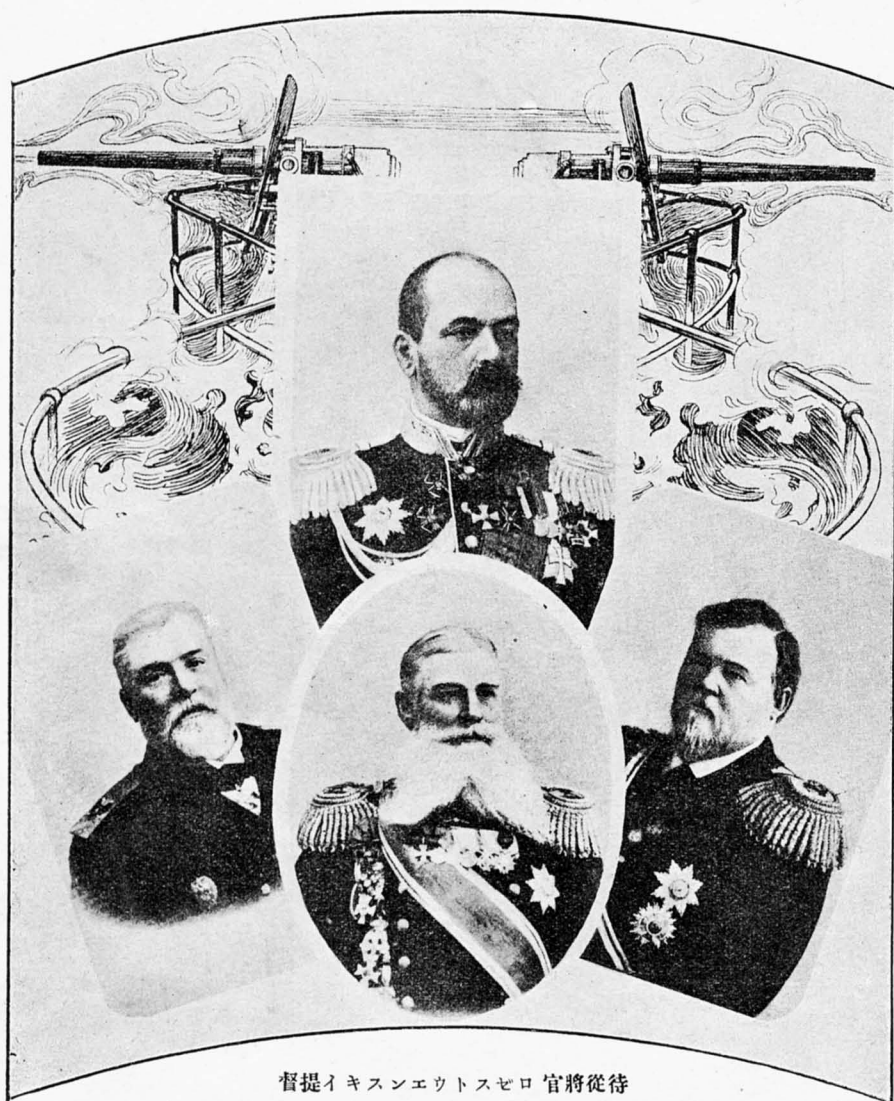
六月廿九日

海軍中佐子爵 小笠原長生

海軍勳功表彰會

田熊萬藏殿

露艦隊四提督の肖像



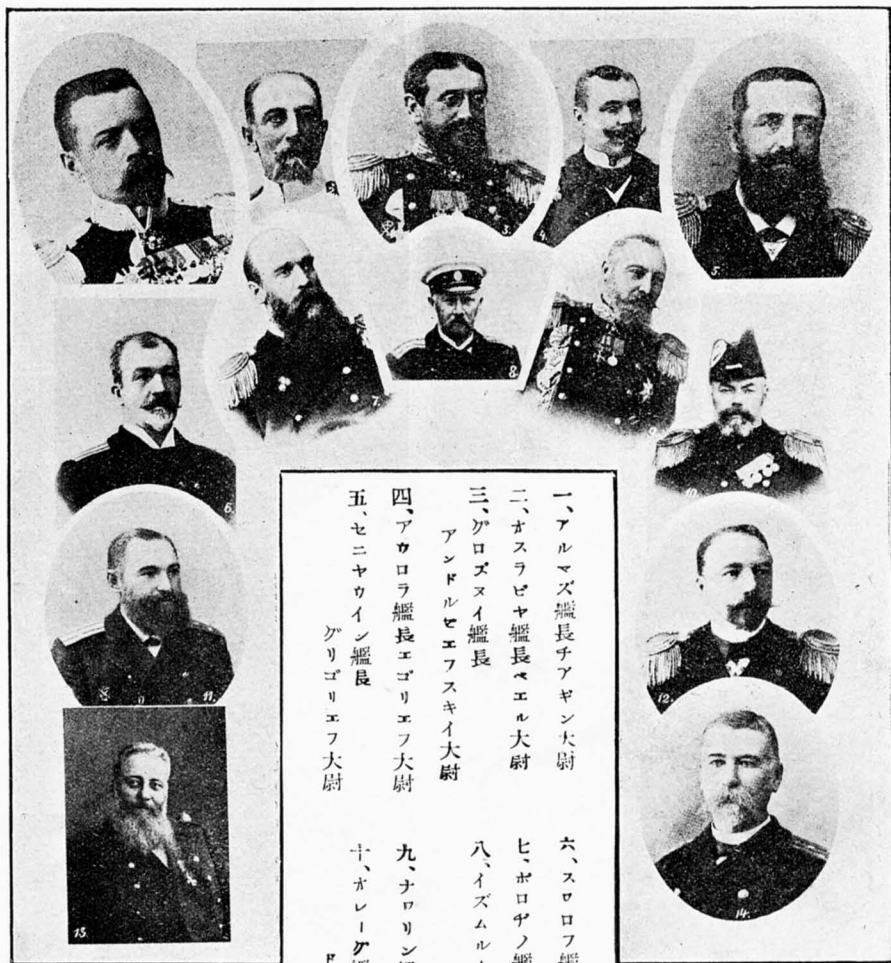
待從將官セロツエウシキス提督

ネボカフト提督

フエケルザルム提督

エウクンイツス提督

露艦各隊長の肖像



一、アルマズ艦長チアギン大尉
 二、オスラビヤ艦長マエル大尉
 三、カロズヌイ艦長
 アンドルセエフスキイ大尉
 四、アカロラ艦長エゴリエフ大尉
 五、セニヤウイン艦長
 グリゴリエフ大尉

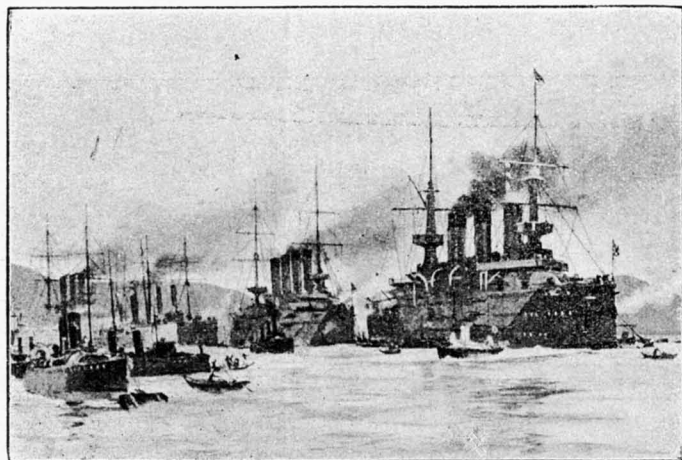
六、スロロフ艦長イグナツクス大尉
 七、ボロザノ艦長セルブリヤニコフ大尉
 八、イズムルード艦長ノエルゼン大尉
 九、ナロリン艦長ヒテンゴフ大尉
 十、オレーク艦長
 フアロトロオルスキイ大尉

長艦イッシ、三十
 尉大フロゼオ

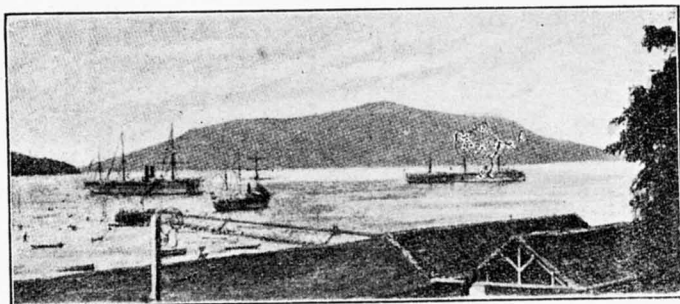
長艦ンシクラブア、四十
 尉大ンシリ

長艦フモヒナ、一十
 尉大フノオデロ

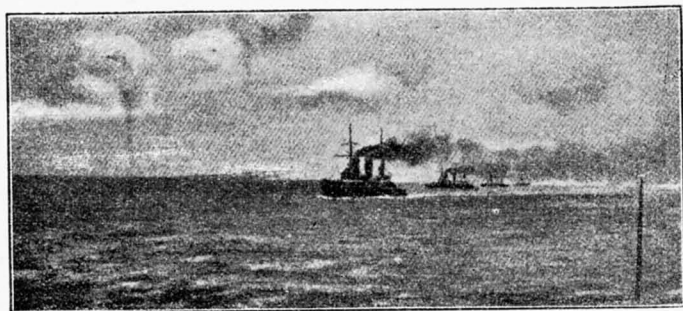
長艦クーレオ、二十
 尉大グンエ



露艦第二大平洋艦隊リバカ港
出帆當時の光景

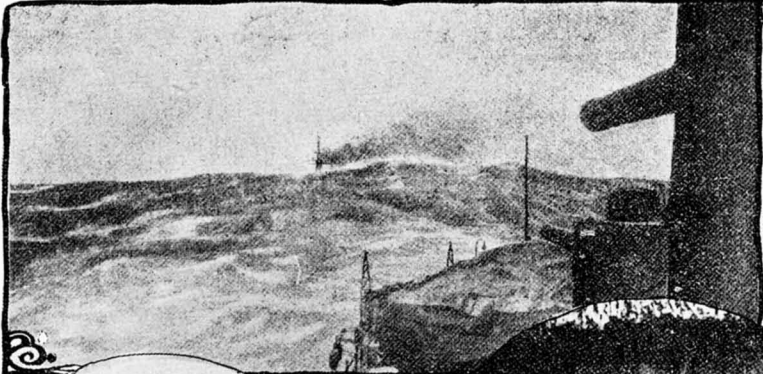


第二大平洋艦隊ダカール
に於て石炭積取の光景



第二大平洋艦隊北大平洋
航行の光景

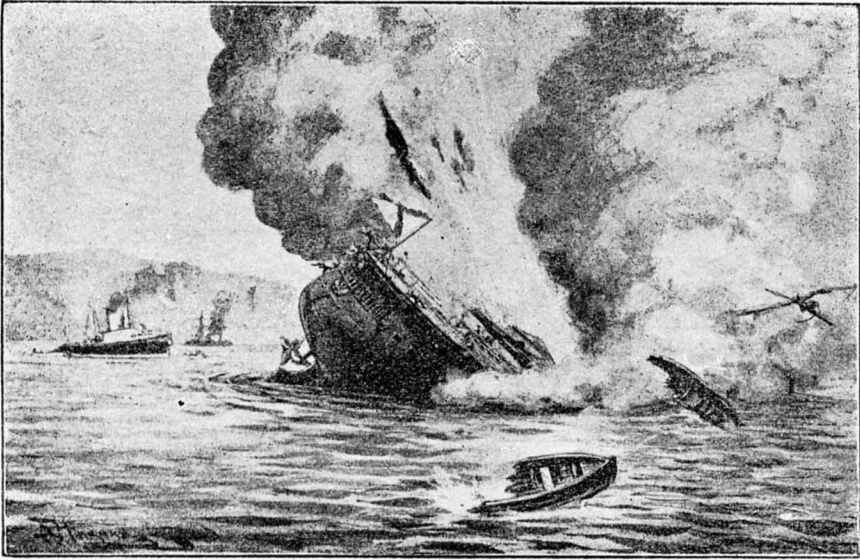
喜望峯廻航中、
暴風艦隊ノ苦心



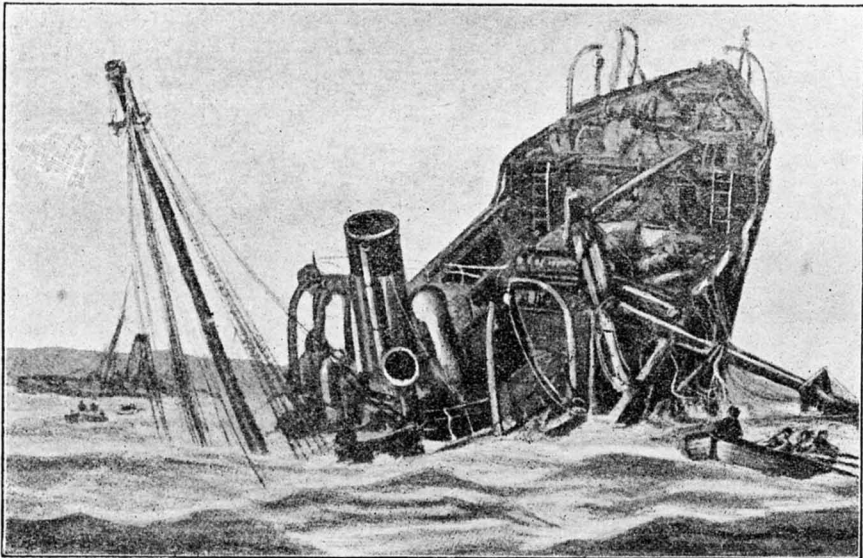
マダガスカル島ノ
土人及貴族



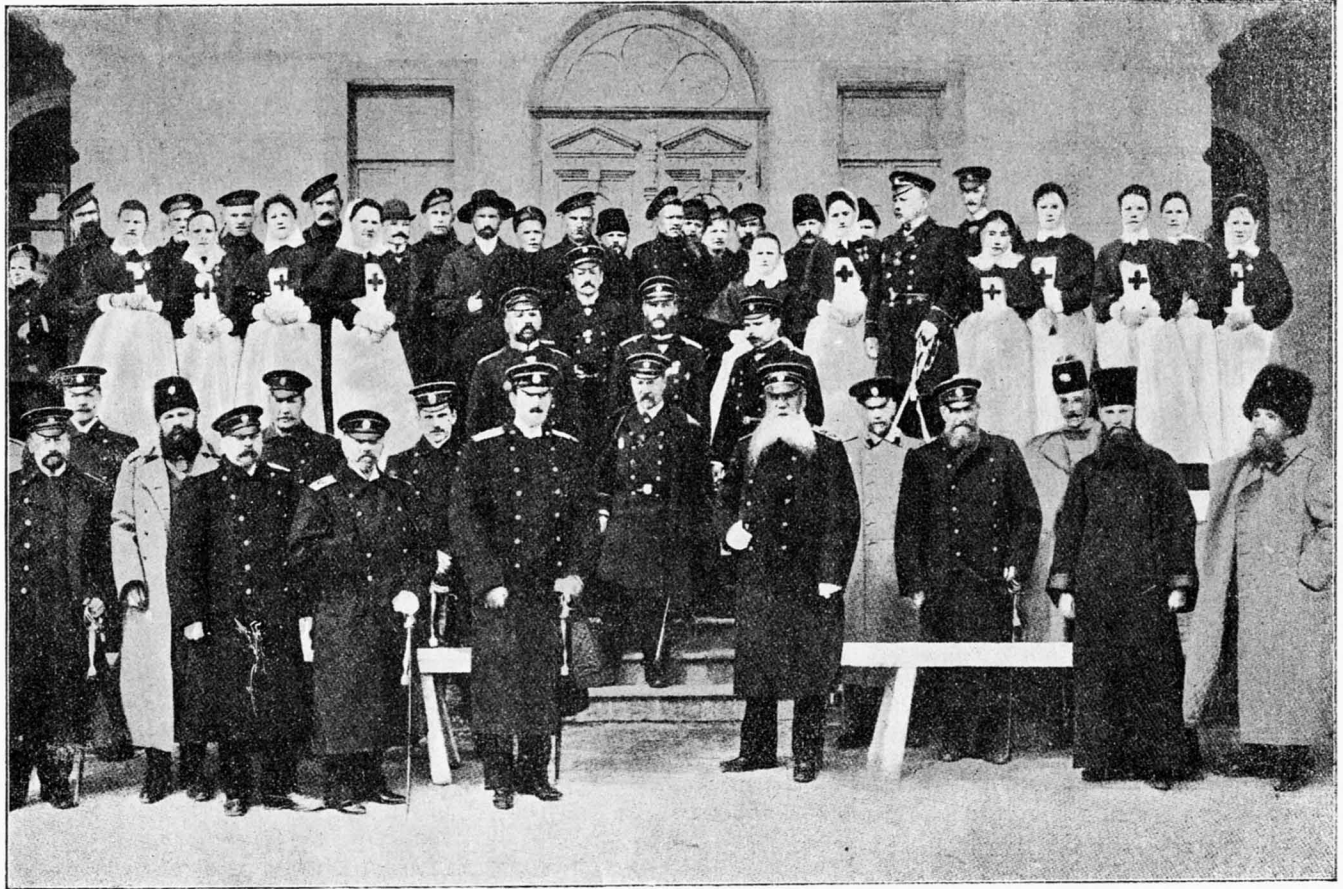
マダガスカル島
第二艦隊ノ錨地



本日大海海戦に於て露艦最期の光景



本日閉塞船旅順港口沈没の光景



。他其督提フロカマ公大ルヲキ。官武級高時當議會城籠順旅

緒言

本會の曩に、日露海戦記を刊行したる趣旨は、既に世に認識せらるゝが如く、日露戦役に於ける、我か海軍の偉勳を表彰して、是れを不朽に傳ふると同時に、吾人國民海事志想の涵養に資し、尙當時我か海軍の策源地たり、今は東洋の重鎮たる佐世保軍港に、一大紀念館を設立するに在り、此の故に、當年屠龍搏虎の勇を振はれたる歴戦將校にして、此の編纂を助けられたるもの尠からず、海戦記か一種の特色を有するは畢竟是れか爲耳、是を以て、上梓先づ

天覽の榮を辱ふし、亞で多數の賛成購讀者を得、版を重ねる四、其の部數四萬有餘、本會は我か同胞の斯道に熱心なるを憚はずんば非ず。

然り而して、本會は未だ以て是れに満足するを得ず、何となれば、事に主客の別あり、物に表裏の差あり、日露海戦記に於ける我が軍は即ち其の主にして、敵軍は自ら客たり、故に表面の事實は主客ともに網羅し盡せりと雖も、客の眞想即ち敵艦隊裏面の消息に到ては、之を窺ひ知る能はざればなり、本會の慊焉たりしもの豈望蜀の類ならんや。

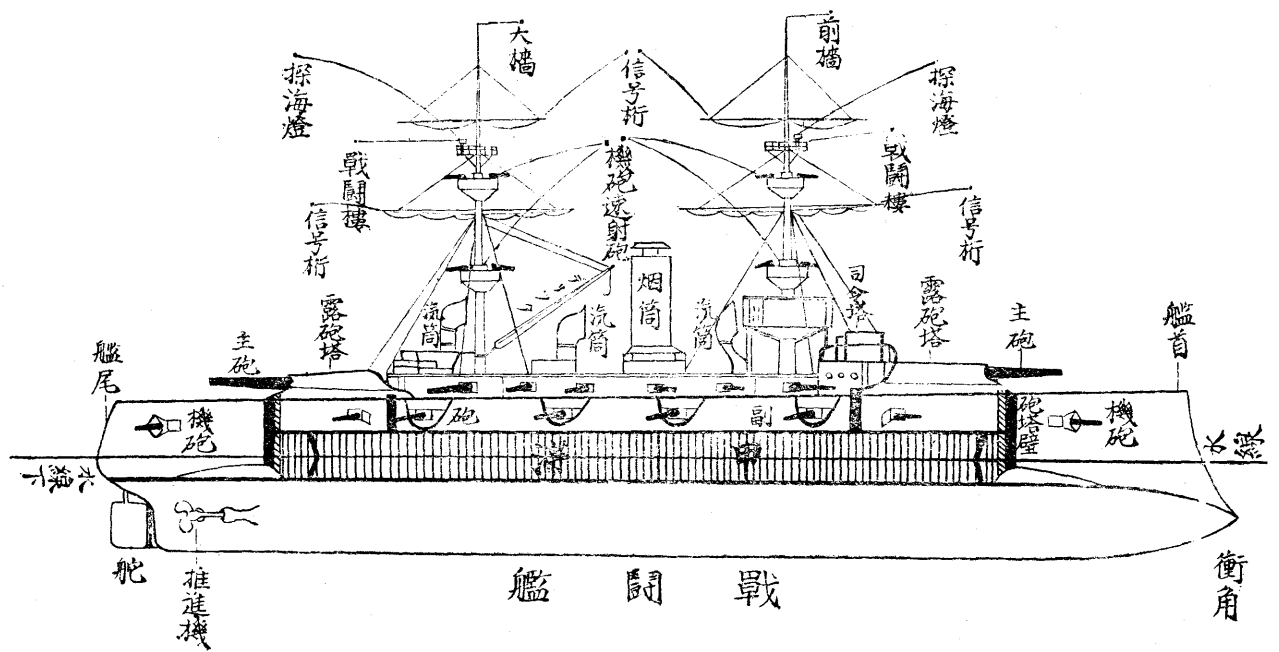
是の時に當り會ま、時事新報に譯載せられたる、露艦隊來航祕録、露艦隊幕僚戦記、露艦隊最期實記の三戦記は、孰れも敵艦隊幕僚の手に成りたるものにて、慘憺たる當時の光景を描寫して餘蘊なく、寔に千古稀有の珍書たり、故に其の記事は滿天下の喝采を以て始終するに到れり、是を以て本會は、本會の希望を時事新報社に齎し、三戦記の出版權譲受の事を交渉せしに、同社は、多數讀者の希望に應せん爲め、將に是れを一巻に收めんとして既に其

の準備に着手の後なりしも、幸に本會の趣旨を賛し、且つ進んで本會の事業を幫助せんとて直に快諾せられたり、是れ即ち本會の此の三戦記を出版するに到りし所以なり。

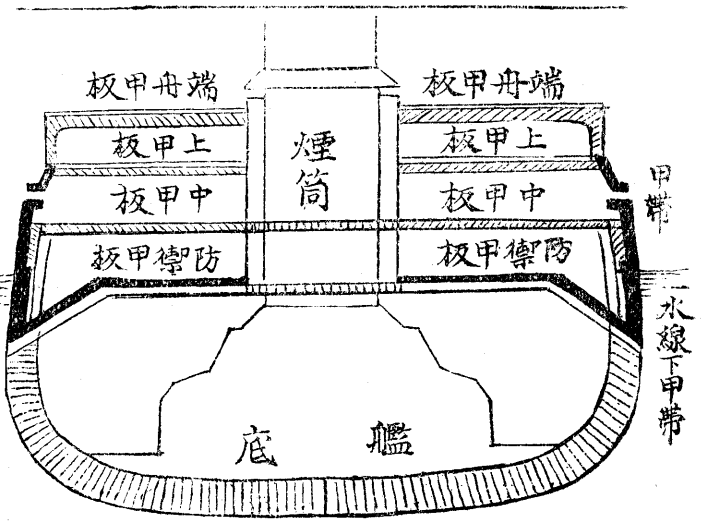
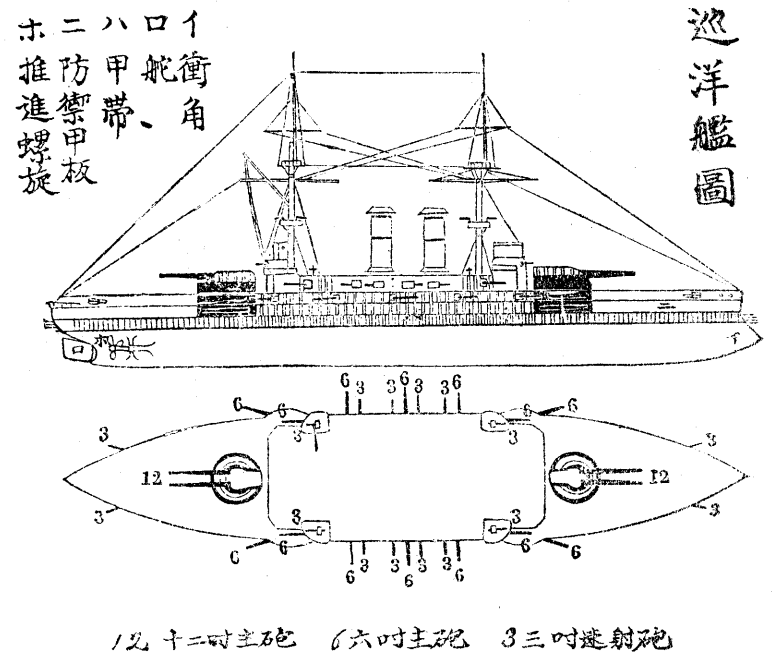
之を要するに、彼の日露海戦記は味方の觀察にして、此の三戦記は敵側の觀察なり、乃ち今や、主客對照、表裏併觀の道を完備して復遺憾なきに到れり、依て以て當年鯨鯢驅逐の跡を尋ね、以て斯道の研鑽に資する所あらは、本會の望焉に過る莫し、若し夫れ行文流暢にして明快なる讀で而して鑿かざるは、畢竟譯者時事新報社の賜なり、爰に、其の來歴を敘し以て觀覽の便に供すと云爾。

明治四十年八月中澁

海軍勳功表彰會



巡洋艦圖



裝甲巡洋艦橫斷圖

軍艦種類大別

- (戰鬪艦)
- (巡洋艦)
- (海防艦)
- (砲艦)
- (通報艦)
- (水雷母艦)
- (水雷驅逐艦)
- (水雷艇)
- (潛行水雷艇)

は艦隊勢力の中堅にして、攻撃防禦の兩力を供備し、敵艦隊の主力と戦ひ之を撃破するを以て任務とす、其構造は最も堅牢にして艦内の要部は、鋼鉄板又は白銅鋼を以て防禦せられ、攻撃力としては重砲速射中形砲の多數、強堅なる衝角水雷發射管等を備へ速力強大にして壯嚴雄大なる者なり、一等戰鬪艦は壹万噸以上、二等戰鬪艦は壹万噸以下とす

巡洋艦

は裝甲非裝甲の二種あり、裝甲巡洋艦は戰鬪艦と等しく戰鬪に従事すへき構造に成り、非巡洋艦は味方の商船并に運送船を護衛して敵の船舶を捕獲し、又は其航路を妨害し、其他偵察報知の任務を盡す、故に速力強大なるを以て巡洋艦の特色とす、一等巡洋艦は七千噸以上二等巡洋艦は七千噸以下三千五百噸以上、三等巡洋艦は三千五百噸以下とす

海防艦

は戰鬪艦と同じく攻撃防禦の兩力を有し、戰鬪に従事し得ると雖も、戰鬪艦の如く速力大ならず、又喫水淺く炭載量も少なく、爲に進撃には不便なるを以て専ら自國の海岸を防禦するを任務とす、一等海防艦は七千噸以上、二等海防艦は七千噸以下三千五百噸以上、三等海防艦は三千五百噸未満とす

砲艦

は主として港灣の防禦に充つるを以て其艦體の少なると喫水の淺きに比し大なる主砲を有す故に敵の大艦に當り、又は河川に溯りて陸軍の應援をなすを任務とす、一等砲艦は千噸以上、二等砲艦は千噸未満とす

通報艦

は主に二等三等の巡洋艦を以て之に充つるも、戦時は商船を武裝して通報艦となすことあり。は水雷艇の補助艦にして總ての物質を水雷艇に供及するを任務とす

水雷母艦

は水雷艇の大形なる者にして、敵の水雷艇を驅逐破壊して味方の艦隊を防禦し、又進て水雷を發射し敵艦を撃沈するを以て任務とす、通常三百噸乃至四百噸なり

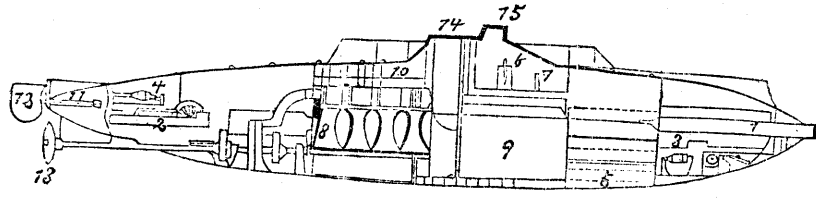
水雷艇

は薄鋼板を以て最も輕快に造られ暗夜又は風雪等の好機に乘し疾驅して敵艦に近づき、水雷を發射し敵艦を轟沈するを以て任務とす一等水雷艇は百二十噸以上、二等は百二十噸以下七十噸迄、三等は七十噸以下二十噸迄、四等は二十噸未満とす

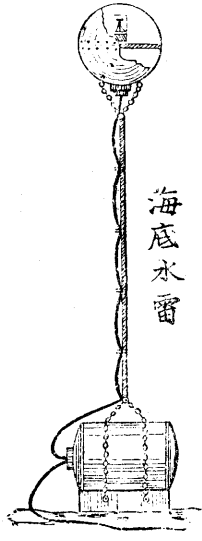
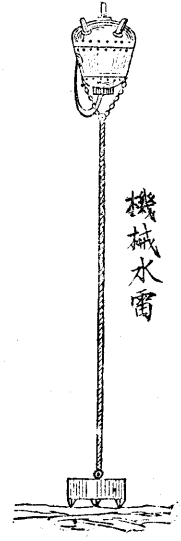
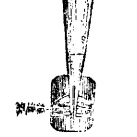
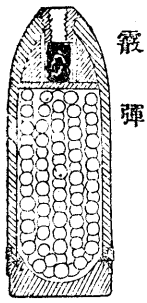
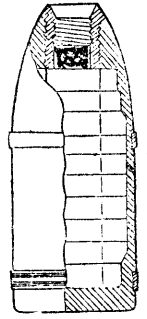
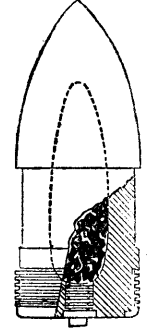
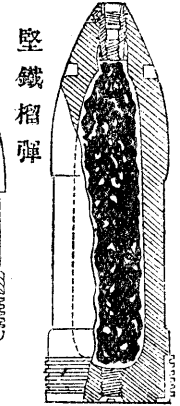
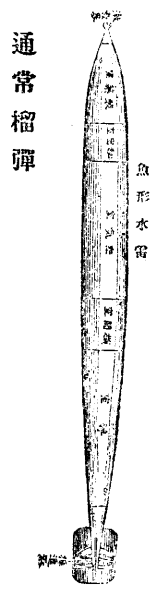
水雷艇

は魚の如き形に造られ内部に自動水雷を備へて海中を潜航し、敵艦に近て水雷を發射し轟沈せしむるを任務とし、機械は電氣力を用ひて運轉せしめ、空氣は氣蓄器に貯へ、腐敗せし空氣は排氣筒にて艇外に排泄し得る仕組となり、最も恐る可きものなり

●軍艦は以上の如き目的に依て構造せられ隨て其任務も區別しありと雖も敵艦と交戦の場合は何れも戦闘に従事し得る者と知る可し



潜水艇内部



水雷の種類及効力

(魚形水雷) (海底水雷) (浮標水雷) (觸發水雷) (機械水雷) (假製水雷)

魚形水雷は攻撃水雷にして其形ち魚の如く軍艦又は水雷艇に装置しある水雷發射管より發射する時は水雷は自ら水中を進行し一定の目的物の衝突するや轟然發して如何なる堅艦と雖も破壊せしむるものなり其他攻撃水雷には漂着水雷外裝水雷牽曳水雷自動水雷等あり然れと魚形水雷の如く効力多大ならず

海底水雷一名視發水雷とも云ひ海底の甚だ深からざる場所又は潮流の最も強き場所に沈設し敵艦の來るを認めて電氣力を以て始て爆發せしむるものなり

浮流水雷は海底深く潮流弱き所に沈設し之に電線を附け置き艦船通航の察其上部にある電路啓閉器に衝突する時は震動を起し電路を通じて直に發火するの裝置なり

機械水雷は防禦水雷中効力多大にして陸地を離ること最も遠き場所に沈設し罐内には電路啓閉器を裝置し艦船之に觸るゝ時は忽ち爆發して轟沈せしむるものなり

假製水雷は臨時應急の場合ひ有合せの物品を用ひて假りに製造したるものなり

砲彈の種類及効力

(通常榴彈) (堅鐵榴彈) (鋼鐵榴彈) (花環榴彈)

(片鐵榴彈) (榴霰彈) (爆裂彈)

通常榴彈は炸裂力の強大なるものにして非裝甲艦土壘市街等の砲撃に用ふる砲彈なり

堅鐵榴彈及鋼鐵榴彈は鋼鐵を以て造られ其頭部は最も強堅にして能く裝甲板を貫き後ち轟然爆發する者にして戰闘艦及裝甲艦船を砲撃するに用ふる砲彈なり

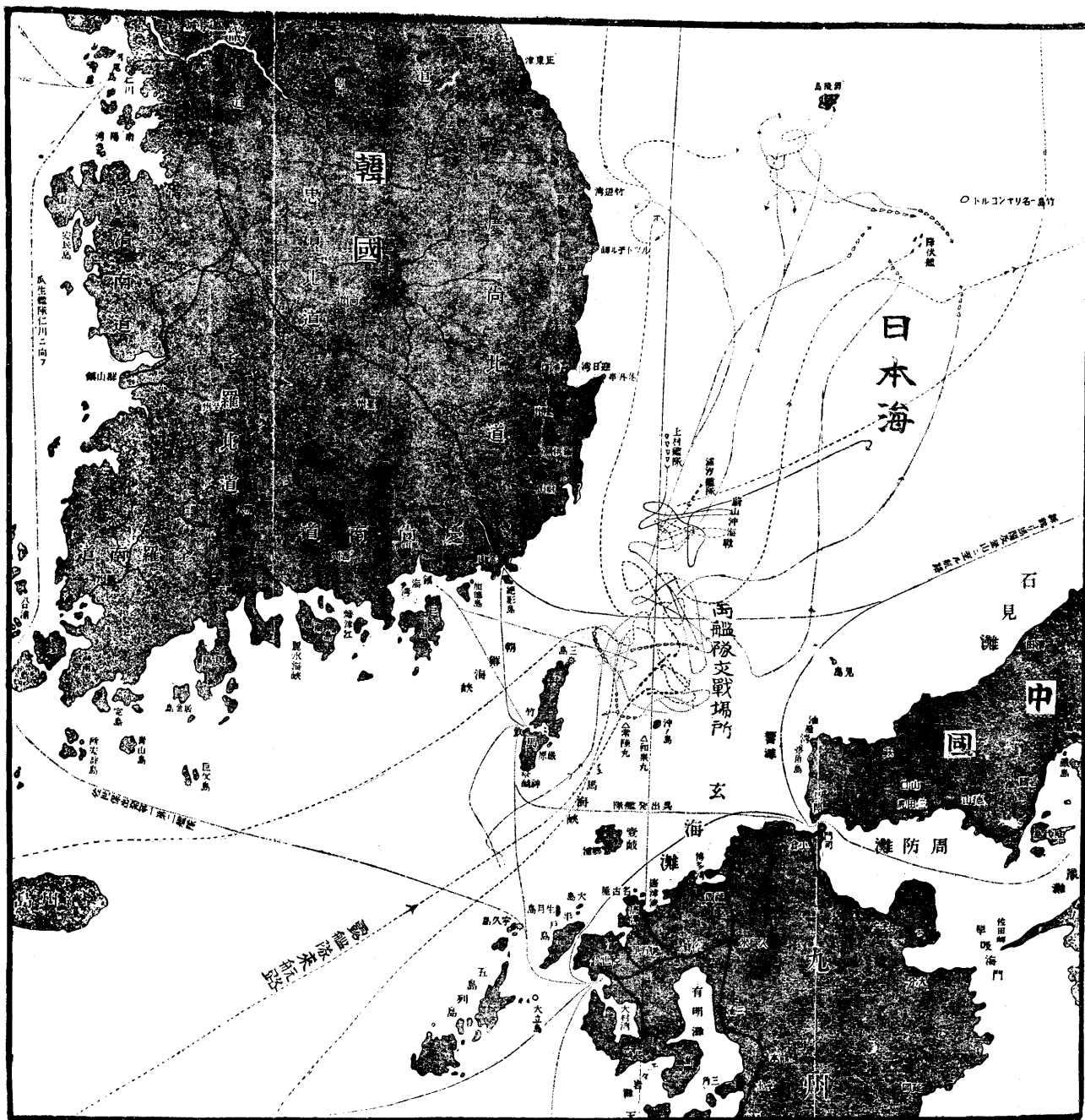
花環榴彈及片鐵榴彈は内部に鉄の小片を積重ね置き發裂して四散するを以て主に艦上甲板水雷艇等を砲撃する砲彈なり

榴霰彈及霰彈は内部に多數の小丸を詰め置き炸裂して四散す故に近距離にある軍隊又は端舟等を砲撃する砲彈なり

爆裂彈は砲火藥に代ふるに爆發藥を多量に裝填し大破壊力を有するものなり

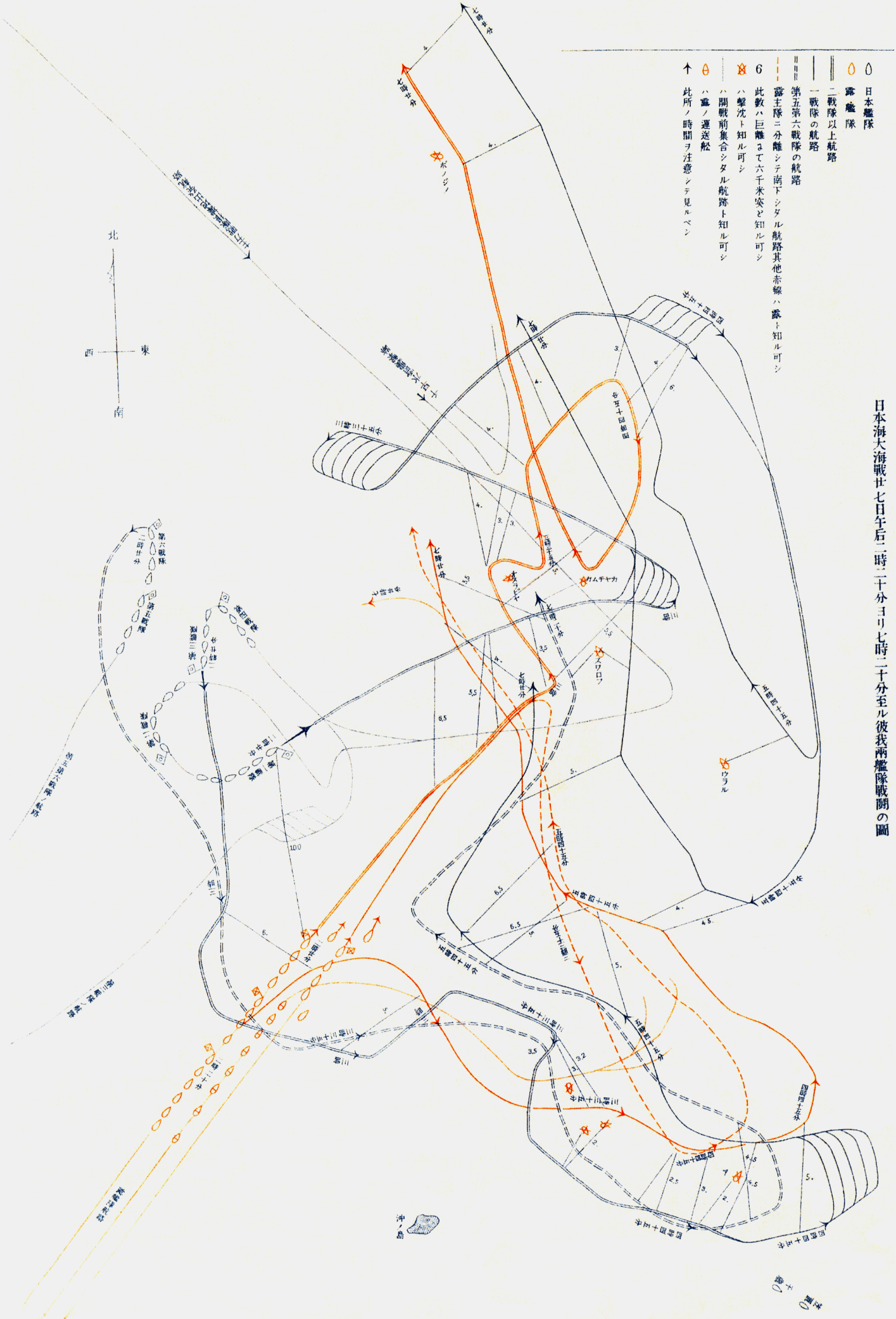
●砲彈は以上の如き目的にて造られ其内部の構造は實に緻密なるものにして一彈の價二千圓を要するものあり其進行力は殆んと三里に達す軍器の進歩驚くべきものなり

尙詳細の圖解を附しあれば参照す可し



日本海に於ける日露兩艦隊の航路を示したる全圖

日本海大海戦廿七日午後二時二十分ヨリ七時二十分至ル彼我兩艦隊戦闘の圖



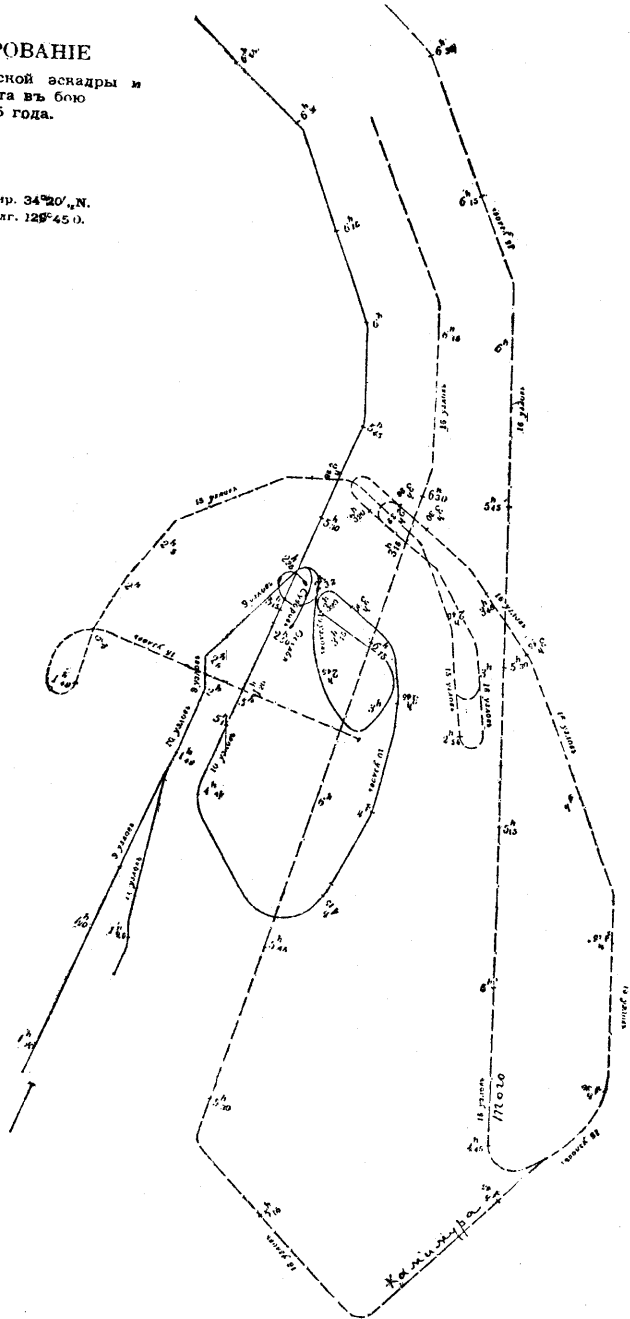
МАНЕВРИРОВАНИЕ

главных сил русской эскадры и
японского флота в бою
14 мая 1905 года.

— русские.
- - японцы.







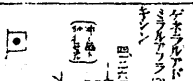



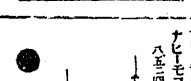
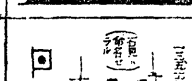
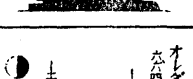
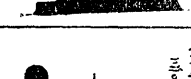
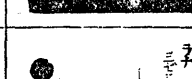




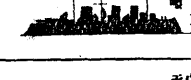
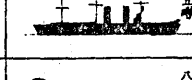
Уч. 49 м. по полушарии шир. 34°20' N.
долг. 128°45' 0.

本圖は原書の儘にして我軍に於て作製したる日本海々戦と對照する時は頗る興味ある可し



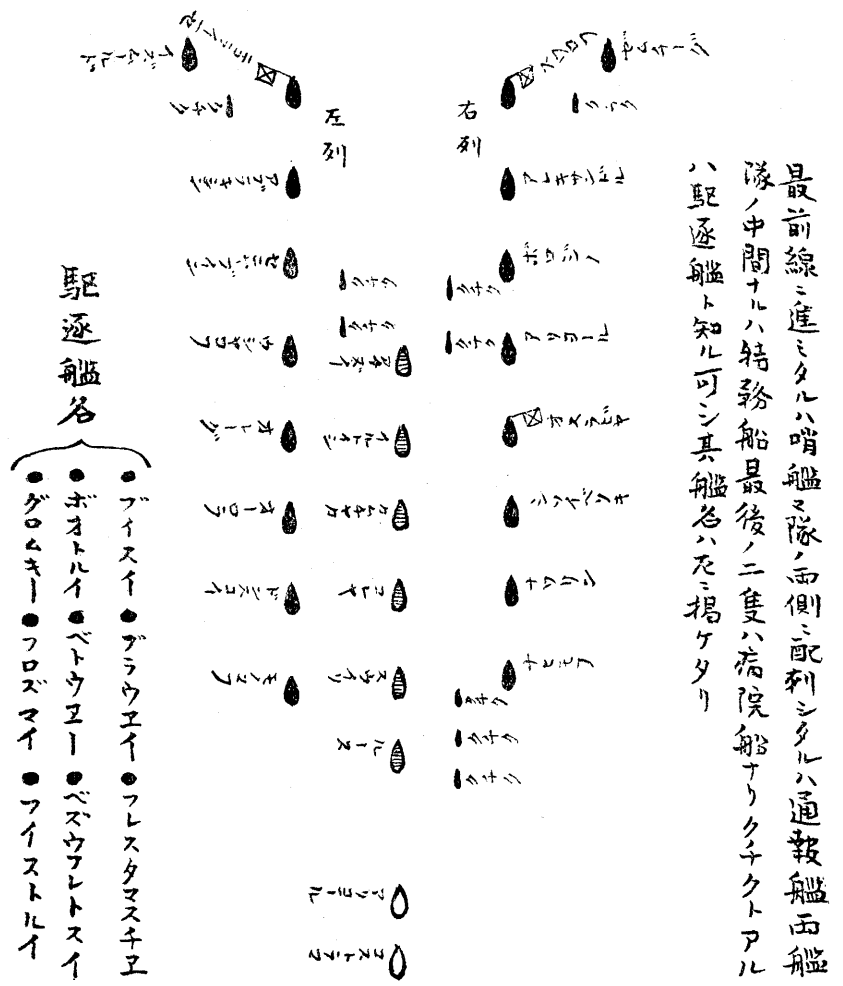
原著日本海々戦圖

露國第二第三艦隊の艦形及艦名

 イコラ (イコラ) 九等駆逐艦	 ボロノイ (ボロノイ) 二等駆逐艦	 コノコノ (コノコノ) 二等駆逐艦
 アムール (アムール) 二等駆逐艦	 シソイ (シソイ) 二等駆逐艦	 イコラ (イコラ) 九等駆逐艦
 カマタ (カマタ) 二等駆逐艦	 ナクリン (ナクリン) 二等駆逐艦	 ボロノイ (ボロノイ) 二等駆逐艦
 ウラール (ウラール) 二等駆逐艦	 アムール (アムール) 二等駆逐艦	 アムール (アムール) 二等駆逐艦
 オレン (オレン) 二等駆逐艦	 イコラ (イコラ) 九等駆逐艦	 ボロノイ (ボロノイ) 二等駆逐艦
 アムール (アムール) 二等駆逐艦	 シソイ (シソイ) 二等駆逐艦	 アムール (アムール) 二等駆逐艦
 ボロノイ (ボロノイ) 二等駆逐艦	 ウラール (ウラール) 二等駆逐艦	 ウラール (ウラール) 二等駆逐艦

上圖ニ現ハセシモノハ
 戦闘艦 八隻
 巡洋艦 十隻
 海防艦 三隻
 尚此外上圖ニナキモノ
 駆逐艦 九隻
 特務船 六隻
 病院船 二隻
 合計三十八隻
 凡例
 ●印ハ 撃沈サレシ者
 ○印ハ 武装解除者
 甲印ハ 捕獲サレシ者

五月廿七日午前八時
 露國艦隊
 航路東北十六度
 航進速々約十哩



最前線ニ進ミタル哨艦ニ隊ノ両側ニ配列シタル通報艦兩隻
 隊ノ中間ナル特務船最後ノ二隻ハ病院船アリクニクトアル
 ハ駆逐艦ト知ル可シ其艦名ハ左ニ掲ケタリ

露艦隊幕僚戰記目次

(一)	悲風征衣を吹く……………	一頁	(一九)	日本艦隊は依然たり……………	三〇
(二)	戦闘陣形の目的……………	三	(二〇)	砲彈炸裂の光景……………	三六
(三)	露提督の豫期……………	四	(二一)	烈火熱鐵の旋風半狂亂の猛射……………	四一
(四)	將校等の戰略論……………	六	(二二)	旗艦の焦熱地獄……………	四四
(五)	旗艦の航海長は對馬東水道論者……………	八	(二三)	殘員最後の希望……………	四八
(六)	日本の無線電信……………	二一	(二四)	彈片四邊に飛ぶ……………	四八
(七)	敗軍の前兆歷々……………	二三	(二五)	縋帶所の物凄さ……………	五〇
(八)	旗艦々長の悲喜……………	二五	(二六)	提督居處に迷ふ……………	五一
(九)	和泉と旗艦の態度……………	二七	(二七)	提督再度の負傷……………	五三
(一〇)	萬歳と非常喇叭……………	二九	(二八)	日本艦隊の危機……………	五四
(一一)	艦隊運動の錯誤……………	三一	(二九)	黒煙に火焰の文字……………	五七
(一二)	戰記著者の任務日本艦隊の冒險……………	三四	(三〇)	旗艦の最期……………	六〇
(一三)	震天動地の開幕……………	三七	(三一)	幻覺と夢の萬歳……………	六二
(一四)	驚く可き好射撃……………	三九	(三二)	日本火藥の實驗……………	六四
(一五)	砲彈か水雷か……………	三九	(三三)	艦内藥莖の爆發……………	六五
(一六)	旗艦苦境に陥る……………	三九	(三四)	煙霧中の暗闘……………	六七
(一七)	人員刻々に減少……………	四〇	(三五)	負傷せる提督艦内聞焉無聲……………	七〇
(一八)	假縋帶所の慘狀……………	四一	(三六)	提督轉乘の危険……………	七二

(三七) 暮僚と旗艦の永別……………七
(三八) 提督最後の命令……………七
(三九) 日本射撃の嘆稱旗艦最後の奮闘……………七

附 録

日本海 of 海戦公報……………一
露提督の報告……………七
日本海の大戦と各國新聞の評論……………三

露艦隊幕僚戦記

(一) 悲風征衣を吹く

桅檣の帆架や索條に激する海風は物凄き音して、断れくゝなる黒雲を低く天涯の彼方に追ひ遣る如くに吹きつけ、黄海の澎湃たる濁浪は猛獸の吼ゆるが如き音して戦闘艦の舷側に碎け、蕭々たる細雨は面をうちて冷に、濕氣寒涼殆ど身骨に徹せんとす、斯る薄寒き雨中に數人の將校等が一團となり艦橋の上に佇立して、今しも薄絹の幕を下げたる如くに降り注ぐ細雨の中に次第くゝに其の影を隠す運送船の行手を見送り居るは、旗艦スワロフの幕僚なり。檣頭高く帆架の一端に翩翻として蕭條たる海風に翻るは、是れ萬里遠征の至難なる長航海の我同伴者たりし艦船今我等に訣別せんとして最後の別辭を告げ最後の希望を此の數片の信號旗に語らしめ居るなり。海上に翩翻たる色旗の配合にて表示せらるゝ此の友愛深き別辭が、諸艦の祝砲よりも歡呼の聲よりも鬨曉たる音樂よりも尙ほ強く我等をして感慨に堪へざらしむる者あるは何故なりや、嗟この信號旗——是れ只だ海風に翻り微雨に潤るゝ斑色の練布にあらずして是れ實に活ける言語なり、此の信號旗を下げざる間人々の斯くも熱心に互に沈黙して眺め居るは何故なりや、又其の信號旗の残り惜し氣に靜に下げられし時、彼等が皆な物案じ顔に默然として其處を散じて各自任務の部署に赴きたるは何故なりや、嗚呼是れ實に我等は最後の無

悲風征衣を吹く

言なる握手を爲して最後の別れを告げたるなり。「嗟この厭な天氣」と呼んで艦橋上の寂寞を破れるものあり、誰とも知らず其れに應ふるが如く又嘲るが如き口調にて「結構な天氣ぢやないか若し浦鹽まで行く間こんな天氣が續くなら其れこそ感謝の至りぢや砲臺も何も要つたものぢやない」と云へり。間もなく又他の信號旗は檣頭に翻へれり今度は運送船を上海に送りしにて、今や艦隊の陣形を新に變更して我が最後征途の航進陣形を作るに至れり。

艦隊の前程にはスウェトラーナ、アルマース、ウラールの三艦を楔状陳形にして偵察艦隊を航進せしめ之に續いて艦隊は二列梯陣を作り、右列は第一第二の主戦艦隊即ちスワロフを先頭としてアレキサンダー、ボロチノ、アリヨール、シゾイ、ナワーリン、ナヒモフの諸艦之に續き、左列は第三主戦艦隊と巡洋艦隊の一枝隊より成りニコライ一世を先鋒としてセニヤウイン、アンフラキシン、ウシヤークフ、オレーグ、アウロラ、ドンスコイ、モノマフの諸艦之れに従ふ艦隊の兩側には主戦兩列艦隊の先頭艦と並行線を畫してゼムチユーク、イズムールドの兩艦が側面警戒の任に當り、又此の兩艦には各一隻の驅逐艦が附隨して艦隊を左右兩側面より警護す、其の次に艦隊の中間少しく後方に如何にしても浦鹽まで伴ひ行かざるを得ざるの事情ある運送船アナドイリ、イルトイシ、コレヤ、カムチャカの一隊續航し、其の近傍には給水船並に曳船の任務を有するスウイリとルースの二船が傍ら運送船護衛の爲に續航せり、驅逐艦の第二枝隊は運送船を敵艦隊より防禦する爲め開戦の際巡洋艦に協力するの任務を帯びて巡洋艦隊に續航し、全艦隊の殿後に續くものはアリヨール、カスツロマーの二隻の病院船なりし。(記者曰オヌラビヤの艦列に在らざるは原著の誤りなる可し)

(二) 戰鬪陣形の目的

我艦隊が斯の如き航進陣形を作りたる所以は、一朝敵艦隊の現出する場合に複雑なる艦隊運動を爲さずして(即ち何等の混雜をも來さず)戰鬪陣形に變ずるを得るが爲なり、敵艦隊現出の場合には先驅となり居る偵察艦は敵艦隊の方より廻避して巡洋艦隊に合し各運送船を率ゐて戰場を避け敵巡洋艦隊の攻撃より運送船を防禦す可し、又第一第二の主戦艦隊は速力を強めて諸艦一齊に(諸艦一齊にとは諸艦順次にと相對する用語にて諸艦が一齊に艦首を一方に轉じ一定の位置に就くの謂ひなり諸艦順次にといふ時は先頭艦が廻轉したる位置に第二第三と順次に諸艦が進み行きて其處にて廻轉するの謂ひなり)左方に轉じて第三主戦艦隊の前に進み其より更に以前の針路を取り、斯の如くにして第一第二第三の主戦艦隊は一列單縦陣の陣形を作るに在り我全艦隊の中堅主力を爲すものは即ち十二隻の戰鬪艦なり、ゼムチユーク並にイズムールドの二艦は艦種相當の運動を爲し其の高速力を利用して附隨の驅逐艦と共に敵艦隊の反對方向なる敵の着弾線外に出で、主力艦隊の先鋒艦並に殿後艦と直線を畫する位置即ち側面配備の任務を執る可し、此の側面配備艦の任務は敵の水雷艇の側面迂廻の襲撃を撃退するに在り、以上の陣形は戰鬪準備として豫め畫策せられたる陣形にて全艦隊の各士官の豫め知悉せる所なりき。敵艦隊の現出する方向の如何に依りて臨機に變更す可き陣形の如何や、又射砲指揮の規定や其の他苦戰に陥りたる友艦に對する助力の順序又は將官旗を甲艦より乙艦に移し命令權を讓るの順序、其他詳細なる命令は艦隊命令長官の特別命令書中に記述せられたり、然し斯の如き事の詳細

に渉るものは海軍々事に通せざる讀者に趣味の尠なき事なるを以て之を省略す。

此日(五月二十五日)も無事に暮れたり、同夜セニヤウインは其の機關に破損を生じたり全艦隊は終夜緩速力を以て徐航せり、旗艦スワロフの士官集會室には將校等集まりて種々の談論を爲しネボガトフ艦隊の事を憤り且つ誹謗せり而も此憤激は必ずしも正當のものに非ざりき、何となれば其の憤慨する第二艦隊(ロ提督艦隊)も第三艦隊(ネ提督艦隊)に比し僅に良好なるに過ぎりしを以てなり、我艦隊の長途の遠航は是れ只だ我が汽鐘並に機關機械等の一篇の耻辱なる記録に過ぎずして恰も斧の背を以て裸姿を打ち古き衣を修補するに新しき布を以てせる如き事實を遣せるのみ、同夜は殆んど半歳に亘る熱帯地方航海後の始めて涼しき夜なりしかば、艦隊の乗員は士官水兵共に半數の夜半交代にて備砲の側に在りて交代しながらも皆安眠して此一夜を送りたり。

(三) 露提督の豫期

五月二十六日 夜來の雨雲少しく晴れて今日は薄き日光を見るを得たり西南の風稍や強きも尙は海上には漠々たる濛霧を殘せり。日本の近海を過る際には必ず敵の水雷攻撃を受けるを豫期せざる可らざるを以て日本近海の通過は如何にもして白晝を選ばざる可らず、是に於てカロゼストウエンスキイ提督は全艦隊を率ゐて、五月二十七日の正午には艦隊をして對馬海峡の中程に在らしむる様に時刻を計りて同海峡を通過する事に豫定せり。我が艦隊は斯の如き時間の都合を計れば尙ほ約四時間の餘裕ありて日本近海に到る前に此の四時間を費さざる可からず乃ち其時間を「最後の」艦隊運動の演習に利用せり。

我等は又も故後に古き眞理——即ち艦隊なるものは平時積年の航海實習(後備艦として港内に碇泊し居るに非ずして實際の航海)に依りて造らる可きものにて、種々雑多なる船艦を以て匆忙の間に急造し戰場に赴く途中などにて一致の航海を始めて練習するが如き事にて造り得らる可きに非ざることを見念せしめたり、斯の如きは是れ艦隊に非ずして船艦の偶然なる集團たるに過ぎず。戦闘陣形を作るは(甚だ單純なるを以て)可なり容易に之を爲し得たるも未だ以て充分の運動に非ざりき、特に第三艦隊(ネボカトフ艦隊)の運動は其責任を同艦隊の提督や各艦長にのみ歸す可きものなるや否やを知らざるも兎に角に同艦隊は大事を誤れり、我が第二艦隊(ロ提督艦隊)はマダガスカル若くは安南沿岸の實習航海中に多少なりとも練習を積み且つ各艦互に相識るを得て所謂幾分の熟練を積みたり、然るに第三艦隊は僅々二週間前に我等に合し且つ我が第二艦隊と一致して戰場に赴き共に参加する爲に合せり、既に何等練習を爲すの時日をも有せざりき然るに之を日本艦隊の情況に攻ふるに東郷提督は既に始終提督旗を下さず其の艦隊を統率せると茲に八年間に及べり、今回の對馬海戦に日本側より或は一枝隊の司令長官若くは副官又は艦長として参加したる五人の海軍中將と七人の海軍少將とは皆な是れ東郷提督の指導の下に養成せられたる同提督の朋友若くは其の門下なりき。嗚呼吾人は此一事に關しても我等の不備なる只だ此事の千載の恨事たるを懷想せざるを得ず、目前に迫れる此の戦闘には只だそれ兩軍の手中に存するだけの事を利用し得る一事あるのみ、我がロゼストウエンスキイ提督は左の事を豫想せり、(提督の此豫想は全く實際に契合したり)即ち日露兩艦隊の決戰的戦闘に際して東郷

が必ず最良戰艦十二隻を以て主力と爲して交戦す可きを豫期せり、此敵の主力艦隊に對してロゼストウエンスキイ提督も亦其の自ら統率せる同じく十二隻の戰艦を掲げて之に當るの籌策を立てたり兩海軍勝敗の決は實に此二主力艦隊の決闘に依りて決せらるゝなり、我が露國と日本の主力艦隊の間に大なる差あり而して其の差たるや根本的の等差なり、即ち東郷艦隊十二隻の戰艦中の最舊式の戰艦富士を以て我が露國の十二隻の戰艦中に其の年數に依りて六番目に位する戰艦シロイに比較するも其の年數に於て富士はシロイよりも尙ほ二年若し、又敵艦隊の速力は我が艦隊に比すれば二倍半の優勢を有せり、特に日本艦隊の重要な最特長は其砲彈の悉く新式なるに在り、吾人は此の事に就きては既に戰爭前より之を確信せり。

(四) 將校等の戰略論

五月二十六日 此日も艦隊最後の演習に匆忙の間に暮れたり。他艦の情況は知らず我スワロフは士氣大に振ひ甚だ有望なり幾等か配慮過ぎたる狀況なきに非ざりしも左まで無益の多忙といふ程にはあらざりき、士官等は平常よりも頻に部下の者を見廻りて其部署を監視し喃喃として或は心得を説き或は説明を與へ又は職務の事に就て自己の部下同勤者と論争し居る者などありたり。又或者は急に思ひつきし如くに大切なる紀念の品物や今認めしばかりの書面などを金庫に保管を託する者などもありたり、掌砲長ウラジミル大尉は余(著者)の肩をたゞき今しも熱心に何ものかを皮靴に詰め居る水兵を指さして、「君見給へまるで旅行の仕度でもして居るやうぢやないか」と云へり。余は詞を返して、「君の仕度

はもう出来たのか」と問ひたるにウラチミル大尉は一寸驚いたやうな風に「僕か」といつて急に微笑をもらし「まあ仕度が出来たと想つてくれ給へ」と陳へたり。此の時我等の側に來りしボクダノフ大尉——彼は過去の戦役の老功者にて大沽を陥落せしめたる際に負傷せる勇士なり、——彼は我等の談話を遮りて「其様な事は今夜せんでも明日にして澤山だ一寸事務室に來てくれ給へ會計上の要事があるから」と我等を促せり。此勇士には何等の事體が目前に迫り來るも何等の感じをも與へざる者の如くなりき此時、兩手を衣套に指し込みながら其處に來りし青年の少尉試補(彼も今認めたる書面を金庫に保管を託する爲に來りしなり)は彼等に詞をかけて「貴官は一度戰爭に出られた方ですが」貴官には何んの感じも起らんですか」と問へり。ボゾノフ大尉は少し怫とした様子にて僕は君の卜者でもないから君の感じはわからん然し明日になつて我等の身邊に日本砲彈が一發二發と飛んで來れば我に何事かを感じるだらう然し豫め感ずるやうな事は僕等には何も無いねと愛想なき答へを爲せり此處に數人の將校等集りて意外なる時に、「對馬海峡にて我等の邂逅す可き日本艦隊は或は日本艦隊の全部なりや或は其一部なりや」との問題起れり。樂觀的なる見解を懷き居る士官等は斷言して曰く、東郷は我等の欺く所となりて我が艦隊を北方に於て要し居るに相違なし何となればテレーク並にクバンの二艦は既に九日前に東海岸に航し此の事既に日本に喧傳せられ居るに相違なきを以てなり、と主張せり左れど運命は我等に不利なりき、テレーク、クバン二隻は此時更に他の船舶に邂逅せず同艦の所在點は何處なるか風聞にだも傳へられざりき。之に反對する一部の將校等の曰く東郷が事體に通じ居るは決して我等に譲らざる可し、日本の東方を廻航するには必ず一度は石炭を積取らざる可らざるに一の石炭積

取り場處もなき事は東郷の既に熟知する所なり、今日本の東方を廻航すると假定するも何處に於て石炭を積取る可きか此廻航の海上は既に熱帯地方と同じからず、天候も測り知る可らざるを以て到底外洋に於て石炭を積取るを得ざるなり、然らば何處なりとも海灣に入りて之を爲さんか何處の灣にも電信あり又勿論到處に哨艦の配備あるに相違なし東郷は隨時報告に接して適時必ず北方に急ぎ得るに相違なし、若し我が艦隊は僥倖に外洋に於て石炭を積取敵の哨視を免れて幸に北方海峽の何れなりとも其一箇所に密かに到着し得ると假定するも而も決して成功を期す可らず北方の海峽(津輕並に宗谷)は何れも狹隘なるを以て是等海峽通過の際には必ず敷設水雷の遮断若くは航路に投せられたる浮流又は白晝にも尙ほ容易に決行せらる可き水雷攻撃等に際會するを免かれず、若し海上に濃霧あるか或は天候不良ならんには是等海峽は到底諸船の通過特に尙ほ運送船を伴ひ居る艦隊などの到底通過し得べきに非ず、勿論我等は天幸に依りて北方の海峽を首尾好く通過したりとするも其の後果して如何なる可きか、對馬方面に在る日本艦隊は我艦隊の針路遮断に急駛來航し得るは甚だ容易なり、反之我が艦隊は既に海峽にて敵水雷艇の攻撃を受け各種水雷の爲めに幾多の損害を受けたる後に更に日本艦隊と邂逅する事となるなり云々と論せり。

(五) 旗艦の航海長は對馬東水道論者

旗艦の航海長一等大尉ゾトフは議論好きの辯者なり、彼は將校等の談論を制止するが如き聲にて「諸君一寸待ち給へ僕の説は斯うだ」と言ひて左の如き説を爲せり。曰く艦隊の通過す可き最良の航路は朝鮮海峽の東水道たる可きや勿論なり、余の意見を以てすれば他に如何なる説ありとも此朝鮮海峽の秀越なる點は海峽の幅も廣く海も深く艦隊の運動自由にて如何なる天候の時にも航海上に何等の危険も無きに在り、天候不良なれば我が艦隊に取りては寧ろ幸福なり、是れ既に幾たびか論議せられ論究せられたる所にて何人も異論なき所なり、東郷は我等より愚昧ならずとせば東郷も亦能く悉く此事を知り居るものと想像せざる可からず、又東郷にして同じく兩脚規と數學の四則の應用を知れりとせば我等が日本の東海岸の迂廻を爲す如き策略に出づるとも東郷は此事を察知するに苦まず、我艦隊に邂逅せざる前に先づ水雷攻撃を以て我等を迎へ然る後に我等が大洋より海峽に入りて對馬の北端に出でんとする時我浦鹽に向ふの航路を扼するに相違なし諸海峽の水雷防備は既に久しき前より完備せるに相違なし、青森並に室蘭の軍港は是れ側面の防備なり、若し此の事體を解せざる者あらんか是れ耻づ可き次第なり、東郷既に水雷艇隊の技隊を分置せりとせば其主力艦隊(或は全艦隊と云ふを得べし)を率ゐ居る彼は何處に在りや、或は問題を更に適切ならしめば主力艦隊を率ゐ居る東郷は何處に在らざる可らざるか彼の所在は對馬北端附近を除きて他にある可らず、且東郷は外洋に漂蕩し居らる可きに非ざれば彼は必ず何れかの灣内に在るものと断定せざるを得ずと云々。航海士の一人バーリ少尉はゾトフ大尉の言を遮りて「例へば馬山浦」と叫びたり、ゾトフ大尉は直に辭を繼ぎて其れ或は馬山浦ならん然し先づ我輩の言ふ所を聞く可し、日本の主力艦隊の不在を期する如きは最も幼稚なる考なりと云はざる可からず、余の考を以てすれば我等は今實に最危険の絶頂に達せり萬事は明日を以て決せらる可し、(ゾトフ大尉は手を上より下に強く動しながら)或は縦に一刀兩斷に決せらるるか或は(彼は

又手を静かに右の方に動かして手を書物の上に置きながら、漸々に日の暮るゝ様に決せらるゝか何れか其の一なる可しと。ゾトフ大尉の談の終るや否や四方から「何うして何せ日の暮るゝ様にや」との反問の聲が聞えたり、航海長ゾトフは之に答へて左の如く言へり其故は若し一刀兩断に決せられずとも其結果は同じきが故なり、我が艦隊が勝利を得て浦鹽に赴き制海權を握らん事は夢にも之を想ふこと能はざるなり只海峡を連れて通る事は或は之を爲し得べきも、二隻か三隻多くして四隻通過し得たればとて其時は既に石炭も焚き盡し、花満開に至らずして先づ散るの運命を免かれず、間もなく（浦鹽の）籠城の準備を爲し大砲を艦上より陸揚し乗員をして敵襲防禦の演習を爲さしめざるを得ざる可し、と云々此時或者は佛語にて叫んで曰へりユライ豫言だと又他の者は英語にて云へり謹聴々々素張らしい議論だ、と水雷長バグダノフ大尉は胸聲太く「其騒ぎは何だまるで塊地利の國會のやうぢや先づ静にしてゾトフ君の説を聞く可しだ」と言へり、ゾトフ大尉は少し静になりしときに言を續けて左の如く云へり曰く、諸君が其の様に激する未來の問題の解決は暫く措きて余は尙ほ近き將來の事を一言す可し余は茲に豫め三様の場合を想像するを得べし即ち第一に若しも我艦隊にして既に敵の認むる所と爲り居るか或は今日の中に認められんには今晚必ず猛烈なる敵の水雷攻撃を受くべし而して明朝は日本艦隊と交戦せざる可からず是は甚だ感心せず、第二に若しも我艦隊は明日に至りて始めて敵の認むる所とならば我等は少しも損害を受けざる完全なる全艦隊を率ゐて戦闘を始む可し——是れ稍や可なり、第三に若し海上の濃霧依然として晴れず或は天候の不良に乗じ海峡の廣きを利用して我艦隊が全く海峡を通過するか或は少しく後れて敵の發見する所とならんか我艦隊と浦鹽の間は既に障害の無

き海上なり——是れ更に一層都合好し、諸君は此三箇の豫想中より各自の賛成するを得る豫想を取りて賭を爲すべし、我等は危険に備へ不安なる夜を目前に控へ居るも諸君が元氣を蓄へる爲に閑暇を利用して安眠せられん事を希望すとゾトフの談論は是れにて終れり。

（六） 日本の無線電信

今までの情況にては我等の運命は甚だ幸運なるが如し我が艦隊は未だ敵艦隊の認むる所とならざるなり、我が艦隊にては無線電信の交換を一切停止せり左れど日本側の無線電信は勉めて之を受信する様にして電信技師は日本の無線電信の來る方向等を定むる爲に全力を盡せり、既に五月二十五日の夜並に翌二十六日に日本側の二箇所の無線電信發受所に於て電信を交換し居るを認めたり想ふに我が艦隊の前に接近し居る一箇所の無線電信は報告を爲し他の一箇所の遠く左舷の方に在る發信所より是に答信を爲し居る者の如し、其の電信音符は暗號音符に非ざりき我が電信技師は他國の文字に習熟せず又受信に脱漏あるにも關せず我が受信機に感せし文字の示す所に依れば切れ／＼の語と簡短なる文句さへも解するを得たり、即ち受信機に感じたる電信音符には「昨夜……何事もなく……燈火十一然し不順序に……明るき燈火……星光の如く……など其の他の言句を読み得たり。此の無線電信は是れ必ず九州の五嶋地方に在る沿岸の有力なる發信局より海峡地方に望見したる事を何處にや遠距離に在る受信局に報告せるものなる可し。

夕刻に至りて又他の一箇所より無線電信の交換談話あるを感受し夜間には七箇所よりの電信を感受せ

り、是等の電信は既に何れも暗號音符なりき左れど其の電信が何れも簡短一樣にて其の電信が一定の時間に始められ又終る等の事より考ふれば是れ報告の電信に非ずして偵察艦の點呼を爲し居る者なる可し、我が艦隊が未だ敵の認むる所とならざるは更に疑ひなし。

日没後我艦隊の各艦は出來得るだけ互に接近して航進せり、敵の水雷攻撃を豫期し居るを以て士官水兵の半数交代を以て備砲を警戒し他の一半は其の部署の附近に被服のまゝ寢臥して非常喇叭を聞けば直に其の部署に就くの用意を爲し居れり、夜は全く闇夜にて濛氣は愈々濃密になり其の間に見ゆる星影も稀少になれり、暗黒なる甲板は闇として音なく往々睡眠し居る者の鼻息と巡視士官の聲音または何事かを小聲にて命ずる聲などを聞くのみなり、備砲の方を眺むれば砲側に不動の姿勢を以て直立せる砲員の黑影を認め彼等は皆な警戒の視線を暗中に向けて敵水雷艇の黑影今や見ゆると一波一浪の動く状にも注意し敵艇機關の震響蒸汽の嘯く音やするとマストに戦ぐ風にさへも心せり。余は甲板に熟睡し居る者の妨げを爲さずと深く注意しながら躡足して艦橋を降り甲板を通りて機關室に下りたり、暗黒の世界より電燈の光煌々たる室に入りて余は殆ど眩目せり、此の室には生命もあり活動もありて人々は何れも活潑に歩み梯を上下せり、機關の音や人々の叫び聲も喧しく聞え又命令なども高聲に傳へられたり、左れど能く注意して視來れば余は此處にも甲板上に於ける注意と警戒の状とを認めざるを得ざりき。

（七） 敗軍の前兆歴々

俄然余が目映じたるは艦橋と其の周圍の光景にて背高き我が提督が艦橋の欄干に軽く倚れ居る風姿又は眉を顰めて羅針盤を眺め居る舵手の顔、備砲の側に石像の如く動かすに佇立し居る砲員舷側に碎くる澎湃たる波浪鐵具の鈍き光り、機關より吹き出す勢ひ強き蒸汽など皆な我眼に映じたり。船幽靈の事の昔物語は忽然として我が心に浮び出でたり此の船幽靈は船中の何處にても鉸釘にも只だの釘にも累旋にも附き居りて船の轉覆する如き危急の場合には船も人も皆な之れを取りて一の無形なる自然以上の實體に化すると的事なり、今此の船幽靈が余が心中を洞見して無形なる靈力にて余が心を鈍らせる如く感じ其の刹那に此船幽靈の名がスワロフと云ふ様に解せられ、此スワロフ幽靈の前には我等各人の生命の價値は釘一本の價だもなしと感せられたり。而も是れ一時の妄念なりき、夢の醒めたる如くに我れに歸へれば異様な一種の元氣と強き果斷の感じが心中に残れり。機關長ウエルナンデル大尉は余が屢々共に航海したる舊友なり彼れは余が居りし近くにて何事にや怒りを帯びて頻りに部下の士官を叱責し居りたり、余は彼の言ふ事を能く聞かざりしかば萬事既に全く定り善も惡も豫め斷言するを得ざる今日となりて彼は何を其の様に激し居るにや更に解するを得ざりき。余は彼の手を引き「君執拗く言はんでもモー澤山じやないか咽喉が乾いたから往いて茶でも喫ふ」といへり、彼は驚きたる様子にて潤澤のある眼にて余を睨み引かるゝまでに余に従ひ來れり、我等は共に梯を上りて士官集會室に入りたり平常なれば今頃は何時も此士官室は賑かにて人々多く集り居る時刻なるも今夜は殆んど人氣なく二三人の將校が長椅子に横臥して非常喇叭或は其の交代を待ちつゝ眠り居れり、只だ當番の從卒のみ起き居りて我等の爲に紅茶の用意を爲せり。又も周圍は闇として物凄し艦尾の方の扉

の開いて居る一室より小聲にて「今頃短氣を出しても仕方がない一層大切な事がある一發の良射撃は二發の不良射撃よりも好い浦鹽までは一發も不用の砲弾はない何處からも砲弾の得どころがない……」と呟く如く言ひ居るは少尉試補のホミンなる可し。

機關長ウエルナンデルは熱き茶に咽せながら聲を勵まして「人を教へる氣だ」と叫びたり、余はウエルナンデルが何かに非常に怒り居る事を認めれば彼の心を鎮めんと試み「君一體何うしたのだ何か非常の事でもあつたのか」と問ひたり、彼は四邊を見廻しながら低聲にて獨逸の請負炭は實に怪しからん炭じや石炭庫で屢々自然に發火する事のあるのは君も識つて居るだらう「知つて居るとも然し仕合せな事には何時もうまく消したではないか又も發火したのか」否やさういふ次第ぢやない其發火して發火して消した石炭とは全く別種のものぢや最良炭の二十倍も高い者ぢや」余は此の言を聞きて實に大に驚きて「何うしたと君、君何うしたのだ君は石炭の消費の事を争論したのか君等は今までに石炭の殘餘を皆な費したのか我れ等には今充分の適當なる貯炭の準備が必要ぢやないか」然り充分か不充分か知らないが明朝までは殆んど千噸足らずあるだらう」さうか然し浦鹽まで六百哩もあるぞその外まだ何處にか」然し君、八月十日のツエザレウィッチの事件を忘れたか、十日の日に同艦は其の煙筒を破られた爲に一晝夜に四百八十噸の石炭を焚いたではないか、我等には尙ほ多く消費したといふのか」と問答の未余は談話を他に轉せんと試み「何に石炭を消費したといふのではないサ只だ君等が餘り神經を費ひ過したといふのサ石炭庫が残らず焼けたわけでもあるまい」機關長ウエルナンデルは憤然として「君は更に要領を得ん」と言ひ茶を一氣に飲みほして帽を取りて何處かに去りたり。

(八) 旗艦艦長の悲喜

ウエルナンデル大尉の去りたる後余は獨り士官集會室に残りて安樂椅子に凭れて假睡せり、夜半に交代の爲に艦内一時騒々しかりき交代せる將校等數名茶を喫せんと士官室に入り來りて低聲に夜氣の薄寒き事などを話し居れり、誰にや長椅子に横はりたる將校の一人は如何にも満足さうに聲高かに「先づ是にて宜し四時まで寢やう眠れば極樂ぢや」と云へるものあり余も同じく一睡せり。余は朝三時頃に起きて再び甲板の上に出でたり、甲板の上は夜前の光景と少しも異ならず只だ少しく明るくなれり、弦月尙殘れども光華已に淡く煙筒マスト艤装具などの半面を銀色に書き出せる風光物凄し折しも又々時化いだしたる風は如何にも寒ければ思はず首を襟の中に隠したり、前艦橋に登りしに口提督は艦橋上の安樂椅子に凭れて安眠し居られたり、艦長は軟かき上靴を履きて足音たてざる様に艦橋の上を横に往復し居れり艦長は余に向ひて「何處を徘徊し居るか」と問へり、余は唯一言「巡視して居りました」と答へたるに艦長は「寢たのか」と問返せり余は提督の方に頭を揺かして知らずとの意を示せり。艦長イグナツウス大佐は余に向ひて次の如き談話を爲せり、曰く今我れ等は種々の談話を爲せり實際果して如何なる可きか兎も角も今夜は無事に明く可しと思はるゝなり我艦隊今までは尙ほ敵の認むる所とならず敵の無線電信は始終點呼を爲し居れり、假令敵が我等を發見する事ありとも今となりては既に晩し夜明けには僅に二時間を餘せるのみなり、日本人の掌裡に水雷艇あるも今は準備の違なし又斯る天候にては敵は我等を何處に發見し得べきか、見よ我艦隊後續艦の艦影は我等さへも之

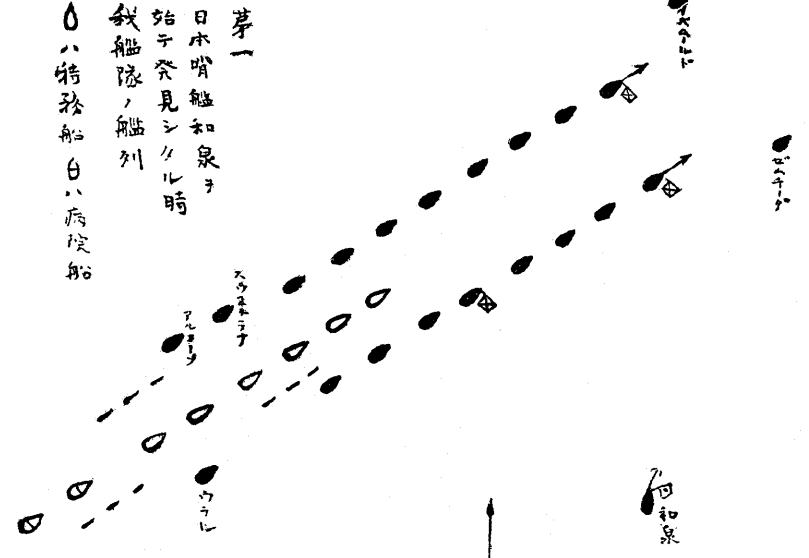
を望見するを得ざるに非ずや、誰にもあれ偶然艦首を以て衝突し來る者あらば开は二萬留の公債證書を圖らず拾ひ得たるも同様なり、只氣に入らざるは此風なり又も烈しく吹き出せり濃霧を吹き拂はずんば明日は雨覆ひを爲さざる可らず或は濃霧は急に一層深くなるやも知れず云々と云ひて、艦長は一段の元氣を加へ又語を續けて曰く我等は既に迂廻漂蕩一晝夜に及ぶも尙且つ敵の認むる所とならず明日も亦斯の如くならん敵が全くうか／＼して何所かを漂泊航走して點呼を爲し居る間に我が艦隊は既に此邊に居らずなる可し、彼等日本人は我等の二度目の來航し更に浦鹽より出直し來る迄暗中を摸索し居るなるべし、彼等日本人は悔恨憤慨に堪へざる者ある可く實に愉快極まれる話に非ずやと言ひ了りて艦長は左も愉快氣に笑ひ提督の安眠を妨げずと口に帕巾をあてゝ笑聲を抑へたり余は其の無邪氣なる狀を羨ましく思へり元來イグナツウス艦長は如何なる見解を懷き居りし人物なるかを茲に一言せざる可からず、第一に艦長は我艦隊の此遠征東航を以て絶望的の冒險なりと爲し其の成功は一に天佑に依頼するあるのみと爲せる所信を懷き居る者の一人なり、第二に艦長は日本艦隊の運動如何を豫想し日本艦隊は其全艦隊の砲火を我が旗艦スワロフに集中せんこと必然なるを以つて第一回の決戰的戰鬥に於て彼れ自身と彼の乗れる戰艦とは到底滅亡を免れざるを確信せるなり、左れど大佐は此の免れ難き運命を認め居るも一刻と雖も愉快なる元氣を失ひし事なく嬉々として或は戯れ或は諧謔の言を弄し船中生活の無聊に少しも書まざる常に快活なる生活を爲し居れる人なり、今同艦長は單に日本艦隊の不連なる實際我等を見逃したる場合を想像して彼は衷心より哄笑せるのみ。

（九）和泉と旗艦の態度

然るに日本艦隊は莫大なる幸運の利益を博したるに同じ者ありき、五月廿七日の天明五時頃に日本の假裝巡洋艦信濃丸は偶然にも我が病院船と邂逅せり、是れに依りて遂に我が艦隊は敵の發見する所となれり我が主力艦隊よりは信濃丸を認むるを得ざりしも我等は信濃丸の認むる所となれり、今は日本側の無線電信の通信も其の性質を一變せる事さへ明かになれり、日本の電信は今既に點呼の類に非ずして報告となり而も北へ北へと遠く發信報告するものなる事を識りたり。我が旗艦は四方より來る敵の無線電信を感受せり、是に於て提督の命令に依り我が艦隊の無防禦の背面(運送船の一隊)を敵の不意なる襲撃より警戒する爲めに偵察艦の一枝隊を遣はして艦隊殿後の要鎮たらしめたり。

朝六時頃にウラルは全速力を以て我等に追ひ近づき海上信號器を以て報告を爲して曰く我が艦隊の後方に當りて右舷の方より左舷の方に向ひて我が航路を横斷する四隻の船艦を認めたり但た濃霧深きが爲に其の艦種等を詳かにするを得ずと。其後六時四十五分に至りて右舷の方直横に當りて何船にや模糊たる船影を認めたり同船は我が艦隊に接近する航路を取り來りしが間もなく是れ和泉なる事を明かにせり、八時頃に至りて濃霧漠々たるにも關せず和泉までの間隔を測定するを得て五十ケートルなる事を確めたり、旗艦の甲板上には唳喚たる非常喇叭の號音響き亘りて艦尾砲塔の十二吋砲は儼然として其の砲口を指上げたり、和泉は能く其の危際を判知して急速に我が艦隊より遠離し始めたり我が艦隊は遠く和泉を驅逐する爲に最良巡隻艦の一隻を遣はすを得べかりしや勿論なり、左れど若し斯の

如き任務を命ずるとすれば我が巡洋艦の一枝隊中に此の任務に當るを得べき者は只だオレ一ツ並にアウロラの二艦あるのみなり、或は偵察枝隊のスウェトラーナも其任に當るを得べきか其他のドンスコイ、モノマフの如き船艦に至りては假令その備砲こそ鋭利なるものなれ何れも速力遅緩なる舊式艦にて又ウラルアルマーズの兩艦は其の速力優強なるも備砲は何れも玩具も同然の大砲なり然るに恐る可き敵艦隊との邂逅は刻一刻に急迫し、一砲一弾と雖も之を大切にせざる可からざるの期は近づき來れり若しそれ我が三箇の主戦艦隊が十二隻の日本の最良艦と實際に決闘的の戦争を爲さんか諸他の日本軍艦は全力を擧げて我が巡洋艦の枝隊に當る可し格闘には其の力を保持せざる可らず、故にロゼストウエンスキ一提督は傍若無人なる和泉の行動を輕視して



更に之を驅逐する船艦を遣はさざりしなり。午前八時過ぎに(譯者曰く第三艦隊の戦記者は鎮遠其他の艦隊の現出時刻を九時四十五分と算せり發見時刻は旗艦よりも後れたるにや) 我が艦隊の前程左舷真横に當りて濃霧の間より鎮遠、松嶋、嚴嶋、橋立の四艦が我が艦隊と並行の針路を取りて航進するを認めたり、是等四艦の前程に或は秋津洲に非ざるかと想はるゝ一小快速巡洋艦の航走するを認めたり同艦は我が艦隊に認めらるゝや(彼等も亦我等を認めたるなる可し) 急駛北方に航走せり、其他の日本艦隊の枝隊は徐々速力を増加して漸次視線外に隠れたり。十時頃に至りて同じく左舷の殆んど真横に當りて快速巡洋艦の一枝隊千歳、笠置、新高、音羽の諸艦を望見せり決戦時刻の愈々切迫せる事明瞭になれり。

(十) 萬歳と非常喇叭

信號命令に依り第一第二の主戦艦隊は速力を増して一齊に左舷二點の廻轉を爲し第三主戦艦隊の前に出でんとするの運動を始めたり各運送船は艦隊の右舷後方より續航す可く又各巡洋艦は運送船を左方より之を蔽ひて防禦す可きを命せられたり、各運送船の右方には和泉の方面よりの襲撃を警戒する爲にモノマフを遣はして配備せり。

十一時二十分に我が艦隊と日本の快速巡洋艦隊との間隔五十ケーブルなりき、此の時アヨールより(同艦が直に海上信號器を以て此の事を報告せる如く) 突然不意の發砲を爲せり、此の發砲は無煙火藥なりしを以て諸艦は先鋒艦の何れより發砲したる者なるやを識別するを得ず全艦隊は旗艦スワロフの戦闘開始の信號と誤りて忽ち各砲火を開き特に第三主戦艦隊は活潑なる多數の發砲を爲せり、日本の

巡洋艦隊は忽ち左舷に廻轉して同じく砲火を開き且つ急に速力を強くして遠離し始めたり
 旗艦スワロフは信號を掲げて「砲彈を無益に投ずる勿れ」と命じたれば發砲は忽ち停止せり、又此の時旗艦の信號は「乗員交代を以て喫飯を爲す可し」と命令せり。

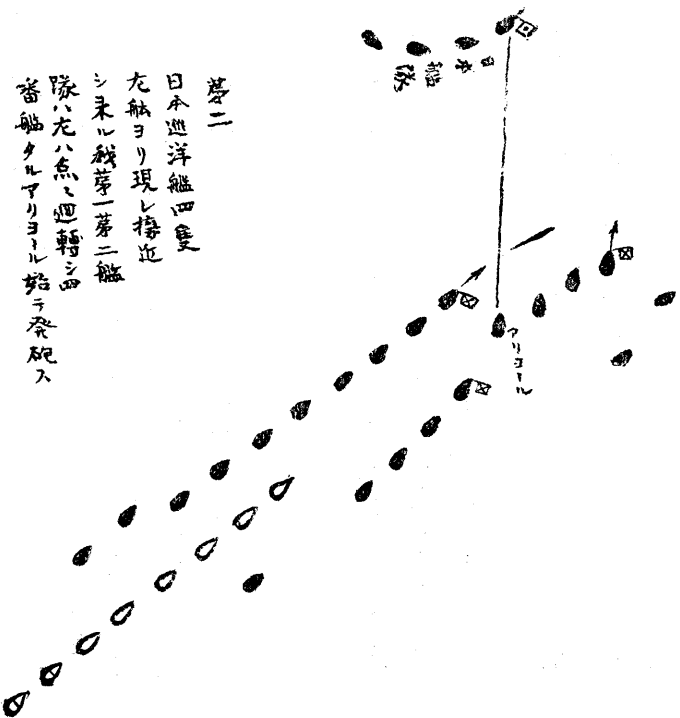
正午我が艦隊は對馬の南端と並行し北二十三度の針路を取り浦塩指して進航したり各將校等も交代にて食事を爲し皆な急ぎて之を濟せり、此の日は平常なれば（露國皇帝陛下戴冠式の紀念日）士官集會室には提督艦長並に幕僚等を賓客として盛宴を張る可きの日なり然し現下の事情は勿論此の盛宴を設くるを許さず——提督と艦長とは始終艦橋を下らず只だ幕僚の人々は交々艦橋を下り來りて提督の食堂に入り急ぎて食事を爲せり。

余は戰鬪開始前に卷煙草を澤山に用意せんも

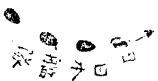
のと思ひて艦橋を下り偶然士官集會室に入りしに今しも嚴かなる式を爲さんとする機會に遇ひたり、食物を盛りたる皿は一同に配られて各思ひ／＼に食事を爲し居るにも關せず大盃に三鞭酒を酌み列席者一同起立し皆な嚴肅に沈黙して佐官マケドンスキイの祝盃の辭に耳を傾けたり曰く「陛下の神聖なる戴冠式の記念日なる今日を以て我等が潔く祖國の爲に盡さんとする赤誠に天帝の佑助あらん事を祈る皇帝陛下並に皇后陛下露西亞帝國萬歲」と發聲せり。列席の士官一同も其の聲に和して最も熱切にウラーを三呼せり其の最後のウラー（萬歲）の歡聲は折しも甲板上に鳴り互れる唸唸たる戰鬪用意の喇叭の音と和して彌が上にも勇ましかりき、斯くて士官は急ぎて各自の部署に就きたり。日本の快速巡洋艦の一隊は再び左舷の方より接近し來れり、今度は一隊の水雷艇を率ゐ來りて正さしく我が針路の前程を横斷せんとするものゝ如し。

（十一） 艦隊運動の錯誤

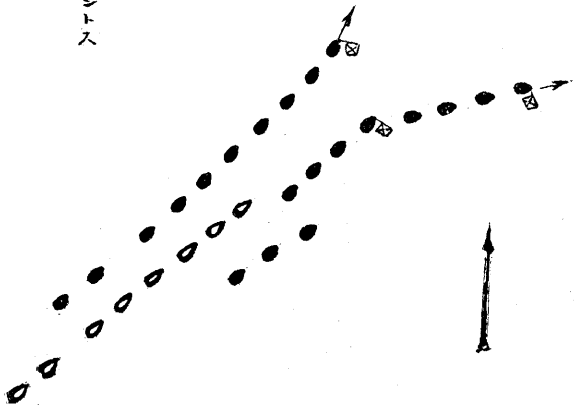
日本の快速巡洋艦隊が水雷艇隊を率ゐて我針路の前程を横斷せんとする企圖は或は是れ我が艦隊の前程に（日本人が此事を八月十日に爲せる如く）浮流水雷艇隊を以せんとするに非ざるかの疑ありしを以て我提督は最良戰艦五隻の砲火の猛威を以て敵を驅逐する爲に第一主戰艦隊をして右舷正面展開を爲す事に決せり。第一主戰艦隊は此目的を執行する爲漸次に右舷（九十度）の廻轉を始めたり、次で一齊に左舷八點の廻轉を爲さる可からざりしなり此艦隊運動の前半の運動は見事に行はれしも後の運動は信號の誤解の爲に大失策を演じたり、即ちアレキサンダー誤りて旗艦スワロフの艦尾に續航する



に至りしがば此時既に一齊の廻轉を始めたる
 ボロチノ並にアリヨールの二艦は自ら運動を
 誤りたりと想像して向き直り同じくアレキサ
 ンダーの艦尾に續航するの針路を取りたり、
 斯の如き錯誤の結果第一主戦艦隊は正面陣形
 を作る代りに第二並に第三主戦艦隊の梯陣と
 並行し少しく其の前方に運動して同じく一列
 梯陣を作りたり、左れど此失策運動は兎に角
 に期する所の目的を遂ぐるを得たり、敵の巡
 洋艦並に水雷艇は我等が階陣を作りて二箇梯
 隊を以て迫らんとする我艦隊の二方面よりの
 砲火を受くる危険に畏怖して我針路前程を横
 断する企圖を止め急速に左方に避け始めたり
 思ふに此巡洋艦隊は東郷提督に我艦隊が二列
 梯陣を以て航進せりとの報告を爲せしなら
 ん、而して東郷提督は尙此時我等の右舷の方
 遠く前方の視線外に在りたるを以て彼は其全



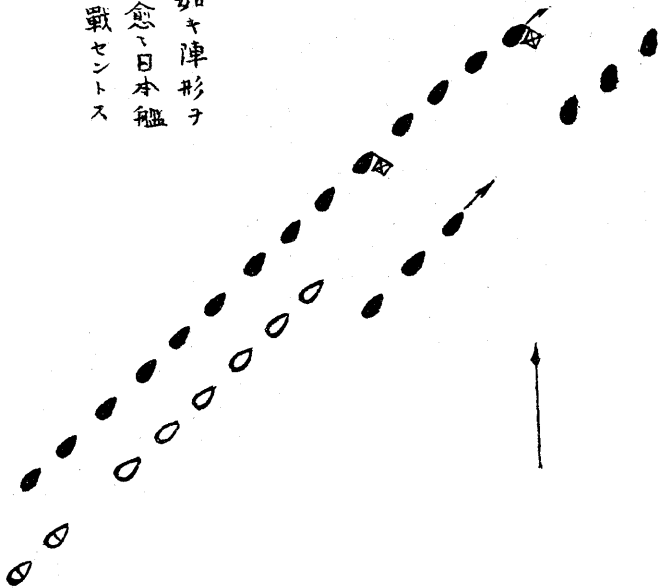
第三
 我艦隊は日本
 巡洋艦現レ水雷
 ナ次設セントス我
 艦隊は下圖ノ如ク
 轉回シテ之ヲ挾撃セントス



力を擧げて我が最も薄弱なりと察せられたる
 左列の梯陣を突破するの決意を爲せり、然る
 に日本巡洋艦隊の見えずなるや否や我第一主
 戦艦隊は直に速力を増して再び第二主戦艦隊
 の前に位置を占めんが爲に左舷に廻轉せり。
 午後一時二十分第一主戦艦隊が第二並に第三
 艦隊の艦首前に進むや否や従來の針路の方に
 轉じ始め「第二主戦艦隊は第一主戦艦隊の艦
 尾に續航す可し」との信號を掲げたり。此時
 遙か前方に當り濃霧の間に日本の主力艦隊の
 艦影を認めたり、敵の主力艦隊は右舷の方よ
 り左舷の方に向ひ殆ど西南の針路を取りて我
 が針路を横断するの方向に進航せり斯くて我
 艦隊の左方に來るや否や敵の旗艦三笠は舵を
 轉じて南に向ひたり、敷嶋、富士、朝日、春
 日、日進の諸艦も三笠に續航せり、此時既に
 旗艦の線縦は司令塔に移されしもロゼストウ

身四

下圖ノ如キ陣形ヲ
 造リテ愈々日本艦
 隊ト決戦セントス



エンスキイ提督と其幕僚とは尙ほスワロフの前艦橋の上に在りたり。

余は正直に告白すれば東郷提督が十二隻の戦闘艦を率ゐ大擧し來る可しとの口提督の意見には充分同意する事を得ざりき、東郷提督は八月十日の戦闘に六隻の戦闘艦に當時彼の掌中に在りし二隻の裝甲巡洋艦を加へず獨立枝隊を成さしめたる事實に徴して余は今回も亦東郷は十二隻の戦闘艦を提げ一列を爲して來る可しとは想はざりしなり、余は想像して上村が一枝隊を爲して特別に行動す可しと思ひ且つ往時の旅順の舊知なる六隻の艦影を懐想しては我が提督に向ひ「閣下御覽なさい八月十日の如くに敵の主力艦隊は皆なで六隻の様です」と斷言せざるを得ざりき、口提督は余の方に振り向きもせず頭を横に揺かして「イヤもつと多いぞ皆な彼處にある」と云ひながら司令塔の方へと下り行かれたり、艦長も提督の後に従ひて下り行きながら「さあ位置に就き給へ」と人々を急立てたり。提督の見は實際なりき、前に進み來れる六隻の戦闘艦の後方糺糊たる濃霧の間より微かに蜿蜒たる長蛇の如くに
出雲、八雲、淺間、吾妻、常磐、磐手の上村巡洋艦隊の徐々航進し來るを認めたり。

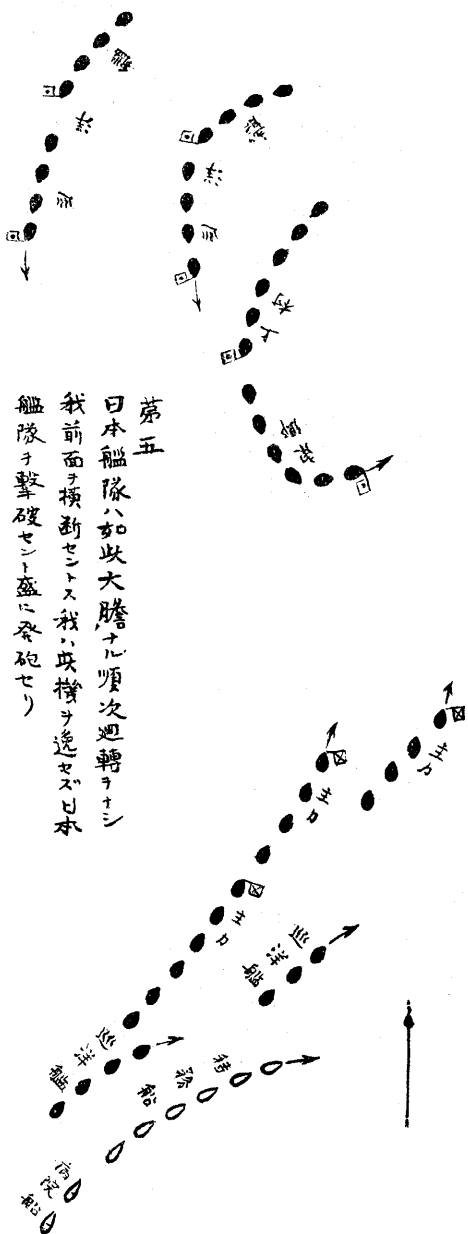
（十二） 戦記著者の任務日本艦隊の冒険

余は唯り敵艦隊の行動のみならず我が全艦隊の運動をも望見するを得べき後艦橋に赴きながら「勝利を期す可し」と思へり、余は戦闘の實況を觀て之を詳記するの任務を與へられたれば此の任務を遂行する爲には後艦橋を以て最も適當の觀戰場となしたり、斯くて後艦橋に到れば其處には右舷艦尾の六吋砲塔の指揮官たるレドキン大尉居合はせたり、彼は今の戦闘が左舷の方より始まるは明なれば右舷

の諸砲は暫く用なきを認め戦闘の状況を視察せんとて此處に來れるなり。我等兩人は船橋の上に立ち我艦隊の右方には運送船もあり且つ之を護衛せる巡洋艦も皆な右舷後方に在るに日本艦隊は何故に右舷の方より邀撃せずして左舷の方より來襲したるやと之を怪みつゝ時々筆を下して記録を爲し居たり。想ふに日本艦隊は能く風位を利用して戦ひ且其高速力を利して我が艦隊の背面に迫り我運送船と殿戦艦とを一擧にして撃滅せんととの戦畧を取らんとしたるに非ざるか、果して然らば只だ是れ最も怖る可き十字火の下に陥る危険を冒すのみ、レドキン大尉は喜ばしさうなる聲を張り上げん「君見給へ見給へ君どうするのか彼等日本人は何を爲さうとするか」と絶叫したり。左れど余は双眼鏡を離さずに日本艦隊の行動を熟視し日本艦隊が順次に左舷に廻轉して逆進を始めたる光景を自ら幻影を見るが如くに想像して望見せり。若し讀者は前に述べたる廻轉運動の事を想起せば（即ち順次廻轉とは後續艦が先頭艦の廻轉したる位置に來りて同じく廻轉する者なる事）日本艦隊の此運動の事も自ら明かなる可し、即ち日本艦隊の諸艦は各々其先頭艦の廻轉したる位置に來りて始めて廻轉するものにて此廻轉の位置は海上に於ける一箇の動かざる點も同様なれば我艦隊が其點を目標とし其處まで來りて廻轉する敵艦を一々砲撃せば我に取りては非常の利益なり、且其速度は十五哩なるを以て陣形變更に約十五分を要する計算に當り其十五分間先きに廻轉したる諸艦は尙ほ廻轉位置に在る諸艦に妨げられて自ら其射撃を行ふを得ざるなり、レドキン大尉は叫びて「日本艦隊の遣り方は丸で無謀だ今に味方に先鋒艦を遣付けらるゝぞ」と云ひ余も亦願はくば其の如くなれかしと祈りたり。

余は東郷が意外なる事體を認めさてこそ新に突然なる運動を爲したるものなる事を明に了解したり、

東郷の運動は實に絶對に冒險的なる運動なりき左れど他の一方より考ふる時は若し針路を逆轉する必要ありとせば東郷の爲したる如く運動するより外に施す可き道なきなり、勿論全艦隊を一齊に廻轉せしめ得ざるに非ざるも一齊回轉にては旗艦三笠が殿戰艦となりて最後に在る巡洋艦艦手が戰鬪を指揮する先頭艦となる次第なり勿論東郷は斯の如き事を欲せず戰鬪開始を部下の提督に委して偶然の成功



を期する事をせず自ら全艦隊を統率する爲に艦隊の順次廻轉を決行せる者なり。艦手には海軍少將嶋村の將官旗を揚げたり。
余は六箇月前に旅順に在りし當時の如くに余の心臓は頻りに鼓動せり、願くは天佑に依りて若し爲し得べくんば假令ひ敵艦を撃沈せざるまでも責めては一隻位を戦線外に出でしめ第一着の成功を得る能はざるかとして心中切に之を祈り居たり。

(十三) 震天動地の開幕

然るに我提督は現下の逸す可からざる此の好機を忽ち利用せり、一時四十九分日本艦隊十二隻の中より纔に只だ三笠並に敷島の二艦が廻轉して新針路に就きし時三十二ケープルの間隔を以て旗艦スワロフは日本艦隊に先づ第一發の砲彈を送りたり、旗艦の發砲に續て全艦隊直に轟々として其の砲火を開きたり。余は熱心に双眼鏡を以て敵艦隊を望見せり、我が艦隊より發射する砲彈の跳越彈と不着彈とは敵艦の附近に落下せり、左れど八月十日の戰爭に於けるが如き快心の事即ち我が砲彈の命中は一も之を認むるを得ざりき、我が艦隊の砲彈は炸裂する時更に煙を發せず又我が砲彈の信管は砲彈が舷側を貫きて艦内に入り始めて炸裂する様に構造せられたり、故に我が砲彈の命中せるや否や敵艦内混亂起り斃るゝ者あるを見て始めて其の命中を判知するを得べし、左れど日本艦隊には一も斯の如き事を望見せざりき。

旗艦スワロフ並に我が諸艦より砲火を開きて二分時の後日本艦隊の先鋒二戰鬪艦に續きて第二の富士

朝日の兩艦も廻轉したる時、日本艦隊は始めて應射せり日本艦隊の最初の射撃弾は我が艦列を跳越して落下せり、長形なる日本の砲弾は時として恰も遊戲に大なる棒を空中に投じたる如く肉眼にも明かに見るを得て普通砲弾に豫想せらるゝ如き恐しき音を爲さず一種の長嘯を爲して我等の頭上を飛び行けり、レドキンは微笑しながら「是れが即ちチエモダン」かと問へり、（露語チエモダンは靴の事にて旅順にては日本の大口徑砲弾が如何にも巨大にて革製の長靴に類似せりとて日本の巨彈をチエモダン即ち靴と名附けたりといふ）余は答へて「是れがチエモダンぢや」と言へり。然るに日本の砲弾は空中に於て廻轉し且つ落下して海上を打つも忽に炸裂して高く海水を漂騰するを見て余は一驚を喫したり、斯の如きは未だ曾て見聞せざる事なり。

跳越彈に次で不着彈は飛來せり、不着彈は一發より我諸艦に接近し來れり、海上に炸裂する敵彈の碎片は空を切りて舷側や甲板上の建造物に獨れて憂々たる音を發せり、我旗艦の附近に前方煙筒の向ふに巨大なる水柱起り黒煙と火燄の迸發するを見たり、間もなく我が旗艦の前艦橋に擔架を持ちて走るを認めれば余は後艦橋の欄干越しに何事ぞと是を注視せり。余が無言の此の問ひに對せる折りしも自己管掌の砲塔に赴きつゝありしレドキン大尉は艦橋の下より「ツエネテリ侯ぢや」と叫びたり（此の負傷者ツエネテリ侯爵は少尉試補の青年貴族なり）次で飛來せる敵彈は旗艦中央部の六吋砲塔の舷側に命中せり、又續て余が居りたる後方右舷艦尾に當りて砲彈炸裂の爆聲を聞きたり暮僚の士官室より黒煙揚り火舌の閃めくを見たり、是れ敵彈が士官集會室に落下し甲板を破りて士官の私室に炸裂し其處に火災を起せるなり。

（十四） 驚く可き好射撃

余は旗艦の甲板上に於て大砲の射撃に慣れざる乗員が敵彈の始めて命中炸裂せる時に喪心無感覺に陥りたる者あるを認めたること一再のみに非ざりき、彼等は些々たる外部の刺激よりして忽ち喪心を來せり是れ其人の性質の然らしむる所なる可し而して其喪心は或は脱す可からざる怯懦心に變じ或は精神の興奮激昂に變するなり。船内火災の際に水管又はポンプの側に在りし者も茫然自失して煙と火焔とを眺め何をなす可きやを識らずして佇立せり、余は艦橋を跳び下りて彼等の側に到り只だ一言彼等に向ひて「ボンヤリせず水を遣れ」と命したるのみにて彼等の喪心を回復せしめ彼等をして熱心に防火に働かしむるを得たり。

余は此第一回の火災の状況を記録する爲に懷中時計と日記帳とを取り出したる、然るに其瞬間に何も余が腰の邊を刺したる如く感じ且つ非常に強大にして然も軟き何ものか余の背を打ちて余を空中に跳ね飛ばし甲板の上に打倒したり、……余が再び立ち上がりしとき余が手には日記帳も時計も依然として残り居りたり時計は破損し針は歪みガラスは脱落せり（砲彈爆裂の空氣の壓迫にて）打倒されて眩暈せる余は尙ほ人心地充分に回復せざるも時計のガラスを甲板の上に探し求め少しも破損せずには落ち居りたるを取りて時計に嵌めたり、此時余は全く益もなき事に勞し居りたるに思附きて周圍を眺めたり、想ふに余は數分間感覺を失うて人事不省に陥りたるものならん何となれば火災は己に鎮滅せられ余の附近にはポンプの裂口より水を灌ぎかけられたる二三人の慘死者を遣せるのみにて更に人の

隻影をも認めざりき、余が打倒されたる打撃は余の居りし處よりは望見するを得ざる艦尾の防禦塔（司令塔と同じ様な構造の室）の方より來りしなり、余は先づ其方を望見したるに其處には旗艦の將校ノウオシリツエフ大尉ゴザケウイチ少尉義勇兵マクシモフ其他數名の舵樓の信號兵居る可き筈なりしも敵の砲彈は其防禦塔に命中して之を貫き圍壁に中りて炸裂したるなり、右舷六吋塔の附近に居りたる十人乃至十二人の信號兵は悉く寸断せられて斃れたり、余は一人も残らず斃されしかと想へり左れど余が想像は誤れりノウオシリツエフ大尉とゴザケウイチ少尉とは不思議にも單に負傷したるに止まり余が甲板の上に倒れ時計のガラスを探し居りたる間に彼は既にマクシモフの助けを得て縋帶所に送られたるなり。元氣なるレドキン大尉は自己の居たる砲塔内より「何うだ君同じ光景か八月十日に似て居るか」と叫びたり、余は之に答へて「全く同じぢや」と断言はせしものゝ開は偽りなり實を言へば毫も似たる所はなかりし。八月十日の海戦には戦闘を開始して若干時の間にツエザレウイチは大口徑砲彈十九箇の命中を受けたり而して余は其状況を認めて詳記するを得たり、左れば余は今回の戦闘にも敵弾命中の時刻と場處と又敵弾に依りて生じたる破壊の状況とを一々詳記せんと欲し之が爲に一生涯命用意したり、豈圖らんや敵弾いよ／＼來り始むれば中々以て其状況を詳記するところの沙汰に非ず單に其命中箇數を數ふる事すらも尙且つ不可能にてありき、日本艦隊の今回の如き射撃は余が未だ曾て見聞せざるのみならず又曾て想像もせざりし所なり、砲彈は一發又一發と断えず雨霰の如くに落下命中せり。（日本の將校の談話に據れば旅順開城後に日本艦隊は第二艦隊の來東邀撃の準備として各砲員その擔任砲より五回の戦闘の數に當る實彈射撃を爲し不用に歸したる砲門は悉く之れを取離し

て新造砲を据ゑ付けたもとの事なり）

（十五） 砲彈か水雷か

六箇月前に旅順艦隊に在りし時の戦闘は交戦中にも萬事を熟視するを得て當時は下瀬火薬も普通綿火薬も或程度までは皆我等の善く知る所なりき、然るに今回の此戦闘には全然皆新現象のみなり、我が艦の舷側を撃ち又は甲板上に落下する者は是れ砲彈に非ずして或は水雷に非ずやと疑はれたり、斯く水雷に均しき威力を有する敵の砲彈は飛來の途中に何物にあれ些々たる障害物に觸れても忽ち炸裂せり故に欄干にても煙筒の曳綱にても其他些々たる器物にても總て接觸する所の砲彈を炸裂せしむるに足りしなり、舷側の鐵板並に甲板上の建造物は砲彈の爲に粉碎せられて碎片四方に飛散し兵員を打斃し鐵製の梯子も破壊せられて環状を爲し又完全なる大砲は其儘砲架より顛倒せられたり。斯くの如きは砲彈の打撃力に依りて生せるものに非ず況して炸裂彈の破片などの然らしむる所にあらず、是れ全く砲彈其物の爆力の然らしむる所なり、想ふに日本人は嘗て米國人が其のヴェスウイアムの構造を以て目的を達せんと試みたる其理想を今現に實行し得たるものならん。日本の砲彈の威力は唯之に止らず砲彈炸裂の熱力は非常の高度にて恰も流動體を成せる火焰が總ての物に鑄掛け澆ぐ如くなり、余は敵彈爆發の際に舷側の鐵板が粉碎せられ發火するを目撃せり勿論是れ鐵板が燃えたるに非ずして鐵板塗料の燃焼せるなり吊床や靴や其他の燃難き物も忽ち麻を焼くが如くに燃焼せり、時として双眼鏡朦朧として少しも見るを得ざる事ありたり敵彈炸裂の爲に熱せられたる空氣の振動の爲に影像を損せら

るゝが故なりき、八月十日海戦とは總てが全く異なりき。

確信す可き報告に據れば日本は開戦後に新火薬發明者たる南米の一大佐より發明の秘密を買収したる新爆薬を對馬海戦の際に始めて應用せり、又傳聞する所に據れば此新砲彈を備ふるを得たりしは主戦艦隊の大口徑砲のみなりしとの事なり、故に我が諸艦の中にも片岡提督の率ゐたる艦隊と交戦したる諸艦は戦闘艦並に装甲巡洋艦に依りて攻撃せられたる諸艦の如き破壊と火災とを招かざりき、特に最も注意す可き一例はスウェトラーナとドンスコイの二艦なり五月二十八日にスウェトラーナは二隻の敵巡洋艦と交戦しドンスコイは五隻の同様艦種の敵艦と交戦せり、此二艦は比較的久しく防戦し且つドンスコイは舊式にてスウェトラーナはヨットの如く何れも新式戦艦に比すれば全く可燃料の構造のみ多かりしも殆ど火災を起さざりしなり。

海軍砲彈には古來相反する二様の製式あり第一は敵艦に對して少數にても一度に激烈なる損害を與へて水線下に貫通孔を穿ち艦艙を爆破し一舉にして戦線外に出でしむるの目的を以つて作製せらるゝ者第二は短時間に假令輕微にても多數の損害を與へて全く撃滅するは左まで困難ならざるまでに打撃を加へ置く方針にて作製せらるゝもの即ち是れなり、現今の砲彈には第一の方針を取る時は装甲防禦を貫通する様に彈壁を厚くし（之が爲に内部の空隙を小にし裝填爆薬の量を減ず）砲彈が艦内に炸裂する様に信管爆發の度を遅くするなり、第二の方針は其反對にて彈壁を出来るだけ薄くして内部の空隙と其補填爆薬を極度に増大にし信管は何物にても觸るゝや否や忽ち爆裂する様に構造せらるゝなり、第一の方針見解は特に佛國に於て重に行はれ第二は英國に於て行はるゝなり、今回の戦争にて我が露

國は第一の見解を持ち日本は第二の見解を持したりと想はるゝなり。

（十六） 旗艦苦境に陥る

余は我れ知らず司令塔なる提督の許へと走りたり、何故に提督の許に走りたるかは當時我れ自ら其故を知らざりき左れと今にして之を回想すれば余は只だ提督を見んが爲と提督に遇うて自己の所感を確めんが爲めなりき。余は甲板上の林瀉たる血溜りに（其處に信號技師カンダウローフ惨死し居れり）足を滑らして倒れんとしたるを踏み止めながら前艦橋へと急走せり次で余は司令塔に赴きたり。司令塔内に在りし提督と艦長とは防禦壁と屋蓋の間なる窓より余が方を望見せり、艦長は何時もの如くに活潑なる手眞似を爲しながら提督に向ひ「閣下、間隔を變じませう、敵彈の命中は非常です火災が起りました」と叫びたり、提督は「少し待て我射撃も亦熾んぢやないか」と答へたり。彼方に二人の舵手は右と左より打重なりて斃れたり二人とも士官の服装のまゝ腹這ひになりて惨死せり。余は少尉シスキンの腕を揺かして彼に惨死者の方を指し示したるにシスキンは余が耳に口を寄せて「舵機技師とベルセネーフです（ベルセネーフは海軍砲兵大佐にて旗艦掌砲長なり）ベルセネーフは最初にやられた頭部をやられたのです」と耳語せり。

測遠器は未だ破壊せられずウラヂミールスキイは大聲を出して命令を傳へ測遠器の部署に在る者は頻に電話を以て各砲塔その他に敵艦までの間隔を報知せり。余は司令塔を出でながら「是しきの事」と奮て思へり然し間もなく余が心中に我戦闘艦に演せられ居る此情況は敵艦よりは見えざる可しとの思

想起りたり余は司令塔より出で前艦橋より熱心に望見して余が先刻八月十日の役に同じと斷言し得ざりし想像が當らずに多少好況の事もやと視察せり。

日本艦隊は既に全艦列廻轉を終了せり、十二隻の敵艦は整然たる陣形を爲し互に接近せる間隔を持して漸次我等の前程に進みなから我艦隊と並行して航走せり、日本艦隊には何等の混亂をも更に認めざりき余が双眼鏡には（敵艦との間隔は二十ヶケブル強なりき）敵艦の艦橋上の遮蔽物や人影をも望見するを得たり。轉じて我艦内は如何と望見すれば其の破壊の慘狀果して如何なりしぞ艦橋上の建造物は悉く崩壊せられ甲板の上は壓潰されて火災を起し死屍累々として横はれり、敵彈の命中如何を觀察するを得べき信號所や測遠器の部署も悉く崩落盡滅せられて見る影も無し、又轉じて我艦隊の友艦如何と後方を望見すればアレキサンダー、ボロチノの二艦も同じく火災を起して炎々たる黒煙に包まれたり。嗚呼實に類似せず八月十日の戦況には毫も類似せず。

日本艦隊は前方に進航して我針路を横断せんと試みつゝ俄然その針路を右舷に轉じたり、我艦隊も亦同じく右舷に轉じ斯くて再び敵艦隊と殆んど並行せり時に午後二時五十分なりき。

（十七） 人員刻々に減少

敵の砲彈我艦尾十二吋砲塔に命中せりと報告し來れる者あり余は之を一見す可く艦尾に赴きたり、敵彈を被ふりたる十二吋砲塔を見れば砲塔の覆蓋は左砲の方より破壊せられて上方に返轉せしめたり然し砲塔は能く廻轉して尙ほ充分に發射を爲し居れり。防火班を指揮せる一佐官は一腕を斷截せられ

て倒れたり、艦内の人員は刻々に減少せり諸方より補充員を要求し來り敵彈の碎片が僅に砲門の狭き窓より飛入るを得べきのみなる各砲塔よりさへも補充員を送りて減員に代らしむ可きを要求せり、慘死者は勿論その場處に斃れたるまゝ其を收容するを得ず又負傷者を收容したる綑帶所にも人員不足にて手當てを爲するを得ざりき。元來軍艦にて總ての乗員は皆戦闘の際に各自擔當の部署と任務とを有し一人として不用の人員なく所謂豫備員なる者を存せず、艦内各部の頻々たる死傷損害を補充するに當りて我等の取る可き唯一の方法は四十七密砲と機關砲擔任の砲員は是等の諸砲を無益に發射するの要なきを以て戦闘開始の當初より彼等砲員を防禦甲板内に集合し置きたれば之を以て補充員と爲す可き一事之なり、彼等砲員の擔當す可き諸砲は艦橋上に暴露しあるを以て悉く百な敵彈の爲に破壊掃射せられて其の片影だも止めず、其砲員も今は全く不用になりたれば我等は其砲員を補充員に利用するを得たり左れど彼等砲員を以て艦内の死傷損害を補充するは恰も大海に一滴水を投するが如くなり

火災の消防には幸に消防の任に當る可き人員を求め得たるも今は炎々たる烈火と戦ふ可き材料を有せざりき唧筒の水管は幾度豫備の水管を持來りて之を換ふるも忽ちにして敵彈の碎片の爲に艦纜の如く寸斷せられ今は一本の豫備水管をも存せず防火の任に當る者が一本の水管をも有せずんば如何にして火焰洞巻く艦橋や艦首に水を灌ぐを得べきや特に艦首の方には木製端艇十一隻を錐狀形に積み置きたり戦闘の始まる前には是等ボート内には海水を注入して水を留め置きたれば是等木造材料も今までは只だ一部分を焼くに過ぎざりき、然るに敵彈の碎片にて穿たれたる無數の孔より貯水を漏出するに至り

ては如何とも可からざりき。勿論出來得る限り總ゆる手段を盡せり端艇の孔を閉ぢて漏水を防ぎ桶を以て海水を汲み揚げたり、艦隊にては提督の命令に依り機械用油を入れしを保存し艦内用の桶としたれば此桶は甲板に至る處に多くありたり我戦闘艦の排水溝は故意に閉塞せられしにや又は只だ塵芥にて自ら閉塞せるにや兎も角も其塞がりし爲に甲板上に注ぎたる水は舷側を傳はりて流下し甲板の上は水溜の如くなりき、此水溜は大なる利益を爲せり即ち第一に甲板の燃焼を防ぎ第二には上より飛落つる火の附きたる木片などは水中を曳摺り或は水中に倒して之を消し得たり。

（十八） 假繃帶所の慘狀

余は艦首右舷の六吋砲塔の近傍なる前艦橋の鐵梯の側に於て前甲板の信號員と共に居りたる少尉試補デミチンスキイに邂逅せり、操砲指揮官なるゴロウニンは彼が砲塔内に瓶に入れて貯へ置きたる冷かなる茶を我等に馳走せり、デミチンスキイ少尉の報ずる所に依れば最初第一番に旗艦に命中したる敵弾は假繃帶所に落下せり、此假繃帶所は軍醫が最も安全なる場處と認めたる中央六吋砲塔の間なる上部防禦甲板内の禮拜堂附近に設けたりしなり、此處に命中したる敵弾は其の破裂の猛威を以て多數の人員を斃したり、醫官は幸に無事なるを得たり旗艦の牧師なる修道司努ナザレイ神父は重傷を負ひたりとの事なり。余は同處に赴きて其の被害の状を一見せんと欲したり。禮拜室には一面の軍艦聖像（基督の像）の外に多くの聖像を掲げたり、是れ艦隊出帆の際に戦闘艦の航海を祝福する爲に贈られたる者なり是等多くの聖像は少しも損せず寶座上に安置せる大聖盒のガラスさへも破れざりき、其前に吊り

下げたる釣燭臺には數本の蠟燭が幽かに穩かなる光りを放てり、四邊圍として人影を見ず只其邊に散亂狼藉たる破壊せられし卓や椅子や破れたる藥瓶繃帶材料などの間に算を亂して斃れたる慘絶の死屍——死屍と云はんよりは手足を切断せられたる何物かの胸部ともいふ可き者にて是れが人體の遺骸の一部なる可しとは判断も附かざる程の慘狀なり。余は此破壊と慘絶の光景とを未だ一瞥し了らざるに鐵梯を傳うて上より降れるデミチンスキイを認めたり、彼れは重傷を負へるスウェルベエフ大尉を肩にして助け來れるなり大尉は漸く足を運び苦しき息遣ひにて水を飲ませよと請へり余は其の邊に遺棄しありたる陸戦隊用の小釜に桶の水を汲み取りて彼に與へたり、憫む可き大尉は其の手も既に自由ならざりしかば余はデミチンスキイと共に彼を助けて水を與へたるに彼は續けさまに多量の水を飲みながら切れぬなる言語を發して「何の……艦長に云つて呉れ……直ぐ行く……毒瓦斯にやられた……只だ氣絶したばかりぢや……」と言へり彼の唇は蒼くなりて強き呼吸は唇頭を振はせ咽喉と胸部に何か幽かに噎ぶが如き音を聞けり無論毒瓦斯の爲めに非ず脊の右方に軍服の甚だしく裂けたる處あり其處より鮮血は滾々として流下せり、此の重傷者を我等は如何にもして助けんものと思ひ二人の水兵を招き大尉を擔はしめて繃帶所に送り我等は再び繃帶所を出で、上甲板に登りたり。

（十九） 日本艦隊は依然たり

余は日本艦隊の状況を視察せんと思ひ艦首十二吋砲と六吋砲の間なる右舷に至りて敵艦隊を望見せり

日本艦隊は皆依然たり！火災も無く艦の傾斜も無く艦橋の破壊も認めず彼等は恰も戦闘に非ずして練習射撃を爲し居るが如し、嗚呼我艦隊の諸砲は斷間もなく般々たる砲聲を轟かしたること既に半時間に非ずや而も此間に我の發射したるは果して砲彈なりしか我等は之を知るに苦しむなり。

此對馬海戰に於て日本の損害は戦死百十三重傷者百三十九輕傷二百四十三微傷四十二に過ぎざりしと云ふ、日本士官の言明は多少不公平を免れずとするも此上記の數字は事能を明に表白するものなり損害の約半数（五百三十七に對する二百五十二）は戦死重傷者にして他の一半は輕傷と微傷者にて八分に過ぎず損害としては殆ど注意する程の損害に非ず、是れ我砲彈は或は全く炸裂せざりしか或は炸裂するも威力弱く碎片の飛散尠かりしが故ならざるを得ず、日本砲彈の爆薬に我砲彈は比すれば七倍の多量にて而も其爆薬は普通綿火薬に非ずして（何等か更に一層猛烈なる材料を以て製せられし）下瀬火薬なり下瀬火薬は普通綿火薬に比すれば爆發の際に一と三分の二倍以上の高度の熱力を發す可し、之を概言すれば炸裂せる日本の一彈は其破壊力優に露國式砲彈十二箇の炸裂に相當す可し而して我砲彈は全く炸裂せざる者も屢々ありしなり。

余は日本艦隊に少しも異狀なき光景を望見して殆んど失望に近き感に打たれ双眼鏡を離して後に振り向き艦尾の方に赴きたり、信號の任に當り居りたるデミチンスキイは余に告げて「最後に一本残り居りたる信號網も遂に焼かれました依て部下の兵員を何處か防禦の在る處に收容しやうと思ひます」と云へり。余は勿論彼の言ふ所に同意するを得ざりき今や信號を爲すの方法全く盡きたる場合に何の用ありて信號兵を敵彈雨注の下に立たしめ置くの要あらんや、時に午後二時二十分なりき余は艦尾の

破壊せられたる艦材の間を徘徊し居りたるに偶然今しも前甲板の方に赴かんとせるレドキンに邂逅せり、彼は疾呼して「ア、君に遇つて好都合ぢや艦尾左舷の操砲はモーだめた砲塔の下も周囲も火災で皆な焼けて居る人員は火熱と煙で卒倒するといふ始末ぢや」と叫ぶ様に言へり、「さうか人員を集めて火を消さう」僕は既にやつて居る君は此事を提督に報告して呉れ提督は何とか命するだらうから」提督だつて命令も別に無からう」針路を轉ずる事も出来る……然し轉ずるか何うかは解からん」戦線外に出るといふのか果して出来るかな」いや君は兎に角報告して呉れ」と問答の末余は彼を安心せしむる爲に直ちに報告す可きと彼に約したり斯くて彼と左右に別れたり是れ遂に再會を得る能はざる生別なりき。余が報告に對する提督の答は余が豫期せる如くにて提督は一搖り肩を動かし「火災を防ぐばかりぢや此處から別に助けやうもない」と曰へり。

防禦塔内には既に斃れ居る者二人に非ずして五六人となれり、今は一人の舵手も無くなりてウラデミルスキイ自ら舵輪の處に立ち居れり彼の顔には鮮血淋漓たるも口鬚は上に捻り上げられ彼が嘗て士官室に於て將來の砲術を論議したる當時の如くに自若たる態度を持ち居れり余は司令塔よりレドキンの許に赴きて提督の答へを傳へ序に防火の助力を爲さんと思ふて彼方に赴かんとせり、然るに見るともなしに日本艦隊の状況に見取れて艦橋の上に立止まりたり。

（二十） 砲彈炸裂の光景

日本艦隊は二時十五分に針路を轉じて再び我艦隊よりも遠く前程に進航せり而して三笠は梯陣艦隊を

率ゐ我航路の前方を横断す可く漸次右舷に廻轉せり、余は我艦隊も亦同一方向に直に針路を轉す可きを豫期せり、左れど提督は暫くの間依然として今までの針路を取り航進せり余は提督が斯の如き運動を爲すは是れ出來得るだけ彼我の間隔を接近せしめんと欲する者なる可しと想像せり、彼我の射撃間隔を減するは實に我に取りて甚だ便利なりしなり如何となれば我が戰艦は既に測遠器を破壊せられ展望部署を崩壊せられたるを以て我が備砲は今や只だ接近射撃を爲すの一事を以て至利と爲さざる可らざるに至りたればなり然れども敵艦隊をして我針路の前程を横断せしめば是に依りて我艦隊は敵の縱火に陥る可し是れ決して我の許す可き事に非ず故に我提督が今に針路を轉するなる可しと刻々に今か今かと熱心に時計を見ながら針路の廻轉を待ちたり、三笠は益々我針路の前程に接近し來れり右舷六吋砲は既に射撃の準備を爲せり、此時我艦隊は急速右舷廻轉を爲せり余は安塔の太息を爲して四邊を望見せり。

デミチンスキイは部下と共に尙ほ出で來らずして何事かを爲し居れり、(後に聞けば彼は部下と共に甲板上に散亂し在る四十七密砲の彈藥箱が敵彈の爲に爆發して自ら損害を招かん事を虞れて其を砲塔内に取片附け居りしなり)余は下に降りてデミチンスキイに何を爲し居るやを問はんと思ひ梯子を降りかけ未だ其の事を問ふの遑なき中に上より梯を降り來れる艦長を認めたり、艦長の頭は鮮血に染まれり、彼は蹣跚として歩を運び慄ふ手にて欄干に取紐れり此時何處にや直ぐ近くにて敵彈炸裂震雷の如き轟音を聞きたり其震動に依りて艦長の身体は平均を失ひ梯子より頭を前にして顛倒せり幸に我等は之を認めて彼れを手にて支ふるを得たり。艦長は平素の如くに早口に「大丈夫だ是れ位の事頭が眩

暈したのぢや……」と快活なる言を爲して我等を安心せしめんとせり、彼れは蹣跚としながらも尙ほ前に進まんとせり。然し綳帶所までは尙ほ三箇所の梯子を降らざる可らざるを以て我等は彼の抗拒するを顧みず漸く擔架に乗らしむるを得たり、何處よりともなく「艦尾砲塔の爆破」と叫ぶ報告の聲を聞きたり(此の時近くの友艦より望見せる者の談に依れば敵の砲彈我旗艦の艦尾砲塔に命中炸裂するや砲塔の鋼鐵覆蓋は艦橋よりも高く跳ぬ上げられ後ち南の方に吹飛ばされたりとの事なりし之と殆ど同時に我等の頭上にも一種異様な震響、壊裂せられたる鐵板の洪鐘の如き音ありて前甲板に置きたる端艇は粉微塵に寸断し去られ上よりは火の附きたる本片飛び來りて火の雨を降らし濛々たる黒煙は我等を暗中に包みたり、當時我等は何事の生じたるやを辨知せざりしが是れ敵の巨彈炸裂して我前方の煙筒を崩壊せるなりき。數人一團となり居れる信號兵等は其の凄まじき光景に心膽を奪はれ殆んど發狂して既に崩壊せられたる前甲板の方へと突進せんとせり漸く説得して彼等を引留めたり時正に午後二時三十分なりき。

(三十一) 烈火熱鐵の旋風半狂亂の猛射

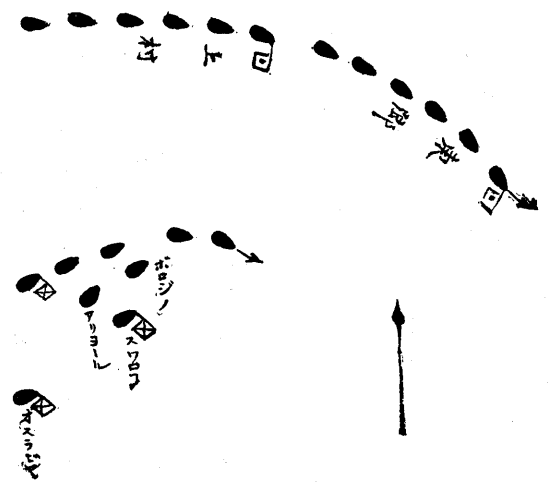
我が旗艦の甲板を覆へる黒煙が幾分か薄くなりし時余は南の方に赴きて艦尾砲塔破壊の状を一見せんと欲したり左れど上甲板の艦首と艦尾の交通は全く斷絶せられたり、茲に於て余は上部砲臺を通りて其處より提督室を通り貫け南方に直通する出口あれば此處より艦尾に赴かんとせり、然るに豈圖らんや此處の幕僚室は既に猛烈なる火災に罹り居るに會したり到底其處を通り貫ける見込みなければ余は

踵を廻して後に引返したる時梯を駆け下り來れるケルイジャノーフスキイ大尉に邂逅せり余は彼に聲をかけ「君何處に行くか」と問ひたるに彼は「舵機室に、舵が動かぬ」と叫びながら彼方に疾走し去れり余は梯を攀ちながら「獨り是れのみならざる可し」と想へり、其時余は前艦橋に走りて其處に足を止めし時最初は何が何やら少しも周圍の状況を判明するを得ざりき濛濛たる黒煙の間より後方を望めば右舷の近距離に殆んど旗艦と同一針路を取りて我が後續艦隊進航せり此の時特に余が記憶に止りたるはナワリンなりき同艦は艦隊に同行するを得ざれば遣し來らざる可らざる者なりしに今我等に續航し然かも全速力を以て舷頭雪の如き白波を蹴て猛進し來る狀は如何に壯觀なりしぞ。旗艦スワロフは機關の運轉自在なりし時に動かざる舵器を有しながらも

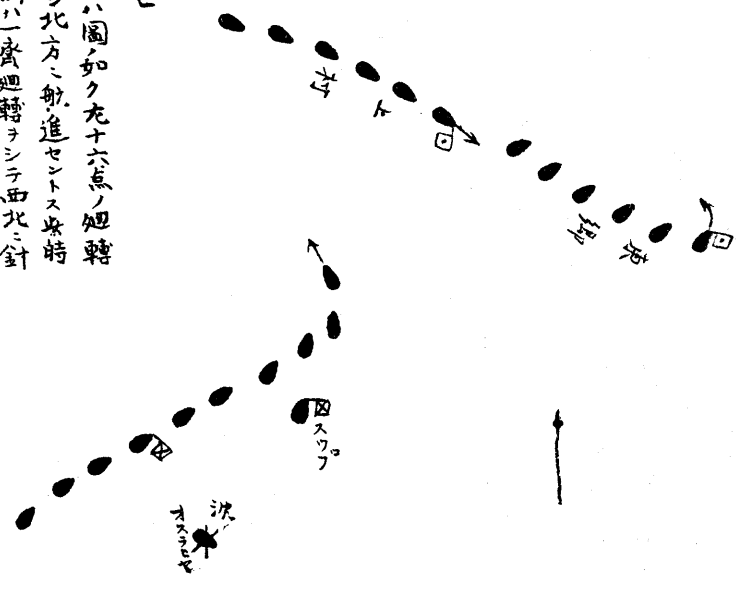
殆んど十(十)點の廻轉を爲すを得たり(是れ旗艦は戦列を離れたるなり)我艦隊の艦列は非常に亂れ且つ馬鹿に延長し特に第三艦隊は甚だしく離れたり、先鋒に進航する諸艦は之を望見するを得ざりき是れ先鋒諸艦は旗艦に近く風下に在りて火災の黒煙に覆はれしが故なり、同一方向に當りて敵艦隊の進航するを望見せり太陽の方角並に風の方向等より判断すれば此の時我が艦隊は殆んど東南に向ひて進航し敵艦隊は我が艦隊より見て東北の位置に在りたり。

若し戦闘中に旗艦スワロフが戦列を離るゝ場合には驅逐艦ビエドワイ並にフィストルイは直ちにスワロフに來りて同艦より提督並に幕僚を轉乗せしめ之を送りて他の被害無き戦艦に移乗せしめざる可からざる筈なりき、然るに今旗艦は既に戦列を脱したれば豫ての

烈火熱鐵の旋風半狂亂の猛射



幕六
我艦ハ敵ノ主カト殆ト四十分
間激戦ノ後下圖ノ如ク四艦共
多大ノ損害ヲ受テニ戦線外ニ
出ス日本艦隊ハ此時夜前線ヲ模索ス



幕七
我艦ハ圖ノ如ク九十六點ノ廻轉
ヲナシ北方ニ航進セントス其時
東郷ハ一密廻轉ヲシテ西北ニ針
路ヲ取リ上村ハ同地点ニ廻轉シテ續行ス

手筈の如く驅逐艦來らざる可ざる筈なるに余は如何に四方を望見するも一隻の驅逐艦も來らざりき、信號を爲さんか一切の信號を爲すの方法は全く絶滅せられたれば今は何に依りて信號を爲さんや、殊に我等は自艦火災の黒煙の爲に殆んど敵艦隊を望見するを得ざるに反し敵艦隊の方よりは能く我等を望見するを得たりしなり、左れば敵艦隊は重傷を受け居る我が旗艦に對して猛烈なる砲火を集中し旗艦を全く滅亡せしめんと試みたり、敵の砲弾は間斷なく一弾は一弾を追ひ來り其の凄愴なる光景は砲弾の雨注と謂はんよりも實に烈火と熱鐵の旋風の如くなりき。

旗艦スワロフは殆んど同一位置に止りながら徐々機關にて艦體を廻轉し其の期する所の針路に向ひて艦隊に續航せんと試みたり、又我が旗艦は斯くても健闘の勇を失はず破壊せられたる舷側を敵の正面に振り向け(既に残り尠なくなりたる)損所のなき備砲を操縦して殆んど半狂亂の猛射を爲せり。

(二十二) 旗艦の焦熱地獄

旗艦スワロフが苦戦に陥りて戦線を脱したる時の敵側の觀戰者の記録を茲に掲ぐ可し余は自ら目撃したる所と記録上の事實とを連絡せしめ且つ日本艦隊の行動をも明にする爲に最も正確なりと信せらるゝ日本の半官報的の著書を参考せり、左に掲ぐる敵側記録も「日露海戦」と題する細密なる挿書を爲せる一書に據れるものなり詳細なる點に至りては多數證者の一致せざる點ある可きこと固より何事にも免れざるものなれば讀者の諒察を請はざるを得ず。其の敵側の記録に曰く

火災に罹りたるスワロフは戦線を離れたるも尙且つ(艦隊に従て)運動せり左れど間もなく我砲火の爲に前橋と二本の煙筒を折斷せられ全艦猛火と黒煙とに覆はれたり同艦は觀者をして是れが船艦なる可しとは到底判知するを得ざらしむる程に破壊せられたり左れどスワロフは斯の如き憫む可き苦境に陥りながらも現在の旗艦として戦闘を止めず完全なる備砲を以て出來得る限り活動せり。

又上村提督の率ゐたる艦隊行動の記録には左の如くに記述せり。

我主戦艦隊並に巡洋艦隊の砲火の爲に多大の損害を被むりたるスワロフは遂に全く戦線を離れたり其上部には無数の砲彈貫通孔を穿たれ全艦黒煙に包まれたりマストは倒れ煙筒は相次で折られ遂に艦の操縦を失ひ且つ火災は益々猛威を逞うせり左れど同艦は戦線外に離れながらも尙ほ依然として戦闘を續けたり我軍は同艦の勇氣ある抗戦の名譽を認めざるを得ず。

日本側の記述は概略右の如し余は是より再び自己の所感を記述せざる可らず余は自艦より發射する砲火の殷々たる音響と敵彈炸裂の轟然たる爆聲や火災の吼ゆるが如き震響に耳の聳せんばかりに頭腦を攪亂せられて自艦が風上に向へるものか或は風下に向へるものか艦の方向などは勿論思慮するに違あらざりき然し間もなく余は其事に心附きたり我戦艦が針路を變じたる時に艦尾を風上に向けたるを以て猛火渦巻く前部甲板の黒煙と火焰とは海風に靡き余が貯立せる前艦橋に眞向に吹附たり余は來援すべき我驅逐艦や見ゆると頻に四方を望見し復た餘念なかりしかば我自身の運命が刻々危険に迫る事には自ら注意せざりき今濛々咫尺を辨せざる黒煙に包まれ始めて其の危険の迫れるを悟りたり、熱風猛烈に襲ひ來り顔と手とは烈火に炙らるゝ如く且つ煙に噎せて卒倒せんとせり今は此危急より自ら脱

せざる可からざるも前方に逃る可き通路とは火焔を冒して前部甲板に突進するより他に途あらざるを如何せん、斯くて余が心中には前艦橋の上より艦首十二吋砲塔に身を躍らして脱出可きかとの一縷の望み起りたれど跳躍の場處と方向を選ぶは到底不可能なる事に思ひ當りたり嗚呼運命の窮せる余は如何にして此焦熱地獄を脱す可きか勿論余が艦橋上に於ける此の窮運を認めたる乗員あらば彼等は余を引き降すの道なきに非ざる可し、余は兎に角に上部砲臺内に一身を救ふを得たり、但し元來艦體構造の形狀を詳にせざるに如何にして此處に前艦橋より逃れ來りしかは自らも記憶せず又之を想像するを得ざるなり。

(二十三) 殘員最後の希望

余は前部砲臺内に危険を遁れ息切れに堪へざる如く喘ぎつゝ、水を飲み兩眼を洗て四邊を眺めたり、此處のみは全く安穩なりき聖像の聖龕（基督の像を覆へる額縁）少しも損せず依然として残り、想ふに最初此處に設けたる假繩帶所を壊滅し去りたる狂妄なる一砲彈の外此穩かなる艦内の一隅には他に一發の敵彈も見舞はざりしが如し。此處に數名の乗員佇立せり彼等の間にデミチンスキイ部下の信號兵の居るを認めればデミチンスキイの安否を尋ねたるに彼は敵彈の爲に負傷して繩帶所に收容せられたりとの答を得たり。此處に居りたる數名の乗員は何れも一見平然たる狀にて沈黙して佇立せり、左れど彼等の顔を熟視すれば皆心中に言ふ可らざる恐怖と慘憺たる希望を懷き居る者の如くにて彼等は皆余が何事か更に必要なる事を爲す可く命令し重要なる救助の方法を命ずるを待ち居る者の如くなりき

左れど余は何をか命ずるを得んや彼等に下に降り防禦甲板内に避けて其處にて自己運命を待つ可しと告げんか是れ彼等自らも能く知れる所彼等の期待する所は他の命令なり、彼等は健氣にも尙は奮闘を爲すの力あるを自信せり、此の精神的の存命は是れ如何に嘉す可き者なりしぞ。余は彼等の自信を破り彼等の最後の希望の閃光を消滅せしめて彼等に告ぐるに「最早戦闘を爲すを得ず萬事は終れり」との事實を以てするの如何にも殘酷なる無智の仕業なるを感せり、否余は決して此事實を彼等に告ぐ可きに非ず余は之を爲すを得ず余は反對に切に彼等を欺きて彼等の最後の希望の微火を煽り起さん事を欲せり、是れ何故なるか曰く彼等が最後の刹那にも今將に勝利を得生命を全うし名譽を博し得べしと自信して死するは尙ほ彼等の幸福なる可きを以てなり。

前段にも記したる如く平素乗員の祈禱所に充てらるゝ場處に軍醫は假繩帶所を設けたりしは不成功に終りたるも兎に角其の場處は比較的に無事安心なりき、然るに其の後に中央六吋砲塔の後ろに猛烈なる火災起りたり我等は一同其の場處に駆け附けたり火の附きたる器物を曳出して之を消し或は舷側の巨大なる敵彈貫通孔より海中に投じたり、損じの無き防火用開口を見出し又水管の切れたるを探し出し桶をも持來りて我等は無言にて熱心に最も誠實なる働きを爲せり、我等は此處にて種々なる器物の焼くるを兎に角に消すを得たりしが其間に我等の居りたる場處と幕僚室を隔てたる鋼鐵の隔壁の陰に大火災起りて隔壁鉄板は灼熱し咆吼する如き火力の震響は砲聲の間にさへも聞くを得たり倒るゝ者あり斃れて動かざるものあり梯子を上下して奔走するものあり其混雜名狀す可からず、我等は自己の居りたる方面の防火に餘念なかりしかば彼方の大火にも目も呉れざりき一方は大火にて一方は左まで大

火に非ざるも要するに同じく火災に非ずや。斯くして五分十分を經過したる可きも我等は時刻の過ぐるを知らざりき此時、余が腦中に電氣に打たれし如く一閃忽ち心臓を打ちて感動したる思想は「嗟塔内、司令塔は如何なる状況なりや」との感じなりき。

（二十四） 彈片四邊に飛ぶ

余は司令塔に在る提督と同僚の安否如何を案じて先づ上甲板の方へと駆け上りたり、一度司令塔の事に想到するや今までの身體の疲勞精神の鬱屈は跡方も無く消え失せ思慮も自ら不思議とするほど明快になりたり、彼方を見るに黒煙渦巻きて左舷の敵彈貫通孔より迸出するは即ち右舷の方が風上に向き居る者なる事に氣が付き其方へと赴きたり、然し破壊せられたる艙蓋より上甲板に脱出するは容易の事に非ざりき、此時余は先刻デミチンスキイと共に我等の居りし其の場處を思ひ出でたるも其處にも下り行く可き途なく後ろには炎々たる毒焰に焼くる前甲板の梁架の投落し來るあり、前には壓潰されたる破砕物の顛倒し來るあり、艦橋に上る可き鐵梯は既に存せざりき、艦橋の右翼は全く崩壊せられ艦橋の下より舷側に通ずる通路さへも全く斷絶せられたり、我等は止むなく再び下に降りて又左舷の方へと上りたり、此處は幾分か清潔にして甲板は焼け崩れたるも右舷の如くに死屍横はるの慘狀を見ざりき六吋砲は全く完全なるが如くに猛烈なる射撃を爲し居れり、艦橋に通ずる鐵梯も破損せず只だ焼けたる吊床にて填塞せられたり。余が後に始終従ひ來れる五六名の乗員は余と共に上部に登り來りて余が命令に従つて熱心に働き艦橋の鐵梯を填塞せる焼け居る吊床を引き出し甲板の上に溜り居る水

に投じて消すなど熱心なる助力を爲せり此時、何處にや我等の身邊を距る遠からざる處に轟然たる敵彈炸裂の爆聲を聞きしが忽ち彈片四邊に飛來して跳躍し憂々たる音を爲して餘勢を逞うせり。余は是れ敵彈が六吋砲塔に命中せるものと思ひしかば毒瓦斯を呼吸せざる様に暫く目を閉ぢ息を止めて佇立せり、硝煙散ずるを待ちて砲塔の方を見れば壊裂せられたる六吋砲は獨り悄然として砲塔内より其の砲身を露出せり、砲塔の防禦門扉内より指揮官ダンチチ大尉は躍り出で、「たれの部署も萬事終つた砲口は裂けるし装置は破壊せられた」と叫びたり、余は其處に往きて門扉の中を一見せり砲員の中二人は身體を不思議なるほど屈曲せらて其處に打倒れ一人は目を大きく開きたるまゝ兩手にて脇腹を抑へて座し居たり、掌砲長は一生懸命に火の附きたる艦纜の様なものを消し居たるが余を認めて「君此處へ何爲に來た」司令塔に往かうと思つて「何爲に往くのだ司令塔には誰も居らんせ」「何に誰も居らんと」「勿論だ今ボグダノフが此處に來て司令塔は破壊せられ火災が起つて皆んな逃げ出したと云つた彼も出て來た艦橋も破壊せられて崩れ落ちた彼は首尾よく此處まで來た無論無事に」「提督は何處に往つた」余等は斯く問答し居る間に余が身邊に敵彈落下して轟然爆裂せり、余が右脚の後ろに弱き壓迫を應じ何等の痛もなき打撲を受け後ろを振り向きたるに余に伴へる乗員は一人も甲板上に其影を認めざりき、彼等は敵彈の爲に掃射せられたるか將た下に降り行きたるか。「此處に擔架は無いかと叫んだダンチチの驚駭の聲を聞きて余は彼の方に向き「擔架を何うする」と問ひたるに彼は「君を載すのだ流るゝちやないか其れ血が」と叫びたり 余は自ら右脚を見たるに實に脚部より鮮血滾々として流れたるも右脚は尙ほ立つを得たり時正に午後三時なりき。

(二十五) 繙帶所の物凄さ

余が脚部に負傷したるを見たるゲンチチは「君歩るけるか待ち給へ誰かに擔架を命ずるから」と頻に余の負傷を氣遣へり、余は何の擔架などを要するものぞと寧ろ彼の厚意を怒りながら自らは如何なる負傷を爲したるやをも辨せず活潑に鐵梯を下りかけたり、戰鬪の始まりし當初には敵彈の一小片が帶皮に中りてさへも痛みを應じたりしに今は何等の感じも無かりき、擔架にて既に病室に搬送せられて後余は負傷者が戰鬪中に何故に苦悶せず又苦痛の聲を發せざるかを始めて解するを得たり、勿論我等の感覺は皆一様に外部の刺激に對して一定の限界を有せり古來「全く感ぜざる程に痛く驚きもせざる程に恐れたり」との言あり一見甚だ愚なるが如くなるも全く正しき言なり。

余は上部並に下部砲臺を通過して防禦甲板の下なる居住甲板に下りたり此處に繙帶所の本部を置きあり余は繙帶所の光景を一見して我れ知らずに梯子の方に逡巡せり。繙帶所に充用せられたる居住甲板は旗艦の負傷者を以て滿たされ此處に收容せられたる負傷者のみにても日本の全艦隊の負傷者よりも多數なりしなり、負傷者には佇立し居るもあれば坐し居るもあり又横臥せるもあり或者は豫め用意せられたる褥の上に横はり或者は急に敷きたる帆布の上に臥し又或者は擔架の上に横はれるのみか既に絶命せるもありたり、彼等負傷者は繙帶所に收容せられて今は皆苦痛の感じを生じたり苦惱苦悶の喘々たる呼吸に依りて吞吐せられたる室内の空氣は一種異様な濕氣を含み酸味を交へたる如き厭惡に堪へざる惡臭を以て充滿せり、電燈の光は此腐臭充滿せる窓内の空氣を漸く透すが如くに廳げに照ら

して物凄く向ふ方には白衣に赤き記章を附けたる人影が倥傯として動くを認めたり、此處に在る者は皆彼等にたより彼等に願うて縊縊に包まれたる此肉と骨とは尙ほ軍醫より何事かを期待せり、何處を見るも苦惱呻吟ならざるなく彼等の或者は動くを得ず聲を出すを得ざるも皆助けを呼び死の價を以てしても此苦痛を脱せしめよと願ふ者ならざるは無かりき、余は負傷の手當てを受くる順番の來るを待たず又他人を排除けて前の方に出づるを欲せざりき、余は急ぎて下部砲臺の鐵梯を攀りたるに圖らずも其處にて艦長に邂逅せり夜は頭部に繙帶を施せり(後頭部に三箇の彈片負傷を受けたるなり)余は暫時彼と問答して旗艦の司令塔が敵彈を被りたる時我提督と幕僚等が如何なる運命に遭遇したるかの詳細なる狀況を知るを得たり、敵彈の司令塔に命中したるは舵機破壊せられてスワロフが戦線を離るゝと殆ど同時刻なりき。

(二十六) 提督居處に迷ふ

初め旗艦スワロフが戦線を離れんとしたる時司令塔附近に命中したる敵彈の爲に提督並にウラヂミールスキイは頭部に負傷せり、ウラヂミールスキイは繙帶所に收容せられ三等大尉ポグダノフ彼に代りて戰鬪艦の司令に任じたり、提督は既に舵機の破壊せられたるを認め機關を以て艦を運轉して艦隊に續航す可きを命令せり、前艦橋に落下命中する敵彈は益々多く雨霰の如く甚だしくなれり彈片彈子は土砂を卷く如くに司令塔の菌形の覆蓋の下に侵來し司令塔内の有らゆる器物を破壊し遂に羅針盤をも打破りたり幸に破壊を免れたる一箇所の機關部に通ずる電信機と他の一箇所の機關部に通ずる通話管

のみなりき、艦橋の上には既に火災起りて敵弾防禦用に供したる吊床や司令塔しんたいとうの後ろなる航海長の小室は既に猛火の包む所となれり火焰の熱氣は恰も釜中かまに在る如く既に耐ふ可らざるに濛々たる黒煙さへ四邊を覆ひて咫尺しじきを分たざるに至れり且つ既にコンパスを破壊せられしを以て何れにも針路を定むる事も出来ず今は水中司令塔(艦内喫水線下の司令塔)に入りて艦の操縦を爲さざる可らざるに至れり、而して余は周圍を展望てんぼうするを得可き何處なりとも他の場處に赴かんとせり其時司令塔内に在りしは提督の外に艦長航海長(三人共に負傷せり)大尉ボグダノフ少尉シキン並に一水兵にて彼等は幸に今まで無事なりき、第一着に司令塔より艦橋の左方に身を跳らして脱出せるは大尉ボグダノフなり彼は勇を振ひて猛火に焼け居る吊床を引き倒して前方に突進し火焰の中を潜りて何れにか脱出せり、彼に續いて艦長は艦橋の右方に身を脱するを得たるも其處は既に全く崩壊せられて足の踏み處もなく鐵梯も既に破壊し去られ通路は全く斷絶せり、其處より他に遁る可き一路は只だ下の方に降りて水中司令塔に赴くの一あるのみなりき、艦長は甲板の上に算を亂して倒れ居る慘死者を辛うじて引き除け防禦甲板の上なる格子形の艙蓋を開き其處より漸くの事にて水中司令塔内に下りたり。

我提督ロゼストウエンスキイは頭と背部と脚部とに負傷(其他にも微傷を負ひたり)したるにも關せず尙ほ充分の元氣を有せり、水中司令塔より艦長は繃帶所に收容せられしかば提督は茲に輕傷を負へるヒリツポウウスキイ大佐を留め置きて左の命令を與へたり曰く若し新に處理を爲すを得ずんば舊針路を持續す可しと而して提督は戰況を展望視察する便なる可き場處を探さんとて出で往かれたり、提督は上甲板へと赴きたるも其處は既に火災の爲に焼け崩れて前部砲臺の方に進む可き通路を存せざりき

提督は止むを得ず其處より左舷中央の六吋砲塔に赴かんと試みたるも是れ亦其の目的を達するを得ざりき、是に於て提督は身を翻して右舷中央の六吋砲塔に赴きたり。

（二十七） 提督再度の負傷

ロゼストウエンスキイ提督は斯く艦内を彷徨せる際に又も負傷して俄然激烈なる苦痛の襲ふ所となれり、是れ左脚の踝骨頭近くに敵彈の碎片を被りて大神經を切斷せられたるなりき、提督は是に由りて歩行の自由を失へり、夫れより提督は砲塔内に收容せられ箱を以て椅子に代へ其處に坐せしめられたり提督は斯く負傷せられても尙ほ充分の元氣を有せられたりと見えて六吋砲塔内に收容せらるゝや否や直に其處の備砲より何故に射撃せざるやと問ひ且附き従へるクルイジャノウウスキイに掌砲長を呼び來り砲員を編制して砲火を開く可しと命令せり、左れど此處の砲塔は既に損害を受けて廻轉の自由を失へる者なる事を知りたり、其間クルイジャノウウスキイが舵機室より歸り來るや否や舵機は修繕せられたり左れど舵機に通ずる三箇の汽管は既に切斷せられ又水中司令塔より舵機操縦の機關部に號令を傳ふ可き何等の方法をも既に存せざりき、是れ通話管は全く廢滅に歸し電氣信號機は破壊せられ電話機は其用を爲さず、水中司令塔より機關の働きて戦艦の操縦を爲さざる可らざるに至りしが故に艦體は前に進まずし同じ場所を廻轉するのみなりき。

余が此處に連絡せる談話の如くに叙事的に記述したる艦の戰闘狀況は勿論時刻を異にして各種の人々より聞き得る事實を正確に傳へんとする者なり、余が艦内に於て此談話を聞くの際には何れも連絡な

き談話にて或は敵彈炸裂の爆聲にて其談話を中絶せられ或は且つ談じ且つ走りて切れぬなる語を手眞似を以て補へる談話なりき、左れど此の手眞似を以て補へる連續なき談話こそ如何なる言語よりも最も雄辯に其の事實を表示するものなれど之れを正格に記述して傳へんと固より能くす可きに非ず。戦闘の際に神經の最鋭直に興奮せる當時に於ける一聲の叫喚擧手の手眞似は幾多の言語にも優りて千萬無量の思想を最も明に表はすものなりき、左れど之を紙上に記すればとて何人にも其の意味を解せらる可きに非ず。

下部砲臺の方には未だ火災といふ程の火災は起らざりき火災は多く上部の方に延焼せり左れど其の火勢は船艙を傳はり破壊せられたる煙筒の下や中部甲板の貫通孔より下方の其處此處に火の粉を降らして諸方に小火災を起したり、石炭袋を以て防禦し置きたる無線電信機械の所の火災は一時非常に猛烈になりて砲彈輸送軌條の破壊せられたる爲に途中に積重ねたる七十五密藥莢は將に猛火の襲ふ所とならんとする状況にて非常に危険なりき、一時は此の危険を救ふか爲に藥莢を舷側より海中に投棄せり然し兎に角に爆發を避くるを得たり艦内火災の蔓延は唯り自然の火勢その猛威を逞うしたるが爲めのみならず戦闘艦に雨と降り霰と汪ぐ敵彈は此災を助けて愈々祝融の威を逞うせしめたり、人員の損害は陸續相次ぎて停止する所を知らず余も亦遂に左腕肩胛骨を挫き脇腹に二箇の彈片を被ふりたり。

(二十八) 日本艦隊の危機

旗艦スワロフが損害を被りて戦線を離れたる場合に我が驅逐艦ビエードウイ、フィストルイの二艦がスワロフに來りて提督と其幕僚とを同艦より完全なる他艦に移乗せしむ可き豫定なりし事は前段にも既に記述したるが如し、是を爲すの際に艦列の混雜を避くる爲に司令旗を他艦に移すを得ざるまで若しくは司令権の他に移されし事の信號を爲さざるまでは艦列より離れたる艦の次位に在る艦が艦隊と統率せざる可らざる豫定なりき。

旗艦スワロフに何等驅逐艦も接近し來らざるは他よりも之を認むるを得たりや破壊せられ且つ烈火に包まれ居る旗艦は既にマストも無く煙筒も無きに斯の如き旗艦より熱心に何等かの信號ある可しと期待したりとは果して明確の事なりしや故に又司令権は事實的に自然既に其位置に依りて第二位の者に移されしを以て其の第二位の者が何等かの自己の働きを現はす可きを期待するは當然なりしや否や等の如き諸問題は我輩は敢て解答せんとする所に非ず兎に角にアレキサンダー一層切に言へは同艦の艦長一等大佐ブフオストフは提督の命令と自己の責任とを充分に實行せり、旗艦スワロフの戦線を離るゝや何人よりも何等新しき處理を受けざりしもブフオストフ大佐は其の坐乗のアレキサンダーを以て先頭艦と爲して全艦隊を率ゐ依然として戦闘を繼續せり旗艦スワロフが線列を離るゝや我が艦隊は旗艦の傍側を東南に定針して進行するを認めたりしがアレキサンダーは尙ほ二十分間程漸次南方に進航して敵艦隊が著しく我が前程に進動するを避け我針路を横斷するを許さざらんとせり此の時、日本艦隊は此の第一回の成功に勵まされ其の勢ひに乗じて又も自家の理想即ち全力を注ぎて我が先頭艦を攻撃する理想を實行せんとせり日本艦隊は此の理想に誘致せられて前方に突進せしかばアレキサンダーは是れに依りて日本艦隊の背後に東北の針路を開かれたりアレキサンダーは其の機に乗じて俄然

北方に變針し若し好都合ならんには我が艦隊の全力を日本の敵艦に注ぎ以て敵を縦火の下に陥らしめんと期したり、此の艦隊廻轉の時刻に關して日本側の報告は一致せず或は二時四十分なりと謂ひ或は二時五十分なりと謂へり、(此の午後二時五十分の時刻は戦艦オスラビヤの滅亡の時刻にて同艦は上村提督の率ゐる六隻の巡洋艦隊の集中猛火を受けてスワロフよりも先きに戦線を脱出せり)余一己の見解を以てすれば日本艦隊が廻轉を爲したる時刻は二時五十分と爲す方正確なりと思はるゝなり、若しそれ敵艦隊の廻轉運動は戦闘開始の際に爲したる如く順次の廻轉なりしならんにはアレキサンダーの運動は必ず其の功を奏したるに相違なし、左れど此の危機間髪を容れざる場合に東郷は此の度は全艦隊の左舷十六點の一齊廻轉を命じたり而して日本



艦隊の此の廻轉は甚だ巧妙に行はれたり三笠、敷島、富士、朝日、春日、日進より成る第一主戦艦隊は適當に其の廻轉を爲せり、然るに巡洋艦隊を率ゐたる上村は信號を明かに解せず順次の廻轉を豫期して依然として舊針路を取り我が艦隊を追ひ越し戦艦の反航路に赴きて其の射撃を妨げ後ち空處に出で(兎に角に順次の廻轉を爲して)次で主戦艦隊に追尾して其の艦列に入りたり。是れ實に日本艦隊に取りては容易ならざる混亂を招きたる危機なりき、左れど此の時既に前述の如き状態に在りたる我が艦隊は此の好機を利用するを得ざりしなり、日本艦隊は其快速力を利用し、唯り艦列の混雜を恢復したるのみならず彼等が其の期するの目的をも達し、アレキサンダーを再び南に壓迫して同艦の針路を遮断し得たり。

(二十九) 黒煙に火焰の文字

我が旗艦スワロフの右舷の砲門に立ちてアレキサンダーを望見すれば同艦は殆んど我が直横に在りてスワロフの方に向ひ他の諸艦も亦アレキサンダーに續航せり我が艦隊各艦の距離は漸次接近せり、我が双眼鏡に映せるアレキサンダーの状態掌中のものを見るが如く明かに見え同戦艦の破壊せられたる舷側崩壊せられたる艦橋焼け居る甲板など手に取る如くに明かに望見するを得たり、在れども煙筒とマストは尙ほ立ち居りたりアレキサンダーの直ぐ後に續航せるはボロチノにて同艦も非常の火災に罹り居れり。

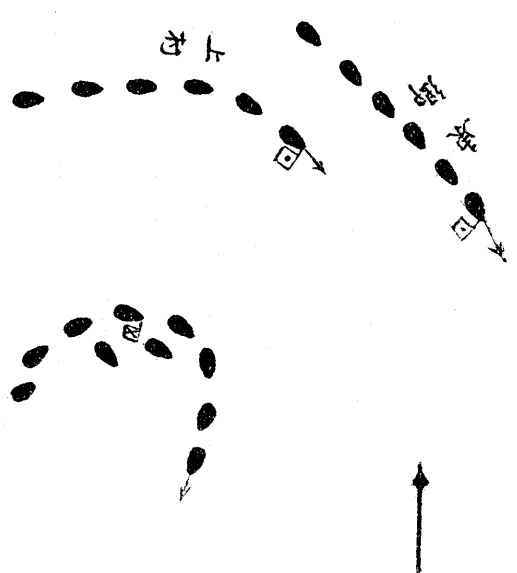
竊て日本艦隊の行動を望見すれば敵艦隊は既に我が針路の前程に突進して我が針路を横断せり、我が

艦隊は右方に赴き敵艦隊はスワロフの左舷に見えたり日本艦隊の砲弾は絶えず我に飛來し我れ又是に
 應射せり、我が旗艦スワロフの艦首十二吋砲塔(此時迄完全なりし唯一の砲塔)は最も活潑なる射撃を
 爲せり、我が砲員は身邊に飛來落下して爆裂する敵弾には目も呉れず奮闘せり、此の時余は再び敵
 弾の爲に左足に負傷せり余は弾片の爲に制截せられたる靴を見て實に残念に堪へざりき我等は皆な息
 を凝らして最期の運命を待てり、日本艦隊は其の砲火をアレキサンダーに集中せるもの、如くなりき
 アレキサンダーは敵艦隊の集團火に陥りて一時自艦火災の猛火と濛々たる黒煙に船體を全く包まれ艦
 の周圍の海上は巨大なる水柱を奔騰して恰も海水の沸騰するが如くなりき。

アレキサンダーに續航する我艦隊は益々接近し來りて其の間隔僅に十ケープルを出でざりき、我が旗
 艦よりはアレキサンダー苦戦の光景愈々明かに望見せられ同艦の前艦橋並に左舷六吋砲塔に落下命中
 する敵弾は一弾は一弾を追ひ來りて砲弾の行列といふも過言に非ざりき、アレキサンダーは俄然右舷
 に廻轉し反對の航路を取りて航進せり、(アレキサンダーの此の運動は自ら企て、爲したる運動なりし
 や又は舵機破損の結果偶然に出たる運動なりしや遂に永遠の秘密と爲り了れり)斯くアレキサンダー
 の廻轉するや續てポロチノ、アリヨール其の他の諸艦も廻轉せり諸艦は殆んど縦陣を崩して急速廻轉
 したるも其の運動は敢て「漸次」の廻轉にも亦「一齊」の廻轉にもあらずき。

旗艦スワロフの砲臺の上には耳を襲する計りの「見捨てられた去つて仕まつた既に力盡きた」と叫ぶ乗
 員の切れ々なる不平の聲を聞きたり。嗟、彼等乗員は現下の戦況を解せざる凡人なれば我が艦隊は
 スワロフの方へ歸り來りて我等を救助す可しと思ひ居りしなも彼等の夢の醒めたる如き失望は眞に心

苦しき限りなりき、左れど現下の戦況の真相
 を解せる者に取りては尙一層愁痛に堪へざる
 者ありき。此の光景を觀たる余が當時の心中
 には容赦なき記憶と鎮め難き想像とを留め我
 が眼前に八月十日クニヤチ、ウフトームスキ
 イの「力既に盡きたり」との信號の後に我が各
 戦艦は列を亂して急駛西北に逸走したる當
 時の戦慄す可き光景を回想せしめたり、此の
 「力盡きたり」との恐る可き運命的なる語は既
 に余が舌端を動かさんとしたるも余は思念を
 制して之を敢て言はざりき、余が腦中には耳
 の鳴る如くに此の語の響くを感じ「力盡きた
 り」の一語は恰も火災の黒煙の中に火焰を以
 て記せられたるが如くに明かに見え、又破壊
 せられたる舷側にも乗員の失望せる蒼き顔に
 も「力盡きたり」の語を讀まるゝが如くに感じ
 たり余は戦友ボグダノフと並び立てり、余



第九

此時煙霧ノタメ敵艦ヲ見失フ
 我艦ハ南方ニ針路ヲ取ルルモ
 殆ント一時間ハ戦闘ヲ中止ス

等は互に顔と顔とを見合はせ互に何事かを了解したる者の如くなりきボクダノフは何事かを言はんとせり左れど急に言葉を止めて後ち我が方を振向き故意に冷静を装へる如き語調にて「嗟我が艦の左舷傾斜は甚だしくなつて来た」と言ひたり余は僅に傾斜の極に達するだらう」と答へ次で時計を一見し手帳を出して書き留めたる文句は左の如くなりき。曰く

午後三時二十五分左舷の傾斜甚だし上部砲臺には猛烈なる火災ありと。

(三十) 旗艦の最期

當時我等は旗艦の砲臺にて僚友互に顔を見合はせ何事かを言はんと欲して遂に口を開かざりしは是れ互に何事を隠したるにや何故にボクダノフは大聲にて談話せざりしか何故に余は自己の手帳にさへも其の不快なる一語「敗北」の文字を敢て記する事をせざりしか、是れ後に余自ら當時の事を廻想して自問せる疑問なりき想ふに當時、我等の心中には尙ほ一縷の望みを存して萬事を一變し得べき何等かの急變の生す可き事奇蹟的事件の現出す可き事此の敗北を轉じて捷利と爲す可き望みを有したるに非ざるか。

戦闘艦アレキサンターの廻轉したる後ち日本艦隊は同じく一齊に十六點の廻轉を爲せり、此の時の日本艦隊の運命は特に巧妙なりき然り是れ殆んど戦争に非ずして全く一の演習に異ならざりき。日本艦隊は廻轉した反對の針路を取り艦首は殆んど我等に向けて航進せり、スワロフより之を望見すれば我が艦隊は日本艦隊の艦列を横斷突進するが如くに見えたり、スワロフは我が艦隊の右方に廻轉せり勿

論是れ只だ右方に廻轉したるが如く感じたるに過ぎざりきスワロフは既に操縦の自由を失ひ水中司令塔内の羅針盤に依りて只だ機關のみを以て艦體を動すに過ぎざれば我等は何處を指して航す可きやを識らず只だ右往左往に同一場處を廻轉し居るに過ぎざりき。斯の如き窮運に陥りたるスワロフの傍側を通過せる日本艦隊は其の機を逸せず尙沈没せずして頑強なる態度を持し居るスワロフに再び其の砲火を集中せり此時、我が最後に残りたる唯一の砲塔す艦首十二吋砲塔も遂に猛烈なる敵彈の破壊する所となり了れり。

日本側の戦報に依れば此の時、スワロフに日本主戦艦隊と共に日本の驅逐艦隊も來襲せり而も不成功に終りたりとの報告あるも余は敵の驅逐艦を認めざりき、敵の一砲彈は艦首より四分の一の部署に在る左舷下部砲臺の七十五密の大砲に命中し砲身を奪ひ去り尙ほ餘威を逞うして防禦甲板を貫通せりスワロフは左舷傾斜の爲に舷側の敵彈貫通孔より海水浸入し再び流出せざるを以て其の水は遂に居住甲板へ襲ひ來りて危険は愈々甚しくなれり、ボクダノフは第一着に此の危険を認めて我等は手當り次第に袋などを集め其にて海水の浸入する竅口を閉塞して應急の防禦を爲せり、茲に我等と言ふは實に我等士官が自ら手足を勞して斯の如き働きを爲さざるを得ざりし事を示すものなり何んとなれば此の時砲臺に残存せる少數の乗員には既に何等の命令をも爲すを得ざりしなり、乗員は恰も癡痺したる者の如くに偶の方に身を縮めて動く者あらざりき故に腕力を以て彼等を引出す事も出来ざれば我等士官は自ら手を下して働き彼等に例を示して働かしめざるを得ざりしなり、旗艦水雷長レオンテイ大尉並にデミチンスキイ等も來りて我等に助力せりデミチンスキイは兩手に負傷して繃帯を爲し居れるを

以て只だ乗員を指揮して助力せるのみなりき。

(三十一) 幻覺と夢の萬歲

三時四十に何事にや突然萬歳の歡呼先づ砲臺に絶叫せられ次いで全艦内に愉快なる萬歳の歡聲響き渡れり、何所に於て誰が最初に萬歳を叫びたるにや何人が何を幻覺し何を夢みて是を叫び始めたるにや遂に原因を識るを得ざりき、或は謂ふ日本軍艦の沈没を認めたりと或は又一人のみならず二人までも是を認めたりと云ふ者もありて兎に角に此の突然なる歡呼の聲は乗員の士氣を全く一變して彼等がアレキサnderの破滅の光景を望見し且つ我が艦隊の遠離を見て喚起せる憂愁落膽を一掃し去るを得たり、今迄其處此處の片隅に隠れ居りて何等の命令も聞かず士官等の懇請にさへも應ぜざりし乗員は今自ら士官等の許に走り來り「何を致しませう」「何處に働きませう」との健氣なる問ひを爲すに至れり、且つ乗員の諧謔の言さへも聞え「愉快ちや此の状況恐るゝな是れは六吋ぢや砲(日本の巨彈)は最早無くなつた」などの語を聞きたり、實に日本の主力艦隊は我等に遠く離れて今は我等を射撃する者は出羽提督の率ある快走巡洋艦隊のみなりき此の砲撃を先きの主力艦隊の砲撃に比すれば始んど痛痒を感ぜざるが如くなりき。スワロフの艦長イグナツウス大佐は頭部第二回目の負傷に綑帯を施して後居住甲板に遣り居しが彼は艦員が元氣を恢復し敵の射撃の減じたる此の機に乗じ醫員の止むる勸告を顧みず奮然起ちて砲臺の鐵梯に急ぎ上り「さあ健兒皆な我れに従へ火災に火災の方に火事にばかりも勝つ可し」と絶叫せり。此の時居住甲板に在りたる非戦闘員衛生隊や既に綑帯を終りたる輕傷者の一團

は同じく負傷して綑帯せる艦長に従ひて走りたり、何ぞ其の光景の健氣にも悲壯なるや而して又忽ち爆然たる狂猛なる敵彈の炸裂は船蓋の附近に轟ろけり、其の硝煙の散せし時其處には鐵梯も艦長もまた彼の周圍に在りし健兒一人の人影をも止めざりき。左れど此の悽慘壯烈なる悲劇の一幕、幾多數百の悲劇の一は興奮せる乗員の元氣を敢て沮喪せしめざりき、下部砲臺には人員の缺乏防火の手の足らざるが爲に火災は愈々烈しくなりしが其處に人々集り來りて全力を盡して防火せり其處には旗艦の將校ボグダノフの外に水雷副官のウイルフ大尉も走し來れり、若き脊の高き強健なる大尉は夏服の鈕を脱したるまゝ獅子奮迅の勢にて何處にも先頭になりて突進し彼が「水を遣れ」「屈するな」の一聲絶叫は黒煙と火焰の中に響きて働く者の力を倍加せり、脇腹と手に負傷せるドトフ大尉も其處に來りツエレテリ候は居住甲板の方より望見して状況如何を問へり二度目の重傷を負へるコザケーウイチは余が側を搬送せられたり何處より來れるにや余が従卒來りて殆んど腕力を以てせざるばかりに余を綑帯所に引き行かんとせり余は漸く彼を推し退けて何より先きに私室より巻煙草を持ち來る可きを命じたり、従卒は活潑なる聲にて「閣下煙草はあります」と言ひながら彼處に走り去りたり是れ忠義なる我が従卒マトロフとの生遠の生別なりき。

「大砲の處に敵の驅逐艦が來た大砲の處に」との叫び聲が甲板の上に聞えたり「大砲の處に」と言ふを得たるは是れ下部砲臺の七十五密砲十三門の中に右舷の方に破壊を免れたるは唯だ一門のみなりしを以てなり。

(三十二) 日本火薬の實驗

旗艦スワロフに來れる水雷艇は艦尾の方より大に警戒しながら接近し來れり、(日本側の報告に據れば是れ四時廿分なりしと云へり) 然るに我艦尾士官室の後ろには尙ほ一門の七十五密砲の其力を失はざるものありたりウオロンテルマクシモフは其部署の擔任士官既に居らざりしかば自ら代りて敵水雷艇に砲火を浴びせたり、然るに既に殆ど滅亡に近き此戰艦が尙ほ奇怪なる戰鬥力を有するを見て敵水雷艇は逃走し去れり想ふに更に好機の來るを待つが爲なる可し。余は此の時我艦隊水雷防禦の爲に如何に戰鬥力を配備し居りたるか一層明かに云へば我艦は如何なる程度まで既に助けなき孤立の地に陥りたるを明かにするを得たり。

旗艦下部砲臺に各種専門の擔當職を有する乗員尙ほ五十名ある事を明かにせり其の中に砲員は只だ二名あるのみなりき、艦内を隈なく調べたる結果尙ほ効力を有する大砲は只だ一門を殘せるのみなる事を確めたり、其他の大砲に對しては全く破壊せられて不用に歸したるものより破壊せられざる一部の必要なる部分を取り來りて他の大砲を修理補修す可きを命じたり、是によりて尙ほ艦尾の方に一門の効力を有する大砲を得てマクシモフ之を擔當せり。

今は部下砲臺の檢閲巡視を終りて艦首のポルトングの上に登りたり、(砲塔は一も用をなさざりき) 余は此處に來りて日本砲彈の特種の威力を有する事を一層明にするを得たり、此處には既に火災を見ざりき是燃焼するを得べき部分は既に悉く燃焼したるを以て今は火災の憂ひ無きに至れるなり、七十五密砲四門は悉く其砲架の上より轉倒せられあるを見れば余は此の大砲を注意して調べ直接に敵彈

の命中したる箇所若くは大なる彈片などの當りたる箇所もやと之を視たるも更に其の跟跡だも認めざりき、故に是等大砲の破壊は日本砲彈の命中打力を以てせられたるに非ずして砲彈爆發の威力を以てせられたるものなる事明かなり是等の部署には一も水雷若くは綿火藥の如きものを保存し置かざりしを以て是等の物の爆裂に非ずして敵の砲彈は水雷に異ならざる爆裂の威力を逞うせるものなる事を示すものなり。

讀者は此の將に滅亡せんとする戰鬥艦の其處此處を徘徊して其の損害の状を巡視し其の狀況を調ぶる如き事を爲せるを以て甚だ奇怪の事と想はる可し、然り是れ奇怪の事に相違なし奇怪の事といはんよりは寧ろ是れ各艦皆な斯の如くなりし一の不規則なる法外の状態といふを得べし、何人も皆な萬事既に終りたるを明かにせり我等に取りては過去も未來も無く只だ我等に存する者は現在の刹那のみなりき、而して我等は思ひ殘さざるが爲め何等かの働きを爲して其の最期を潔くせんとの抑制す可らざる一念を有するのみなりき。

(三十三) 艦内藥莖の爆發

余は下部砲臺に下り艦尾小隊部署を巡視せる際に圖らずもクルセーリに邂逅せり信號士フオンクルセーリはポルチック沿岸のクルリヤンデヤ縣の出生にてスワロフ艦内の愛嬌者にて艦内全員の親愛を受け居る好男子なり彼は幼時より商船にて諸方に周遊し歐洲の國語には悉く通せり然し何れも充分ならず今度の遠征航海中士官室にて彼の語學通を冷評したる時彼は眞面目になりて「然し兎に角に獨逸語

丈は他の語よりは善く出来るよ」と答へたる事あり、(彼の生國は獨逸の國境なれば其地方の人民は無
論獨逸語にも通じ獨逸混合の言語も尠なからず)彼れクルセーリは中々に鍛鍊せる人物にて彼は何時
も心を平かにして如何なる場合にも面白からざる様子を爲せる事なく又如何なる事情ありても彼は他
人に遇へば必ず莞爾として其善友を迎へざるはなし此の惡戰敗衄の今も彼は遠くより余を認め嬉然た
る様子にて「君何をする所ぢや」と問へり、余は其邊を調べ居る旨を答へたるに彼は「あゝさうか僕は此
の通りまだ負傷せんが君はやられたね是れから何處へ行く積りぢや」「艦尾の小隊部署を巡視して其か
ら私室に煙草を取りにクルセーリは私室に往くか」と反問しながら異様な微笑を漏らし語を續て僕
は今私室の方より來たるばかりなれば若し私室に往くなれば僕が案内す可しと曰へり余は彼に從て私
室へと赴きたりクルセーリは實に善案内者なりき彼は破壊の爲に遮斷せられざる通路を識り居りて余
を案内せり。余は彼に從て士官私室の區域に到りしに其の邊の状態に不審なりしかば立止りたり余が
私室と其に續く他室とは既に崩壞せられ巨大なる孔竅と變じ居りたり。クルセーリは諧謔圖に當れり
と思ひてや獨り哄笑せり。余は私室の破壊を見クルセーリの諧謔を怒り手を振りて忽ち元來し路に踵
を返したりクルセーリは砲臺の處に余を追ひ來りて余に葉巻を馳走せり。

下部砲臺の火災は皆な既に鎮火せり我等は此の成功に勵まされ今度は上部砲臺の方に消防を爲さんと
試みたり、此の時二人の水兵は何處より見出したるにや全く新しき破損の無き水管を持來り其の一
端は針線にて消火用の嘴口に結び付けられ他の一端は同様に筒先に結び付けられあり「ポグダノ」は彼等
水兵に善き物を見出したりと賞して彼等に謝せり、其れより我等は水管を用意し火に焼けざる様に濕

らしたる袋にて之を覆ひ最初は禮拜所の艙口より突進し次で其處に焼け居る器物に水を注ぎ緋帶用具
の焼け居るを消し止めて上部砲臺に引き出したり、乗員は熱心消防に盡力せしかば禮拜所の火災は間
もなく鎮火せり、然るに中央六吋砲塔の後に猛烈なる火災の起りしを認めしかば我等は更に轉じて
其處に突進せり、此處は他處に比して隠れたる安全の場處なるを以て艦橋より四十七密砲の藥莖を
集め來りて此處に納れ置きたり、我等が其處に突進して將に藥莖を包まんとする猛火の消防を始むる
や否や藥莖は忽ち爆發し始めたり其れが爲に數名の水兵は或は負傷し或は即死して修羅場を現出し忽
ち混雜を生じたり、クルセーリは大聲疾呼して「何んでもないぞ一寸だ爆發は直ぐ止む」と叫びて人員
を激勵せり。左れど藥莖の爆發は益々激烈に爲りて新に得たる水管は寸斷せられたり此時、何處にや
我等の居りし近傍に例の震雷の如き敵彈炸裂の轟音を聞き鐵板を倒壊し來る等畏怖す可き猛威を逞し
うせり是れ既に六吋砲彈に非ずして例の革靴なりき、(即ち十二吋砲彈)人員は恐怖に打たれ彼等は何
人の命令も何事の號令にも耳を貸さず右往左往に遁走せり。我等は折角成功しかけたる消防が之が爲
に不成功に終りたるを憤慨して下部砲臺の方へと下りし時何か(多分何かの破片なる可し)余が脇腹に
中りたるものあり余は爲に倒されたり、クルセーリは啣へ居りたる葉巻を手に取り悠然余を振り向き
「又やられたか」と問へり余は彼を見て若し我艦隊が斯の如き健兒のみを以て補充せられたらんに
想ひたり。

(三十四) 煙霧中の暗闘

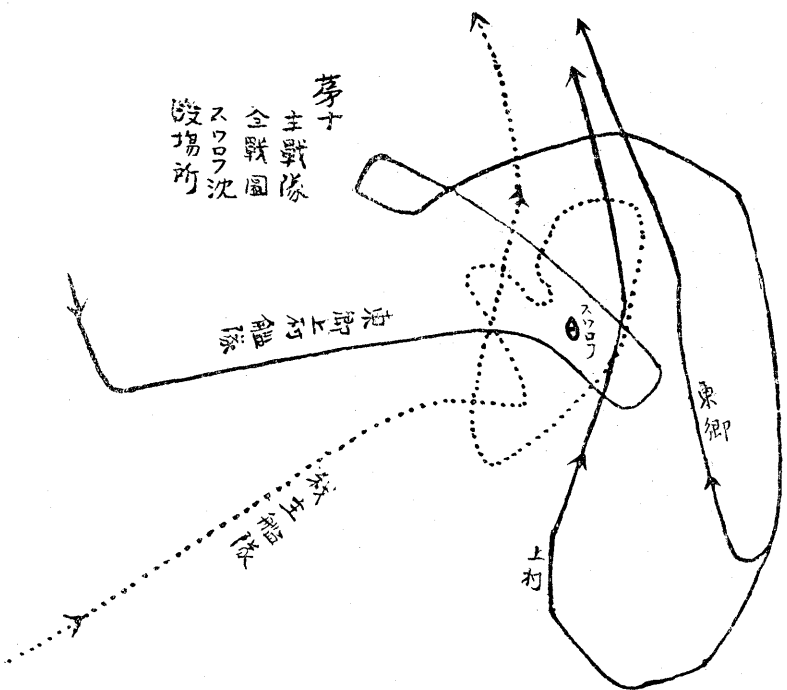
我が艦隊はスワロフの居りたる方向より俄然轉廻し後ち漸次右舷に變針して日本艦隊の我が航路の前程横斷を避けんとせり此時、日本艦隊は飽までも我が前程を横斷するの針路を取りて猛進せり、其の結果遂に兩艦隊は弓形の求心環を畫き我が艦隊は内環となり日本艦隊は外環となりて運動せり午後四時頃に至りて我が艦隊に取りて最後の一縷の希望を生せる如き情勢となれり。

我が艦隊の破壊せられたる煙筒より噴き出さるる暗晦なる煤煙や戦艦火災の濛濛たる黒煙が此の時尙ほ海上に残り居りたる濛霧と混じて海上一面漠々たる煙霧に覆はれたり、日本の主力艦隊は斯の如き煙霧の濛々たる中に進動し居りて遂に我が艦隊と離れ彼は我が艦影を見失へり、此の事に關する日本側の報告は甚だ簡略にして沈黙的なり此の時東郷は我が艦隊が如何にかして北方に逸走せる者と打算して其の何處に我が艦隊を搜索す可きやを識らざりしなり、然るに上村は此の東郷の見解に同意せずして其の自ら率ゐる所の巡洋艦隊を以て南及び西南の方へと進向せり、斯の如くなるを以て余が材料に供したる一書に「上村提督の膽勇」と題する熱切なる讃詞の一章を特筆せる所以を解するを得べし若し此の上村の膽勇なかりしならんには五月廿七日の戦闘は茲に終極を告げて我が艦隊は優に準備と整理を爲すの時間を得たるに相違なし。上村は最初に南方に進動し後ち西南に轉じて進航中遠く西方に轟く遠雷の如き般々たる砲聲を聞きたり、是れ(此の時まで成功を見ざりし)片岡提督が我が巡洋艦と運送船とを攻撃せる者なりき上村は此の片岡の戦闘に参加して勇敢なる助力を與へたり且つ間もなく其處に我が主力艦隊を發見せり、斯の如くに上村片岡等の爲に發見せられたる我が艦隊は此の時直徑約五哩程の圓形を畫きて先きにアレキサンダーが俄然廻轉せる位置に再び歸り來りたり其の近傍にス

ワロフは孤立して漂ひ居りたり時に午後五時なりき。

我等はクルセーリ等と共に葉巻を吹かしながら種々の感慨を交換して下部砲臺に佇立せり、我がスワロフの位置は陣形を亂して北方に潰走する我が艦隊の間に漂蕩せり。

此の時我が艦隊の北方に潰走する狀況を望みせるに一部の諸艦はスワロフの右方を通りたり艦隊を率ゐる先頭艦はホロチノにて(一等大佐セレブリヤンニコフ其の艦長たり)アレキサンダーは非常に破壊せられて傾斜し殆んど下部砲臺の砲門まで水面に臥し且つ全く艦列外に出で、航せしも漸次後れたり、左れど破損せざる備砲を以て依然戦闘を續け居れり、余は自ら目撃せざりしもアレキサンダーは敵彈の爲に艦首衝角より十二吋砲塔まで爆破割裁せられたりしとの事なり。



煙霧中の暗闘

我が巡洋艦と運送船とは既に主力艦隊に合するを得主力艦隊の少しく右舷後方に在りて片岡提督一隊（其の外に出羽瓜生並に小東郷等の率ゐる枝隊）に攻撃せられたり此の時上村は依然北方に航進して右舷の方即ち東方に在りたり。「革靴」即ち日本の巨弾は依然として我がスワロフに雨注せりスワロフの機關部よりは既に數時間前「族風器は空氣の中に廻轉せず全く煙の中に廻轉せり爲に人員は窒息して倒るゝに至り間もなく一人も働くを得ざるに至る可し」との報告に接したり、艦内の電燈は薄暗くなり運轉手は蒸汽力の缺乏を訴ふるに至れり。

（三十五） 負傷せる提督艦内聞焉無聲

此の時我等は水雷艇近づき來れりとの警告を聞きて我が旗艦に残れる唯一の備砲（他の備砲は既に用を爲さざりき）に駆けつれたり、然るに敵と想ひたる艦艇は反て我が驅逐艦アイヌイなりきアイヌイは偶然にも我がスワロフの漂漾し居る傍を通過し敢て我が招致を受けたるに非ずして同艦の思ひ附きにて何等かの助力を要する事なきやを問はんとて火災に罹り居るスワロフに接近し來れるなり、甲板の上に在りたる艦長はクルイデアノーフスキイに命じ手を以て「提督を取れ」との信號を爲さしめたり。余は砲臺の上より「アイヌイ」の運動を望見し居りたるに突然其處に提督の從卒ベトルプチョフ來りて余の前に出で「佐官殿何卒砲塔に來て下さい驅逐艦が來ましたから……提督閣下は移乗を欲せられないです」と告げたり。

茲に特筆せざる可からざる一事あり其は他に非ず提督負傷の事なり、ロゼストウエンスキイ提督は負傷せられても綑帶所に入らずして僅に應急の綑帶を施されたるに過ぎざれば提督の負傷は如何程重傷なるかを何人も識らざりき、且つ負傷せられたる際に提督は人々の見舞ひの言に對して元氣に「何でも無い」とのみ答へ居られしを以て其重傷なる事を識るに由なかりしなり、其より提督を砲塔内に移らしめ箱の上に坐せしめたるまゝにて提督は始終此處に居られ時々頭を揚げて傍人に戰鬪の經過を問ひ後又沈黙せられたり、左れど此のスワロフの如き状態になり居りては提督も亦他に施すの策も無きに非ずや提督の行爲は少しも異狀なく平素の如くなりしかば何人も提督の戦況質問は是れ彼れの一時的の興奮状態の精力に過ぎず又一時の意識の閃發に過ぎずと思ふ者あざりき、今提督は目の醒めたる如くに「幕僚を集め」と明かなる命令を發し再び首を垂れて又何事を言ふも應せざる者の如くなりき。斯くて提督の命に依りて幕僚の人々を集めんとしたるに防禦甲板内に在りし負傷せる幕僚の中より集め得たりしは只だヒリポーウスキイとレオンテイの二人のみなりき、ヒリポーウスキイは居住甲板より全く隔絶せられ僅に司令塔より鐵管を以て空氣を通せる水中司令塔内に（彼は電燈の消えたる爲に蠟燭を點火して）居りたりレオンテイは出入口の處に居りたり居住甲板内は電燈の消えたる爲に暗夜も同じにて絶息する如き煙を以て充滿せられたり、幕僚を呼び集むる爲に遣はされし者も眞暗にて人影を見るを得ざりしかば只だ聲を出して呼ぶのみなりき左れど名前を呼び立て、も一人の答ふる者もなく此の暗黒なる煙の中は聞として音なく實に死の領に歸したる墓中の如くなりき、想ふに防禦甲板内の閉鎖せられたる處に在りし人々旋風扇も空氣の中に廻轉するに非ずして煙の中に廻轉し居る次第なれば何れも眩暈を催し來り次で卒倒して斃れし者なる可し、機關は既に運轉を止め蒸汽の缺乏の

爲に電燈も消えたり艦内の下の方よりは一人も出で来る者なし、嗟スワロフの居住者九百の乗員より此の時生き残れる者としては此の下部砲臺に集りたる此の少数人員に過ぎざりき。

(三十六) 提督轉乗の危険

余は下部砲臺の破壊し去られたる擬門蓋を攀ぢ抜けてクルセーリに扶けられ中央六吋砲塔の前なる右舷側に出でたり、余の右脚は全く用を爲さず左足は僅に立ち得るのみなりしかば今は人の助けを借らざれば歩行不自由なるに至れり。其處の舷側には下士と若干の水兵が前甲板の方より焼け崩れ來りたる火の付きたる木片などを取り除けて働き居りたり、我が艦首右舷の間に三四ケーブルを隔てゝ海上に停船し居る工作船カムチャツカを望見せり、上村の率ゐる巡洋艦はスウオロフに對したると同様の意氣込みを以て盛にカムチャツカを砲撃せり只スワロフに對するよりもカムチャツカに對して容易なりしなり、驅逐艦ファイヌイは我がスワロフの舷側近く徐航せり驅逐艦の艦長コロメイツエフ中佐は話筒を以て旗艦に「提督を送る端艇があるか」と叫びたり、我旗艦よりは「端艇は無い」と答へ又クルヂアースキイも何事かを答へたり。余は砲塔を一見せるに防禦扉(鐵板の扉)は破損せられて開閉の自由を失ひ動かすを得ざれば肥滿せる者には出入するを得るや否やも疑はし、砲塔内に居らるゝロゼストウエンスキイ提督は鮮血淋漓たる手巾を捲きたる頭を低く垂れて全く昏睡の狀なり余は提督に近寄りて「閣下驅逐艦が參りました御移り下さい」と叫びたるに提督は身體の位置を其儘にして低き聲にて只だ一言「ヒリツポーウスキイを呼べ」と答へられたるのみなりき。想ふに提督は他艦に移乗せられて

艦隊指揮の準備をせらるゝものなる可し故に戰艦運動の責任者たる旗艦の航海長を呼ばれし者なる可し余は提督に「今呼びます呼びに人を遣ります」と答へたり、提督は頭を横に動かして驅逐艦に移乗するを肯んせざるの意を示せり。然し提督を導き出すより先きに驅逐艦に轉乗せしむる準備を爲さざる可からざるを以て余は敢て提督の拒むに對して抵抗せざりき。クルセーリ並に下士水兵等が奔走して上部甲板より半ば焼け残りたる吊床と何やら繩を持來りて筏狀のものを作りたり、是にて戰艦の舷側より提督を驅逐艦に吊り下げんとするなり、實に危険至極の話なれど是より外に施すの道なかりしなり、間もなく筏は用意せられたり此時ヒリツポーウスキイ來りたれば余は砲塔内に入りて「閣下ヒリツポーウスキイは參りましたサー驅逐艦に參りませう」と告げたり然し提督は沈黙して頭を横に振りながら余等を一瞥せられたるのみ承知せられたるにや或は不承知なるにや了解に苦みたり、傍に居りたるクルセーリは聲高に「諸君何を互に見て居るのぢや閣下を出し給へ重傷を負うて居らるゝのぢやから」と云へり然り皆斯く思ひ居りしなり此の一言の刺激一語の叫びを待ち居りし人々は皆一時に口を開きて談じ且つ急ぎたり、數人の者は砲塔内に這込み提督の身體に手をかけて抱き揚げたり提督は自ら立つの氣力なく呻吟せらるゝのみにて全く人事不省に陥り居られしなり是れ寧ろ幸ひなりき、斯て「曳け！曳け！難作ない！横に！横に倒して！待て！裂ける！何が裂ける！上衣が裂ける！そこから曳け！」と砲塔の内外に騒々しき叫び聲を聞きたり人々は非常に困難しながら提督の上衣の裂くるを顧みず提督を砲塔の半ば閉られある戸口より漸くの事にて擔ぎ出して艦尾の昇口の邊りまで運び來りたり、是より驅逐艦の艦長コロメイツエフ中佐一度の此冒險を爲して驅逐艦を戰艦の舷

側に運轉し來りたる一刹那に提督を筏形の吊臺を以て驅逐艦に吊り下げんとするなり、海事に通せざる讀者は斯の如き運動が如何程か危険なるかは想像し得ざる可きも少しく海事に通せるものは容易に此冒險を解するを得べし。

（三十七） 幕僚と旗艦の永別

驅逐艦ファイヌイはスワロフの傍に接近せんとするには風下よりせば激浪の動搖を幾分か避くるの便あるも風下になり居るスワロフの舷側は唯り火災の黒煙漲れるのみならず災々たる猛火の威を逞うする爲に近づくを得ざりしなり、斯の如くなりしを以てファイヌイはスワロフの風上に廻りて其の舷側へと近寄りたり同艦は澎湃たる怒濤に搖られて一上一下或は艦艇の甲板が旗艦の舷門と接觸し或は遠く下方に沈下せられ又戦闘艦の舷側より激浪の爲に遠く離されしかと思へば怒濤は忽ち驅逐艦を翻弄して戦闘艦の舷側に衝突せしめんばかりに打寄せ、驅逐艦の薄弱なる舷側は岩よりも堅き戦闘艦に觸れて破壊せらるゝの危険は刻々に去來して其危険いふばかりなりき、我等は提督を抱き上げ砲塔と上部砲臺の焼けて熱し居る舷側の間なる細き通路を通りて艦首舷門の方へと運び其處より驅逐艦が波浪に搖り上げられて旗艦の方に来りたる一瞬間に提督を驅逐艦に宛然投るが如くにして移したり。クルセーリは手巾を振ながら「ウラー提督驅逐艦移乗！ウラー」と絶叫せりスワロフにも驅逐艦にも是に和してウラーの歡呼起れり。余が負傷せる脚にて如何にして驅逐艦に投じたるかは自らも覺えず只だ余は驅逐艦の二本の煙筒の間なる熱き鐵蓋の上に横はり目を離さずにスワロフを望見し居りたるの一事を

記憶せり、是れ實に終生余が記憶より除去するを得ざるの一瞬時なりき。

スワロフの舷側に在る驅逐艦の危険は舷々相觸れて衝突破壊するの危険のみに非ざりき、日本艦隊はスワロフに對してもカムチャツカ同様に銳意その砲撃を續けたれば其の砲火の爲に驅逐艦内にも弾片の爲に陸續死傷者を出せり、左れば一砲彈の命中するものあらんには驅逐艦を水底に覆没し去るの危険は各一瞬時毎に襲たりしなり、火門に佇立せるクルセーリは「速く離れ」と叫びボグダノフも亦鐵拳を固め驅逐艦の艦長コロメイツエフを打つが如き狀をなして威嚇しながら「愚圖々々するな早く離れ！提督を沈没させるな」と火び砲門より眺め居りたる水兵等も亦手巾を打振りながら驅逐艦に早く離れ去れと叫びたり。

艦長コロメイツエフは驅逐艦が旗艦の舷側より離さるゝ波浪の勢に乗じて艦艇に逆進の速力を與へたり、我がスワロフよりは最後の別辭なるウラーの聲は響きたり余はスワロフよりと云へり左れど今此黒煙と猛火に包まれて炎々焼け居る巨物が先刻まで猛威を逞うしたる戦闘艦なる可しとは誰か能く想像するを得んや。黒煙と火焰の間より艦上を眺むれば中橋は高さ上より半ば折られ前橋と二本の煙筒は挫折破壊し去られて跟方も止めず艦橋と其の通路建造物とは同じく焼け崩れ甲板の上には艦橋建造物の代りに焼けて壊倒せる鐵板は見る影もなく堆積散亂せり、左舷は低く水面に傾斜し右舷には此傾斜の爲に現はされたる喫水線下の赤く塗られたる艦腹を露出せり、而して其水面に露出せる其の右舷艦側は無数の敵彈貫通孔より火災の煙と火焰とを噴出せり、驅逐艦は日本艦隊の猛烈なる追撃砲火を受けながら急駛スワロフを離れて航走せり時に五時三十分なりき。

（三十八） 提督最後の命令

既に前段にも記述せる如くロゼストウエンスキイ提督の受けたる負傷なる可しとは今の今まで何人も想像せざりしなり、故に我等幕僚が提督に従て驅逐艦**アイヌイ**に移乗したる後先づ第一に起りたる問題は是より續いて艦隊を指揮する爲に何れの戦艦に提督を移乗せしむ可きかとの問題なりき。然るに軍醫クデノフが始めて提督の負傷に手當を施せる後に我等の見解は一變し且つ我等の位置も忽ち定まりたり、軍醫クデノフは提督の生命さへも危険なる事を斷然發表せり同軍醫の言に依れば提督の頭部の負傷は頭蓋骨の骨片が内部の方に屈曲せるを以て多少の衝動も忽ち最危険の結果を來す可し、且つ斯く風も烈しく浪も高き天候にては到底提督を他艦に移乗せしむる能はず、然のみならず提督は脚部の負傷にて既に行歩の自由を失ひ提督の一般の状態は元氣消亡且つ昏睡狀を來し時々譫語あり意識明かならずといふ様子なりしを以てロゼストウエンスキイ提督は今は何等の働きをも爲すを得ざるに至れり。

余は最初に居りたる煙筒の間の鐵蓋の上より艦橋に赴きたり、然し艦艇の動搖甚だしく特に負傷者たる余には起立し居ること全く困難なりしかば艦橋の上に横臥せり、然るに艦橋の上に横はり居るは其處に在りて艦の操縦を爲す人々の邪魔になりしかば艦長は親切なる言を以て余に綑帶所若くは其他の處に移りて休息す可きを勧めたり。此時驅逐艦**アイヌイ**は我艦隊に追附きたり然るに艦長は何等かの信號を爲すに先ちて兎に角に提督の意見を問ふ可しとの決心を爲し余に此事を託せり、余は辛うじ

て艦尾の方に至り鐵梯を下りて士官室内を一瞥せり軍醫は今綑帶を終り提督は靜に吊床の上に臥し居られ目を細く開きて兎に角に意識を有し居られたり、余は提督の許に至りて提督は引續き艦隊指揮の勞に任せらるゝ力ある事を感じらるゝや又何れの戦艦に移乗す可きやを問へり、提督は漸く辛うじて余の方に顔を向け何事かを記憶に呼び起すが如くに暫く沈思せられて後ち微かなる小聲にて「否……何處にも……自ら見る通りぢや……司令は……ネボカトフに……」と言ひ了り俄に元氣付き更に活潑なる語調にて「艦隊前進！浦鹽！針路東北廿三度」「と叫び再び昏睡狀に陥られたり、余は此提督の答を艦長に傳へたり（誰に託して傳へたるやを知らず或はレオンタイに非ざりしか）余自ら士官室に居らばやと思ひたるも其處には全く入るを得ざりき驅逐艦は上も下も上甲板までも悉く人員を以て充満せられたり、**アイヌイ**は**スワロフ**に來る前に**オスラビヤ**沈没の場所に赴きて既に二百以上の人員を救助し來れるなり驅逐艦に救助せられたる者の中には負傷せる者もあり海水を沿び潮水を飲みし者もありたり、潮水を飲みたる者は蒼白なる顔色をなして苦しきやなる咳嗽と胸の苦痛の爲に身體痙攣して普通の負傷者よりも一層苦しきやうにて見るに堪へざるものありき、余は上甲板に赴き其處の士官室に通ずる梯子の側に在りし箱の上に足を延して息ひたり。

（三十九） 日本射撃の嘆稱旗艦最後の奮闘

提督の移乗したる驅逐艦の橋頭には信號旗翻り又**アイヌイ**の側に接近し來れる**ベズウブレーチヌイ**並に**ベドウオイ**の兩驅逐艦には海上信號器を以て一の命令與へられたり、即ち**ベズウブレーチヌイ**は戦

闘艦ニコライに赴き信號を以てネボガトフ提督に艦隊の司令を委任する旨を傳達せよと命せられビードウイはスワロフに赴き殘存乗員を救助す可きを命せられたり、左れどビードウイは遂にスワロフを發見し得ざりしなり。

我等は既に我が艦隊に追ひ付きて運送船と共に航進せり此時我が運送船は前後より巡洋艦の護衛を受けて航走し居れり尙ほ右舷遙に三十ケーブルを隔て、我が主戦艦隊航進せり、艦隊を指導せるはポロチノにて戦艦アリヨール之に續ぎアレキサンターは見えざりき（同艦は既に五時頃に滅亡せり）尙ほ其よりも遙か遠方の既に薄暗くなり始めたる水平線上に我艦隊と並行して航進する日本艦隊の艦影を暮靄模糊の間に望見せり、而して日本艦隊の戦線には断えず閃々たる砲火の光を認めたり猛烈なる戦闘は今尙ほ停止せられざるなり。

余が居りたる側らにオスラビヤの一士官も救助し居らるゝを認めれば余は彼に向てオスラビヤは如何なる貫通孔を受けて遂に沈没したるやを問ひたり彼は手を振りながら残念に堪へざる如く耻辱に堪へざるが如き語調にて切れ／＼なる言を以て、何の……回想するだに悲傷の種だ！全く不運！全く下手だ！全くだ……敵の射撃の巧妙な事は誰も争ふ事の出来ぬ事實だ……照準かうまいと云はふか熟練といふ可きか實にうまいもんだ！彼等の幸運彼等の手柄だ！敵弾は三發位續て同じ處に命中するのだ！君解つたか皆な同じ處にだ！艦首砲塔の下の喫水線に皆な命中したのだ！何の貫通孔位の穴でないまるで門をあけた様なものだ！馬車を出入させる事も出来るやうな弾孔だ！艦が傾いたと思ふと水の中に傾いた……まるで瀧だ、防水柱も何もとてもたない……何もかも皆な流れた！」彼は斯く談じて

て遂に其言を終るに堪へざる如く兩手を以て顔を被ひ甲板の上に出で行きたり。

薄暮七時頃に至り我主力艦隊の航路に當りて日本の水雷艇隊現出せり、我が巡洋艦は之に對して激烈なる砲火を開きたり、彼等水雷艇は急駛退却し去れり、余は自分の居りたる箱の上に歸りて身體を出來得るだけ便利のやうにしながら敵は我が航路に水雷を投せざるかと心配せり。艦内の余が周圍にポロチノ見よポロチノ」と叫ぶ消魂しい驚駭の聲を聞き余は手を以て身を支へて起き上りて彼方を望めば今までポロチノの在りたる位置には唯だ怒濤の雪の如く白き飛沫を見るのみなり時正に七時十分なりき、日本艦隊は俄然針路を轉じて東方に向へり其艦隊と代りて敵の水雷艇は群を爲して進動し來れり、彼等水雷艇隊は我等を北東並に南方より半圓形に包圍せり、我が巡洋艦並に我等は艦尾の方より敵水雷艇の襲撃を受くるの用意を爲して左舷に廻轉し遂に殆んど眞直に西方夕焼けのせる方に轉じたり。余が身邊には羅針盤を有せざりき）七時四十分に余は尙ほ我主戦艦隊の航走し來るを認めたり我主戦艦隊は追撃し來る敵の水雷艇を追撃しながら全く陣形を亂して我等の後を追ひ來れり。

是れ余が最後の記録なりき、余が容體は益々不良になり來れり負傷の未だ繃帯も施さず泥塗れになり居る創口よりの出血と創傷の焔衝を起せる爲に非常に疲勞を感じ惡寒を催はし且つ眩暈せり、余は助けを得る爲に甲板の下に降りたり。

噫我旗艦スワロフの運命は如何なりしか日本側の報告はスワロフの最期を左の如く記せり曰く、

我が巡洋艦隊は薄暮敵を北方に追撃せる際に敵の旗艦スワロフが戦場より遠く離れ非常に傾斜し猛火黒煙に包まれて獨り残り居るを認めたり、我巡洋艦隊中に出りし水雷艇隊の藤本大尉は直ちにスワロフの襲撃に赴きたり、同艦(スワロフ)は殆ど焼け盡きしも破損を免れたる艦尾の一門の備砲を以て海上に浮び居る間は其の最期まで斷乎たる防戦を續けたり、遂に夜七時に我水雷艇の二回の襲撃を受け海底に沈下せり。

旗艦スワロフの戦死健兒に永遠の記憶あれかし(大尾)



日本海軍公報

日本海 の 海 戦 公 報

五月二十七、二十八日

第 一 報

(二十七日以來繼續中なる日本海海戦に關する聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

第 一

(二十七日午後著電)

敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天候晴朗なれども波高し

第 二

(同日夜著電)

聯合艦隊は本日沖の嶋附近に於て敵艦隊を邀撃し大に之を破り敵艦少くも四隻を撃沈し其他には多大の損害を與へたり我艦隊には損害少し驅逐隊水雷艇隊は日没より襲撃を執行せり

第 三

(二十九日午前著電)

聯合艦隊の主力は二十七日以來殘敵に對して追撃を續行し二十八日竹嶋附近に於て敵艦「ニコライ」第一世(戰艦)、「アリヨール」(戰艦)、「セニャーウイン」(裝甲海防艦)、「アブラキシ」(裝甲海防艦)及「イヅムルート」(巡洋艦)より成る一群に會して之を攻撃せしに「イヅムロード」は分離して逃去せしか他の四艦は須臾にして降伏せり我艦隊には損害なし

捕虜の言に依れば二十七日の戦闘に於て沈没したる敵艦は「ボロヂノ」(戰艦)、「アレキサダー」第三世(戰艦)、「ゼムチユーク」(巡洋艦)外三隻なりと云ふ

捕虜海軍少將ネボガトフ以下約二千

第一 報

(三十日午後 著 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

五月二十七日午後より翌二十八日に亘り沖の嶋附近より鬱陵嶋附近までの海戦を「日本海海戦」と呼稱す

第二

(同)

上)

聯合艦隊の大部は前に電報したる如く一昨二十八日午後竹嶋附近に於て敗殘敵艦隊の主力を包圍攻撃して其降伏を受け追撃を中止し之か處分に從事中午後三時頃更に南西方面に敵艦「アドミラル、ウシヤーク」の北走するを發見し警手、八雲は直に之を追撃し先づ降伏を勸告せしも敵之に應せざりし故午後六時過已むを得ず之を撃沈し其生存者三百餘名を救助收容せり又午後五時北西に敵艦「ドミトリ、ドンスコイ」を發見し第四戰隊及第二驅逐隊之に追及し日没後に至るまで猛烈に砲撃せしも撃沈するに至らず夜に至り第二驅逐隊も之を襲撃し其結果不明なりしかば昨日に至り第二驅逐隊は「ドミトリ、ドンスコイ」の鬱陵嶋の東南岸に擱坐せるを發見し目下春日と共に其處分中なり又漣は一昨二十八日夕刻鬱陵嶋南方に於て敵の驅逐艦「ビエドール」を捕獲せり同艦には二十七日の戦闘中沈没したる敵の旗艦「クニヤージ、スワロフ」より敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、エンクイスト(？)少將及幕僚以下八十餘名移乘し居りしを以て悉く之を捕虜とせり

右兩將官は共に重傷なり又千歳は一昨二十八日朝北航の途上敵の驅逐艦一隻を發見して之を撃沈し新高及叢雲は同日正午頃竹邊灣附近にて敵の驅逐艦一隻を撃破して擱岸せしめたるの報告に接せり

今までに得たる諸報告及捕虜の言を綜合するに二十七日より二十八日に亘れる戦闘に於て撃沈し得たる敵艦は「クニヤージ、スワロフ」、「アレキサンダー三世」、「ボロヂノ」、「ドミトリ、ドンスコイ」、「アドミラル、ナヒーモフ」、「ウラジミール、モノマフ」、「ゼムチユグ」、「アドミラル、ウシヤーク」、假裝巡洋艦一隻、驅逐艦二隻にして捕獲艦は「ニコライ」一世「アリョール」、「アドミラル、アブラキシン」、「アドミラル、セニヤークウイン」、「ビエードウイ」の五隻なり尙ほ捕虜の言に依れば敵の戦艦「オスラーピヤ」は二十七日午後三時、四時の交大破の後沈没し又「ナワリン」も沈没せりと云ふ其外第三戰隊は同日日没頃敵艦「アルマトズ」が進退自由を失ひ將に沈没せんとするを目撃せしと云ふも暫く疑を存し未だ報告に接せざる二十七日日没後より決行したる我驅逐隊、水雷艇隊襲撃の成果と共に之を後日に調査報告せんとす

我艦隊諸艦艇の損害に就きては未だ詳細の報告に接せざるも本職の視界内に在りしものには一も大破したるものなく孰も尙ほ作戰任務に従事しつゝあり死傷も未だ調査に暇なきも第一戰隊に於て將校以下四百餘名あり

依仁親王殿下は御無事に在らせられ三須司令官は二十七日の海戦に輕傷せり

第三 報

(同)

上)

「オスラービヤ」(戦艦)、「ナワリン」(戦艦)の沈没は確實なりと認む

(備考)戦「シソイウエリキエ」モ亦二十八日午前沈没セルノ確報ニ接セリ故ニ敵ノ損害ヲ計算スルコト左ノ如シ

戦艦「クニヤージ、スワロフ」(一三五一六噸)	撃沈	同「イムベラートル、ニコライ」第一世(九五九四噸)	捕獲
同「イムベラートル、アレキサンダー」第三世(一三五六噸)	撃沈	海防艦「クネラル、アドミラルアブラキシン」(四二六噸)	捕獲
同「ボロヂノ」(一三五一六噸)	撃沈	同「アドミラル、セニヤールウイン」(四九六〇噸)	捕獲
同「オスラービヤ」(一五六七四噸)	撃沈	驅逐艦「ビエードウイ」(三五〇噸)	捕獲
同「シソイウエリキエ」(一四〇〇噸)	撃沈	即チ敵ノ損害ヲ艦種ニ區別スレバ左ノ如シ	
同「ナワリン」(一〇二〇六噸)	撃沈	撃沈	捕獲
巡洋艦「アドミラル、ナローモフ」(八五二四噸)	撃沈	戦艦	計
同「ドミトリ、ドンスコイ」(六二〇〇噸)	撃沈	巡洋艦	六隻
同「ウラジミール、モノマフ」(五五九三噸)	撃沈	海防艦	五隻
同「スウエトラナ」(三七二七噸)	撃沈	特務船	一隻
同「ゼムチユーク」(三一〇三噸)	撃沈	驅逐艦	二隻
海防艦「アドミラル、ウシヤール」(四二二六噸)	撃沈	總計	十七隻
特務船「カムチャツカ」(七二〇七噸)	撃沈	噸數總計	十五万三千四百一十一噸
同「イルチツシエ」(七五〇七噸)	撃沈	右ノ外巡洋艦「アルマーズ」(三二八五噸)ハ沈没ノ疑アリ	
驅逐艦	三隻	捕虜中將ロセストウエンスキエ、少將ネガトフ少將、エンク	
戦艦「アッリール」(一三五一六噸)	捕獲	イスト(?)以下三千餘名	

第四報

(三十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

佐世保軍港に送りし各戦利艦は昨三十日夕刻までに其の乗員の陸送を了り全く我有に歸せりロゼスト

ウエンスキエ中將は海軍病院に收容せられたり前報告に戦利艦「ビエードウイ」の捕虜中にエンクウイ
スト少將あるを電報したれとも後右は全く無線電信の誤謬なるを知れり取消されたり

露國病院船「アッリール」、「カストロマ」の二隻抑留に關する聯合艦隊司令長官報告の要領

五月二十七日敵艦隊に従ひ朝鮮海峡に來れる露國病院船二隻は海牙條約違反の嫌疑あり且つ作戦上重
要の必要ありたるに依り一時之を抑留して翌二十八日佐世保軍港に引致せしめたり

第五報

(三十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

其後續々到達せる麾下各部隊よりの報告を綜合するに敵の戦艦「オスラービヤ」は二十七日海戦の初期に
大破して隊列を脱し午後三時過第一に沈没したること確實なり又戦艦「シソイウエリキエ」巡洋艦「アド
ミラル、ナヒモフ」及「ウラジミール、モノマフ」は已に二十七日の晝戦に撃破せられたる後同夜我艦
逐隊水雷艇隊の水雷攻撃に大破し全く戦闘航海力を失ひ對馬附近に漂流し翌朝に至り我假裝巡洋艦信
濃丸、八幡丸臺南丸、佐渡丸等之を發見して將に捕獲せんとせしも幾何もなく皆沈没せり其生存者約
九十五名は右假裝巡洋艦及沿岸民家に收容せられたり又戦艦「ナワリン」は二十七日日没後我水雷艇隊
攻撃の結果水雷四發命中し沈没せると其生存捕虜の言に依り確實なり又敵の巡洋艦「スウエトラナ」
は二十八日午前九時頃竹邊灣沖に於て新高、音羽の一隊に追撃せられ遂に撃沈せられたりとの新高艦
長の報告に接す其他敵艦「アウローラ」「アルマーズ」も二十七日夜の我水雷攻撃のため撃沈せられた
るの疑あり又前報告撃沈敵艦中に「ゼムチユーク」を算したれとも稍々疑あるを以て正確の調査を了る

まで暫らく之を取消す

茲に報告する所と前電報告を綜合すれば敵艦隊の主力たりし戦艦八隻、装甲巡洋艦三隻及装甲海防艦三隻は悉く撃沈又は捕獲せられ其手足たりし二等巡洋艦以下も大部分撃滅されたるを以て此一戦に於て敵艦隊は事實上已に全滅に歸せり我艦隊の損失に付ては其後の報告に依り二十七日の夜襲に際して三十四號艇三十五號艇及六十九號艇の三隻が敵の防禦砲火に撃沈せられ其乗員の大部分は僚艇に救助收容せられたるの外損失と認むべきものなく驅逐艦以上は其損害の程度豫想外に尠く一として今後の戦闘航海に支障あるものなし若し夫れ麾下將卒の死傷に至りては對戦の後初めより其多數を豫期したるに其後の死傷報告比較的僅少にして今日の所之を八百以内に算す是等死傷報告は到達次第著々電報し成べく速に家族の慰安に努めんとす

今回の海戦は彼我海軍共に殆ど其全力を捧げて對抗し戦場の局面頗る宏大なりしのみならず當日の天候濼氣深くして砲煙煤煙を混せざるも尙ほ展望五里以外に及ばず爲に晝戰に於ても麾下各部隊戦狀を本職の眼界に置くこと能はず加之戦闘二晝夜に亙り麾下各部隊は各方面に離散せる敵を追撃し今尙ほ戦後の諸任務に従事せるものさへあれば全軍の戦闘詳報に至りては尙ほ數日の後にあらざれば進達すること難し

第六報

(三十一日 著)
聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告

敵艦「ドミトリー、ドンスコイ」の生存者を收容して本日午後歸合したる春日艦長の報告に據れば「ド

スコイ」は一昨二十九日朝排水を中止し「キングストン」を開き自ら沈没し其乗員は盡く鬱陵嶋に上陸したるものにして同艦の生存者中には沈没敵艦「オストラビヤ」及驅逐艦「フリースイ」よりの收容者あり右「フリースイ」は二十七日午後敵の旗艦沈没の前司令長官ロゼストウエンスキー以下幕僚を收容し此際一弾を受け尋て「オストラビヤ」の乗員二百餘名を收容したるも航海困難なるを以て司令長官以下幕僚を僚艦「ビエードウイ」に移し北方に遁走中二十八日朝「ドンスコイ」に邂逅し其乗員を悉く該艦に移し「フリースイ」は自ら沈没せりと云ふ又「オストラビヤ」生存者の言に據れば同艦は二十七日戦闘の初期第一の命中弾を司令塔に被り司令官フェルケルガム直に戦死し次で連續慘烈なる集弾を被り午後三時過僚艦の間に沈没せりと云ふ又「ドンスコイ」生存者の言に據れば二十七日晝戰中驅逐艦二隻が亂軍の中に沈没せるを目撃せりと之を事實とすれば敵驅逐艦の沈没したるもの前後六隻と爲れり

(備考)「フリースイ」はロゼストウエンスキー乗艦の上浦港に到達せる旨露國に於て公表せりと噂するものあり

第七報

(六月一日 著)
聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告

一昨三十日北方の追撃より歸り直に南方の搜索に赴きたる撃手 八雲の一隊は只今(六月一日午後)歸著せり同隊は鳥島附近より上海航路の兩側を隈なく搜索せしも遂に敵影を見る能はざりしと云ふ又鳥村第二艦隊司令官(撃手坐乗)の報告に依れば二十七日の海戦中午後三時七分敵艦「ゼムチューグ」か撃手の前面約三千米突に於て同艦の猛射に遭ひ約十分時にして沈没せしこと確實なりと當時該艦火災に罹り其騰煙海面を掩ひ我他の諸艦よりは「ゼムチューグ」の沈没を目撃する能はざりしを以て先に暫く

疑を存し置きしものなり

第八報

(六月二十二日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

敵の特務艦船中去る二十七日の海戦に撃沈されたるは假裝巡洋艦「ウラル」、運送船「イルチッシュ」、工作船「カムチャッカ」外一隻なり右一隻は敵艦隊が給炭用として随伴したる曳船二隻中の一にして捕虜の言に據り其沈没したるを知れり

海戦當時戰場に現在せし敵の艦船中今日までに其行方不明なる者は二等巡洋艦「オレンジ」、「アウローラ」、三等巡洋艦「イズムールド」、「アルマーズ」特務艦三隻、驅逐艦二隻、曳船一隻にして其他は悉く撃滅又は捕獲せられたり右殘艦中「オレンジ」、「アウローラ」は二十七日の海戦中我第三戰隊、の射界内に入り時々火災を起せしを目撃したるを以て假令殘存せりとするも其の戰鬥力の回復には多數の日子を要すへしと信ず

確定詳報

(聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

天祐と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七日敵の第二、第三艦隊と日本海に戦ふて遂に殆ど之を撃滅することを得たり始め敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め朝鮮海峡に全力を集中して徐に敵の北行を待ちしか敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後漸次北行し來りしを以て其我近海に到達すべき數日前より豫報の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し各戰

列部隊は一切の戦備を整へ直に出動し得る姿勢を持して各々其根據地に泊在せり果然二十七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦隊二〇三地點に見ゆ敵は東水道に向ふものゝ如しと警報し全軍勇躍直に發動し各部隊は豫定の部署に準して對敵行動を開始せり午前七時内方警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を發見して敵既に宇久嶋の北西二十五海里の地點に達し北東に航進するを報し巡洋艦隊(片岡中將直率)東郷(正路)戰隊續て出羽戰隊も午前十時、十一時の交壹岐、對馬の間に於て敵と觸接し爾後沖の嶋附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と觸接を保持し詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此日海上濛氣深く展望五海里以外に及びざりしも數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映するか如く未だ敵を見ざる前既に敵の戰列部隊は其第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふこと敵の陣形は二列縦陣にして其主力は右翼列の先頭に占位し特務艦船は後尾に續行せること又敵の速力は約十二節にして尙ほ北東に航進せると等を知り本職は之に依り我主力を以て午後二時頃沖の嶋附近に敵を迎へ先づ其左翼列先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり主力隊(主戰艦隊)東郷大將直率「裝甲巡洋艦隊」上村中將直率「瓜生戰隊及各驅逐隊」は正午頃既に沖の嶋北方約十海里に達し敵の左側に出んがため更に西方に針路を執りしか午後一時三十分頃出羽戰隊巡洋艦隊及東郷(正路)戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し同時四十五分に至り正に我左舷南方數海里に始て敵影を發見せり敵は豫期の如く其右翼列の先頭に「ポロチノ」型戰艦四隻の主力艦隊を置き「オスラビヤ」「シンイペリキー」「ナワリン」「ナヒモフ」より成る一隊左翼列の先頭に占位し「ニコライ」一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ「ゼムチヌーク」「イズムールド」の二艦は兩

列の間に介立して前方を警戒せる者の如く尙ほ其後方濃氣の中に「オレグ」「アウロラ」以下二三等巡洋艦の一隊「ドミトリドンスコイ」「ウラジミルモノマフ」其他特務艦等數裡に亘りて連綿航續するを仄に認むるを得たり是に於て全軍に戦闘開始を令し同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよとの信號を掲揚せり而して主戦艦隊は少時南西に向首し敵と反航通過すると見せしか午後二時五分急に東に折れ其正面を變して斜に敵の先頭を壓迫し裝甲巡洋艦隊も續航して其後に運り出羽戦隊、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷（正路）戦隊は豫定戰策に準し孰も南下して敵の後尾を衝けり之れを當日戦闘開始の際に於ける彼我の對勢とす

主力艦隊の戦況

敵の先頭部隊は主戦艦隊の壓迫を受けて稍々其右舷に轉舵し午後二時八分彼より砲火を開始せしかは我は暫く之に耐へて射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に集弾せり敵は之が爲益東南に擊壓せらるゝものゝ如く其左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縦陣を形成して我と並航の姿勢を執り其左翼列の先頭艦たる「オストラビヤ」の如きは須臾にして擊破せられ大火災を起して戦列より脱せり此時に當り裝甲巡洋艦隊も既に盡く主戦艦隊の後方に列し我全隊の掩蔽砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し敵の旗艦「クニャージスワロフ」「二番艦皇帝」「アレキサンダー」三世も大火災に罹り戦列を離れ敵の陣形愈々亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く其騰煙西風襲きて忽ち海上一面を蔽ひ濃氣と共に全く敵影を包み主戦艦隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの状況なり又我軍に於ても各艦多少の損害を蒙り淺間の如きは後部水線に近く三弾を受けて舵機を損し且つ浸水甚

しく一時止むを得ず列外に落伍せしが幾もなく應急修理して再び戦列に入れり之れ午後二時四十五分に於る彼我主力の戦況にして勝敗は既に此間に決せり我主力隊は如此敵を南方に擊壓し煙霧の中敵影を發見する毎に緩除に之を砲撃しつゝ午後三時頃には既に敵の前路に出で約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向首し我後尾を回りに北走せんとするが如きを以て主戦艦隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ裝甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方に擊壓し之を猛射し午後三時七分敵艦「ゼムチューグ」は裝甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を蒙り既に戦闘力を失ひたる「オストラビヤ」も同時十分に沈没し孤立せし「クニャージ、スワロフ」は益々大破して其一橋二煙突を失ひ全艦煙焰に包まれて操縦する能はず混亂せる爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ又其針路を東方に採れり是に於て主戦艦隊も亦一齊に右十六點に回頭し裝甲巡洋艦隊之に次ぎ遁るを追て益々敗敵を掩撃し時々機を見て水雷發射をも試み午後四時四十五分頃に至るまで主隊の戦闘に就ては別に著しき現象なく始終敵を南方に壓して砲撃を繼續したるに過ぎず此間壯烈の事績として特記すべきは千早及廣瀬（順太郎）驅逐隊が午後三時四十分の頃鈴木（貫太郎）驅逐隊が午後四時四十五分の頃敵の廢艦「スワロフ」に對し勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて前者の奏効は確實ならざりしも後者より發せし一水雷は敵艦の左舷後部に命中し須臾にして艦體十度許傾斜するを見たり此兩回の襲撃中廣瀬驅逐隊の不知火及鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ共に一弾を受けて一時危殆に陥りしも幸にして遂に無事なることを得たり午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや漸次南方に向て遁走するものゝ如く依て我主隊は

裝甲巡洋艦隊を先頭とし之を追撃せしが少時にして敵遂に影を煙霧の中に失し南下すること約八海里行く行く我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務艦船等を緩射し午後五時三十分主力艦隊は再び針路を北方に執りて敵の主力を索め裝甲巡洋艦隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫り爾後日没に至るまで此の兩戦隊は分離して各別の行動を執り又相見る能はざりし

主戦艦隊は午後五時四十分頃其左近距離に在りし敵の特務艦「ウラル」に一撃を加へて直に之を撃沈し尙ほ北方に索戦し航進せる際左舷艦首に當り敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し直に近きて之れと並航戦を再始し漸次敵の前方に出で、其先頭を撃壓せしかば敵は始め北東の針路を採りしも次第に西方に屈折し遂には北西に向針するに至れり此並航戦は午後六時より日没まで連續し敵は大破の餘其砲力減少せるに反し我沈著なる射撃は益々其威力を逞ふし「アレキサンダー」三世と見えたる敵艦は早く列外に出でて後方に落伍し先頭に占位せし「ポロヂノ」型戦艦は午後六時四十分頃より大火災を起し七時二十三分に至り俄然爆煙に包まれて瞬時に沈没せり蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか又當時南方に在りて敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝありし裝甲巡洋艦隊の諸艦は己に傾斜して進退自由ならざる「ポロヂノ」型敵艦一隻が午後七時七分敵艦「ナヒモフ」の側に來り遂に顛覆沈没せるを目撃せり後日捕虜の言に依り之れ即ち「アレキサントル」三世にして主戦艦隊の見たるものは「ポロヂノ」なりしを知るを得たり

此時夕陽已に暮き我が驅逐隊、水雷艇隊は東南北の三面より漸次に迫り已に敵に襲撃準備姿勢を執れるを以つて主戦艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十八分)と共に東方に變針し同時に本職は龍田をして全軍北航して明朝樽陵島に集合すへしと傳令せしめ茲に當日の晝戦を結了せり

出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊の戦況

午後二時戦闘開始の令下に出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊東郷戦隊は孰も我主力艦隊と分離し敵を左舷に見て反航南下し豫定戦策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及「オレグ」「アウロラ」「スウイートラナ」「アルマーズ」「トミトリトンスコイ」「ウラヂミルモノマフ」等の巡洋艦等を脅威迫撃せり出羽、瓜生戦隊は終始共同連繫して午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦に對して反航戦を開始し漸次敵の後尾を旋撃して其右方に出で更に並航戦を試み爾後優速力を利用し機宜我正面を變して或は敵の左に顯れ又は右に廻り攻撃を持續すること約三十分にして敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し其の特務艦船の如きは遂に右往左往して爲す所を知らざるの常態に陥れり此間午後三時過ぐるの頃「アウロラ」と見えたる敵艦單獨敵中より突進し來りしも我が猛射に多大の損傷を負ふて撃退せられ又午後三時四十分頃突撃し來りたる敵の驅逐艦三隻も爲す所なくして撃攘せられたり

出羽、瓜生戦隊協力攻撃の効果は午後四時の交に及んで著しく發展し敵の後方部隊は全く潰亂して箇々分裂し其諸艦船皆多少の損害を受けたるものゝ如く特務艦船中には既に操縦の自在を缺くるものあるを見るに至れり

瓜生戦隊は午後四時二十分頃三橋二煙突を有する敵の特務艦船一隻(或は「アナツール」ならん)か一方に孤立するを認め直に近きて撃沈し尋て四橋一煙突の特務艦船(或は「イルチツシユ」ならん)を猛射して殆ど之を撃破せり此頃より巡洋艦隊、東郷艦隊も來り加り出羽、瓜生戦隊と協同して共に潰亂せる

艦の巡洋艦及特務艦船を掩撃しつゝありしが午後四時四十分の頃北方より我が主隊に撃壓せられたる敵の戦艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其巡洋艦に合力せしかば瓜生戦隊巡洋艦隊の如きは少時距離に於て之と對戦するの苦境に陥り孰も多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり之より先き出羽戦隊の旗艦笠置は其左舷炭庫水線下に一弾を蒙りしが爾來浸水漸く増加し其應急修理のため波靜なる所に行くの止むを得ざるに至り出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ひ麾下の他艦は之を一時瓜生司令官の指揮の下に屬せしめ午後一時油谷灣に赴き其將旗を千歳に移し夜に入りて出港北行せしも笠置は修理に時間を要し遂に翌日の追撃に参加する能はざりし

又瓜生戦隊の旗艦浪速も後部水線に敵弾を蒙り爲に午後五時十分同戦隊は一時避戦して其損所の應急修理を爲せり

此時に當り敵は南北兩方面共に既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て午後五時十分の頃裝甲巡洋艦隊が我主隊と分離して此方面に來り南方より敵の巡洋艦を追撃するに同時に敵は群を爲して悉く北方に遁走し瓜生艦隊巡洋艦隊及、東郷戦隊も共に之を追撃せしが其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦「クニヤージ、スワロフ」及「工作船」カムチャッカ」を發見し巡洋艦隊、東郷戦隊は直に其撃滅に轉じて午後七時十分「カムチャツカ」を撃沈し尋て巡洋艦隊に隨伴せる富士本水雷艇隊は突進して「クニヤージ、スワロフ」を襲撃し同艦は尙ほ艦尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも遂に我が水雷二發の下に沈没せり時に午後七時二十分なり幾もなく此等の諸戦隊は鬱陵島集合の電令に接し孰も戦を止めて北東に向進せり

各驅逐隊及水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり

此日朝來南西の強風浪を揚ぐると高く小艇の操縦大に困難なるを認め本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先ち盡く三浦灣に避泊せし程にて夕刻に至りて風較々和ぎしも浪尙は靜らず洋中の水雷攻撃は我に不利尠からざるの状況なりしも然も各驅逐隊及艇隊は此一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日没前に來り會し各々先を争ふて敵に當り藤本驅逐隊は北方より矢島驅逐隊及河瀬艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し吉島驅逐隊は東方より廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は南方より敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し日没の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり敵は此勢威に屈したるにや日没後倉皇南西に避け更に東方に變針したるものゝ如く午後八時十五分矢島驅逐隊が第一撃を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始として各驅逐隊水雷艇隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し午後十一時頃に至るまで連續激烈なる肉薄襲撃を決行したり敵は日没より探照砲火を以て極力防戦せしも遂に此攻撃に耐へず其僚艦相失して四分五烈の情態となり各々血路を求めて任意に運動せしかば我襲撃隊の追躡と共に茲に一場の大混戦を現出し少くも敵の戦艦「ソニイベリキ」裝甲巡洋艦「アドミラルナヒモフ」及「モノマフ」の三隻は此間我水雷に罹りて全く其戦闘航海力を失ひ又我軍に於ても福田艇隊の第六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及河田艇隊の第三十五號艇の三隻は襲撃の際敵弾の爲め撃沈せられ驅逐艦春雨、曉、雷夕霧、並に水雷艇鷲、第六十八號第三十三號艇等は敵弾又は衝觸等のために多少の損害を被り

爾後一時戦闘に参加し難く死傷も又比較的少しとせず就中福田、青山及河田艇隊の死傷最も多し但し沈没水雷艇三隻の乗員は友艇雁、第三十一號及第六十一號艇等に依り救助收容せられたり

後日捕虜の言を聞くに當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆んど言語に絶し我艦艇連續肉薄し來りしを以て其應接に暇なく且其距離餘り近き爲め備砲俯角の度を過ぎ照準する能はざりしと云ふ

前記のものゝ外鈴木(貫太郎)驅逐隊及自餘の水雷艇隊は當夜他方面に索敵せしが鈴木驅逐隊は二十八日午前二時の比韓崎の北東微東約二十七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見して直に之を襲撃し其一隻を轟沈せり後日生存捕虜の言に依れば轟沈されたる此敵艦は敵艦「ナワリン」にして同艦は兩舷に連續二發死の水雷命中し少時にして沈没せりと云ふ自餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりし

二十八日の一般戦況

二十八日黎明前日來の濛氣拭ふが如く主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は既に鬱陵島の南方約二十海里に達し爾餘の戦隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にし順次後方より集合の途上に在り午前五時二十分本職は敵の退路を遮断する爲め麾下巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張らしめんとする際後方約六十海里に占位して北進しつゝありし巡洋艦隊は早くも敵影を發見して東方に當り艦隊の煤煙數條あるを警報す幾何もなく同戦隊は敵に近づき復た報じて曰く敵は戦艦四隻(後に至り二隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り今北東に向針すと是れ問はずして殘敵の主力たるや瞭なり此に於て主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は其針路を反轉し漸次東方に向ひて敵の前路を扼し東郷、瓜生戦隊も亦巡

洋艦隊に合して敵の後方を抑へ午前十時三十分の頃南方約十八海里の地點に於て全く此敵を包圍せり敵は即ち戦艦「ニコライ」一世、「アリヨール」、海防艦「ゲネラル、アドミラル、アブラキシン」、アドミラル、セニャーピン」及巡洋艦「イズムルード」の五隻にして他の一隻の巡洋艦は遙に南方に後れて當時其影を失す固より敗餘の敵艦已に多大の損傷を負へるのみならず我優勢に抵抗し得べきにあらざれば主戦艦隊、装甲巡洋艦隊が先づ砲火を開くや須臾にして敵艦隊司令官ネボカトフ少將は其部下と共に降意を表し本職は特に其將校以上に帶劍を許して之を受けたり然るに敵艦「イズムルード」のみは降伏に先ち其快速力を以て南方に遁れ我東郷戦隊に遮られて復東方に走れり此時油谷灣より歸港したる千歳も其朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を撃沈したる後此地に來り會し直に轉じて「イズムルード」に追尾せしが遂に及ばずして之れを北方に逸せり

是より先き瓜生戦隊が北航の途上に在るとき午前七時の頃西方に一隻の敵影を發見し音羽、新高の一小隊を有馬音羽艦長の指揮の下に之が撃滅のため分派せしが同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し其敵艦「スウェトラナー」が一驅逐艦を伴へるものなるを知り益々之を追窮し戰鬥約一時間の後午前十一時六分竹邊灣沖に於て全く「スウェトラナー」を撃沈し尙新高は其時來會したる驅逐艦叢雲と共に殘れる敵の驅逐艦「ブイストリー」を追撃し午前十一時五十分遂に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅せしめたり而して右二敵艦の生存乗員は我特務艦亞米利加丸及春日丸に依り悉く救助收容せられたり

敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は爾後尙其地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝあ

りしが午後二時頃南方より戦艦「アドミラル、ウシャーコフ」の來るを發見し警手、八雲の一隊は直に之に向ひ午後五時過其南走するを追及して先づ降伏を勸告せしも之に應せず反て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲撃して遂に之を撃沈し其生存者約三百餘名を救助收容せり又驅逐艦漣、陽炎は午後三時三十分の頃鬱陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し極力之を北西に追躡し午後四時四十五分追及して戦闘を開始せしに敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり依て漣は直に之を捕獲せしに此驅逐艦は「ビエドゥイ」にして敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將及其幕僚の移乘し居るを知り其乗員と共に之を捕虜と爲せり尙陽炎は他の驅逐艦を追撃して午後六時三十分及びひしも遂に之を北方に逸せり又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戦隊及矢島驅逐隊は敵艦「ドミトリ、ドンスコイ」の北走するを發見し之を追尾して午後七時鬱陵島の南約三十海里に至りし頃恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等が既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し瓜生戦隊と共に之を挾撃するの好位を制し左右相待て日没後まで之を猛撃し殆ど敵を撃破し得たるも未だ撃沈するに至らずして遂に夜に入り其影を失せり此攻撃中止と共に吹雪及矢島驅逐隊等連續之を襲撃し其效果不明なりしも翌朝に至り「ドミトリ、ドンスコイ」は鬱陵島の東南岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり而して同島に上陸したる其の生存者は春日、吹雪等にて救助收容せられたり

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たる際南方前日の戰場に於ても亦相應の殘獲ありたり此日早朝戰場掃除の任務を持って出發したる特務艦信濃丸、臺南丸、及八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て戦艦「シソイ、ベリキヤ」が前夜の水雷攻撃に傷き將に沈没せんとするを發見し之が捕獲の手續を了して其乗員を救助收容せり而して該艦は午前十一時零五分終に沈没せり又驅逐艦不知火特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五海里に於て敵艦「アドミラル、ナヒモフ」が沈没に垂んとするに會し續て又た敵艦「ウラジミル、モノマフ」が著しく傾斜して其附近に來るを發見し孰も佐渡丸にて捕獲處分を爲せしに二艦共に大破して浸水甚しく遂に其乗員を救助し得たる後午前十時の交相前後して沈没せり其時又敵の驅逐艦「グロムキヤ」も此附近に來りしか遽に北方に遁逃せしを以て不知火は直に之を追撃して蔚山沖に至り午前十一時三十分頃水雷艇六十三號と協力攻撃し敵砲の沈黙するに及んで之を捕獲し其生存乗員を捕虜とせり

該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり其他麾下砲艦特務艦等にて戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員尠からず戦利艦五隻の捕虜と合して其數殆ど六千に達す以上は五月二十七日午後より二十八日午後に亘れる海戦の經過にして其後當隊の數部は尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも遂に又其隻影を見ず日本海を通過せんとせし敵艦隊約三十八隻にして我撃滅又は捕獲に洩れたりと認むるものは巡洋艦、驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず而して此の二日間の戦闘に於て我艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして其他多少の損害を蒙りたるものあるも一として今後の役に支障あるものなし又死傷は全軍を通し將校以下戦死百十六名負傷五百三十八名にして其細別は別に報告せるが如し

此對戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず敵の將卒も亦其祖國のために極力奮闘したるを認む然

も我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇績を収め得たるものは一に
 天皇陛下の御稜威の致す所にして固より人爲の能くすへきにあらず殊に我軍の損失死傷の僅少なりし
 は歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく嚮に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆此成果を
 見たるに及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し

(備考) 戰場ニ類レタル敵艦船

戰艦	八隻	六隻 擊沈「クニヤマトツ、スプロフ」、「アレキサンダー三世」、「ホロヂノ」、「ゴスラビヤ」、「シツイペリキヤ」、「ナワリン」	二隻 捕獲「アリヨール」、「ニコノイ一世」	假裝巡洋艦	一隻 擊沈「ウラール」		
巡洋艦	九隻	四隻 擊沈「アドミラル、ナヒモフ」、「ドミトリイ、ドンスコイ」、「ウラチミル、モノマフ」、「スウエトフーナ」	三隻 馬尼刺ニ逃走抑留「アウロラ」、「ヤク」、「ゼムチユーク」	特務船	六隻	四隻 擊沈「カムチャツカ」、「イルチツシユ」、「アナスイリ」、「ルツシ」	二隻 上海へ逃入武裝解除「コンヤ」、「スウエリ」
海防艦	三隻	二隻 捕獲「アブラキシン」、「セニヤウイン」	一隻 浦鹽ニ逃入「アルマーズ」	病院船	二隻	二隻 抑留「アリヨール」、「カスツロマー」	内「カスツロ」
驅逐艦	九隻	四隻 擊沈「ブイエドワイ」、「グロムスキー」	一隻 上海へ逃入武裝解除「ホードルイ」	合計	八十三隻	六十二隻	二一五隻
		一隻 上海へ逃入武裝解除「ホードルイ」	一隻 浦鹽ニ逃入「アラウイ」			二隻 抑留	二隻 逃去
		一隻 不明				二隻 逃去	二隻 逃去
		一隻 浦鹽ニ逃入「アラウイ」				二隻 逃去	二隻 逃去

露帝ニコロ提督との電報往復并に ネボガトフ少將の電奏

ロヂエストウエンスキー提督は我軍に收容後左の電報を露國皇帝陛下に電奏方東郷聯合艦隊司令長官に依頼し來りたるを以て許可せられたり

ツアールスコエ邑に於て

皇帝陛下

五月十四日(五月二十七日)午後一時三十分對馬南端と日本との間に於て十二隻より成る日本艦隊主力及十二隻より尠らざる其巡洋艦隊と戦闘を開始せり

二時三十分スフロフは中央位を去るの止むを得ざるに至れり

三時三十分幕僚の一部及小臣は知覺を失ひたるまゝブイヌイに移されしが同艦には已に沈没せるオスラビヤ乗員一部を收容しありたり

艦隊の指揮權はネボガトフに委せりブイヌイは夜間艦隊と相失せしが翌朝二隻の驅逐艦を伴へるドンスコイに遭遇してオスラビヤの兵員を同艦に移し又小臣はベドウイに移されグロムキイと共に前進せり

十五日(二十八日)の夕刻ベドウイは二隻の日本驅逐艦に降伏せるを知れり

十七日(三十日)ベドウイは佐世保に引致せらる

ラキシンの五月十五日(二十八日)敵に降伏したるの報道に接せり小臣は此災害を聞き茫然爲す所を知らずこれ全く小臣一人の責任に對するものと思惟す小臣は茲に悲慘の狀況に在る者に對し陛下の御聖鑒を切願す

ロヂエストウエンスキ

右二將官の電奏に對しては其後何等の勅答なし而してネボガトフ少將以下降服士官は露國皇帝陛下の允許なき以上は宣誓歸國を欲せざるに付又此上永く海軍の手に於て右將校等を留置くことは双方に取りて不便なるを以て將來露國皇帝陛下の勅許來りたるときは宣誓歸國を許すとの條件を附してネボガトフ少將以下投降士官を陸軍俘虜收容所に移すこととせり

明治三十八年六月二十五日

大本營海軍幕僚

我皇の仁慈

三十日海軍軍令部長子爵伊東祐享は敵旨を奉し左の通聯合艦隊司令長官東郷平八郎へ傳達せり
天皇陛下は聯合艦隊司令長官東郷平八郎をして戰艦「イムペラトル」、「ニコライ」第一世、同「アリヨール」(髮甲海防艦)「ゲネラル」、「アドミラル」、「アブラキシシ」同「アドミラルヒニャーウギン」を率ゐて投降せし敵將ネボガトフ以下に對し特に左の通履行せしむることを得せしめらる

一、ネボガトフ少將に戰況報告書並に死傷者及捕虜と爲りたる者の名簿を露國皇帝に送呈するを

許すこと

二、前記四艦より收容せる捕虜士官以上に宣誓の上其故國に歸還することを許すこと

勅語 下る

三十日聯合艦隊司令長官東郷平八郎へ左の勅語を賜りたり

聯合艦隊は敵艦隊を朝鮮海峽に邀撃し奮戰數日遂に之を殲滅して空前の偉功を奏したり

朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを憚ふ惟ふに前途尙遼遠なり汝等愈よ奮勵して以て戰果を全ふせよ

奉 答

日本海の戦捷に對し特に優渥なる

勅語を賜はり臣等感激の至りに堪へず此海戦豫期以上の成果を見るに至りたるは一に

陛下御稜威の普及ひ歴代神靈の加護に依るものにして固より人爲の能くすべき所にあらず臣等唯々益々奮勵して犬馬の勞を盡し以て皇謨を翼成せんことを期す

明治三十八年五月三十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

同日海軍へ左の勅語を賜りたり

我海軍は籌畫攻戰共に宜しきを得中外相待て敵の艦隊を殲滅し以て朕が望に副へり朕深く其偉功を嘉尙す汝等益す努力して大成を期せよ

奉 答

謹て奏す

臣 權 兵 衛

陛下の御稜威に依り帝國海軍か敵の艦隊を殲滅したるに對し茲に優渥なる勅語を賜ふ臣等感激の至に堪へす尙ほ益々奮勵以て

聖旨に副ひ奉らむことを期す臣權兵衛誠恐誠懼海軍を代表し謹て奉答す

明治三十八年五月三十一日

海軍大臣 男爵 山 本 權 兵 衛

謹て奏す

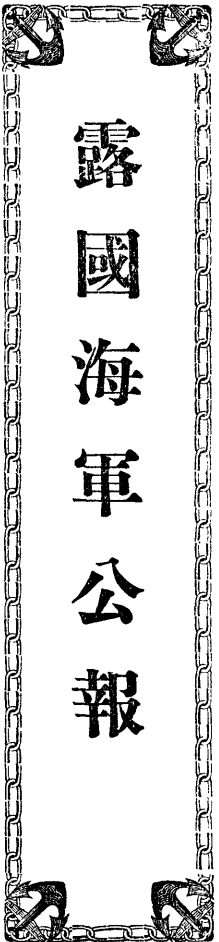
臣 祐 亨

陛下の御稜威に因り我海軍が敵艦隊を殲滅したるに對し優渥なる勅語を賜はり臣等感激の至に堪へす臣等益々奮勵誓て

聖旨に副ひ奉らんことを期す

明治三十八年五月三十一日

海軍軍令部長 子爵 伊 東 祐 亨



露提督の報告

明治三十八年四月二十三日露都着

(ロゲエストウエンスキー司令長官報告)

艦隊は未だ敵を見ず又麾下各艦は凡て完全にして兵員の健康及び士氣は共に優良なり

五月廿七、廿八日

日本海の海戦

(1)

(リネウツツチ將軍五月廿五日附報告)

浦潮斯徳に入港したる巡洋艦アルマーズの艦長が報ずる所に依れば波羅的艦隊は五月廿七日對馬海峡に於て日本艦隊と交戦せりポロヂノ、オスラビヤ兩戰艦及び巡洋艦一隻は沈没しアレキサンダー三世は大に破損しロヂユストウエンスキー提督は開戦の初に負傷して他艦に移されアルマーズは艦隊より離れたり戦争は夜に入りて繼續せられたるも其結果明かならず

(2)

(驥 逐 艦 アラウイ 艦長
ツルノ、ウオ 大尉 報告)

本艦は五月二十七日午前九時艦隊と分れたるが當時オスラビヤ及スワローフ型一隻を除き他の諸戰艦は戰陣を作り快速力にて航進せるを認めたり午後四時本船は猛烈なる十字火を受け六時砲彈は本艦の艦橋を貫き上部汽罐室爆發し前部汽罐二個蒸氣主管及前檣共に破壊せり本職は成るべく本艦の目目に

觸るゝを避けんが爲め大橋を下し日中煙突を白色に塗替へたり五月二十九日夜に至り第三蒸氣管爆發し爾來本艦は五哩以上の速力を以て汽走すること能はず又石炭缺乏を告げたるより一切木造の部分を燒棄せり五月三十日大橋を揚げ浦潮斯德に着港せり

(3)

(外 務 省 着 電)

(イヅムルド艦長フェルゼン男より六月一日チルガ灣(浦潮の北方約二百海里)發露國皇帝宛電奏)

バルチック艦隊は五月二十七日對馬海峽に進航せるに茲に敵の全艦隊と邂逅せり

砲火は午後一時廿分を以て開かれたり敵の砲火は先づ旗艦スウアロフとラスラビヤとに集注せり黄昏前に於てラスラビヤ、アレキサンドル三世及ポロヂノは沈没せりスウアロフ、カムチャツカ及ウラルは甚だしく破壊せられ遂に行く處を知らず茲に於て艦隊指揮の權はネボガトフ少將に歸したり

黄昏よりニコライ一世、アリヨール、アブラキシン、セニャグイン、ウシヤコフ、シソイウエリキーナワアリン、ナヒモフ及イヅムルドの各艦は上述の順位にて北方に向ひ進航し我艦(イヅムルド)は戦艦に傳令の任務を負へり二隻の巡洋艦即ち(ナヒモフ及びナワアリンなるべし)は艦列より遮斷せられ再び相見ること克はず

戦艦は十四海里の速力を以て進航せしが此間幾度か敵の水雷艇に攻撃せらる殊に艦列の兩端に在るものを然りとす翌朝黎明に至り我艦隊を爲すものはニコライ一世、アリヨール、アブラキシン及セニャグインのみなるを確知せり(即ちシソイ、ウエリキイ及ウシヤコフの喪失せるを意味す)

廿八日曉天地平線上に敵煙を認む本職之をネボガトフ司令官に傳へたるに司令官は茲に於て速力を進めたりセニャグイン、アブラキシンの兩艦は遮航の爲め艦後に落ちたり午前十時に至れば日本艦隊は先づ我左舷に顯はれ次で右舷に轉見す同時に敵の巡洋艦隊は我後方より左舷を壓せり我艦は隊列より分隔せられ再び之に投合すること不可能となりたるを以て浦潮斯德に向け進航することに決したり本職は敵の追躡を受けつつ全速力を以て進めり石炭の不足と敵の巡洋艦に出會するを免れんが爲め本職は途中航路を轉じてウラジミル灣(ラルガ灣より稍北方に當る)に向へり我艦は二十九日夜を以て同灣に着きしが會々眞黒咫尺を辨せず午前一時半我艦は全く灣入口の暗礁に乗上げたり

石炭を餘すと僅かに十噸剩へ艦隊を浮上げしむると到底不可能と認めたるを以て本職は乗組員を上陸せしめたる後艦の敵手に落るを防がんが爲め之を爆沈せり

海戦中水兵の負傷者十名あり士官及其他の水兵は總て安全なり

(4)

(六月五日附マニラ發
エンキスト海軍少將報告)

海戦は二十七日に生まれり日本艦隊は午後一時四十五分北方に現はれ夫より戦闘に入れり敵の戦略は我艦隊の浦潮斯德に達するを防ぐにありき我艦隊が針路を北方に執らんとする毎に敵は優勝なる速力を以て常に我艦隊の先頭を壓したり敵の戦闘艦は我の重なる戦闘艦に砲火を集中し九隻の日本装甲巡洋艦及鎮遠は獨立に運動し我戦闘艦を挾撃せんことを試みたり交戦中我巡洋艦は此の敵艦に對して行動する必要あり爲めに我運送船をして甚だ困難の地位に陥らしめたり

夜に入り敵は水雷攻撃を開始せり其結果如何は彼我艦艇を區別し能はざりしに由り本職之を明言する

を得ず本職は屢々北方に逃れんことを企てしも累次の敵の攻撃は本職をして南に逃るゝの止むを得ざるに至らしめたり

廿八日朝本職は我主力艦隊の所在を失し敵の全艦隊の攻撃を受くるの危険に瀕し我巡洋艦は既に多大の損害を蒙り加ふるに石炭の缺乏を來したるを以て遂にマニラに向ふことに一決せり木職麾下水兵の行動は稱賛に餘りあり

(5)

(六月六日 附上海發)
ライノフェンスタイン海軍少將報告

驅逐艦ボドリー號艦長の報告に曰く

戦争は廿七日午後一時に始まり午後七時頃驅逐艦ブイヌイ號は旗艦クニヤズスワロフ艦側に赴き頭部に負傷したるロヂエストウエンスキー提督を引取れり

我艦隊は當日左記の順序に於て北進せり

ニコライ一世、ボロチノ、アレキサンダー三世、アブラクシン、セニャヴイン、ウシヤコフ、シゾイヴエリキナワリン、ナヒモフは右縦隊にスウエトラナ、アルマツ、オレグ、オーロラ、ドミトリドンスコイ、モノマフは左縦隊に運送船及び水雷艇は右縦隊の間に位置せり而して午後七時半巡洋艦は左方に轉向せり若干時の後ドミトリドンスコイ、モノマフ、イズムルード、アルマツ、スウエトラナは更に北方に轉じオーロラ、オレグ、ゼムチュグは南方に驅逐艦ボドリ及ブレスチャスターも亦十節の速力にて之に従へり廿八日午前一時過ぎ此等南向諸艦は對馬海峽を通過せしもブレスチャスターは午前五時沈没し其

乗組將校四名下士卒七十五名はボドリー之を救助收容せりボドリーは南方に航行を繼續せしも遂に巡洋艦を見失ひ加ふるに石炭及艦體の木製部分を焚き盡し遂に進退谷まるに到りしが英國汽船は之を發見し上海迄引き行きたり

清國官憲はボドリー號に對し二十四時間内に出港せんことを求めしも同夕上村艦隊はサツドル島に到着し加ふるに同艦は大洋を航行する爲めには石炭不十分なるを以て其出發は即ち同艦を失ふに至るの外なきを以て本職は同艦を上海に止むることに決定したり

各日本
國本
新海
聞の
の大
評捷
論と

日本海の大戦と各國新聞の評論

英 國

倫敦の新聞紙は日本海軍の成功偉績に就きて稱讚措く能はず此勝利は英國の同盟國が恰もトラファルガル戦勝の第百周年に相當するの今日に得たるを以て英國人の歡喜は其底止する所を知らざるなり○五月三十日のタイムスに曰く今や露國は當時海軍國たるの地位を失へり一二敗殘の露艦は或は遁れて浦鹽斯德の巡洋艦に加はることあるべきも些かの艦船と黒海に存する艦船とを除くの外露國には今や軍艦の隻影だも留めざれば第四等に位する海軍にも當る能はざるなり今や露國波羅的港灣と雖も之を侵さんとするものあらば之を防遏すること能はざる可し然るに此一舉は此まで海上に敵を歴し來れる日本の制海權をして益々鞏固ならしめ敵をして復之を争ふに由なからしめたり海戦の勝敗に關しては従來多少疑懼の念を懷くものなきにあらざりしかども今や斯る念は全く消滅するに至れり佛國は其の「好意的中立」を以てロヂエトウエンスキーを誘致して之をして遂に死地に陥らしめたり敵にして此以上の光輝ある成效を收めんとは得て望むべからざるなりと○又佛國の新聞ルタンが露國政府は宜しく止むを得ざるの勢に屈從して刻下の慘怛たる戦闘を歎むべしと云へる論文を掲げたるに對しタイムスは佛國が速に露國敗衄の真相を洞觀したるは怪むに足らざるなり但し露國は果して能く此同盟國の思慮深き好意に出でたる勸告を納るゝに至るべきや否や記者の知る所に非ずと○又曰く露帝は遂に能く自ら其挫敗を認めて勵精治を圖り以て國內の改革に従事すべきや否や内治の改良は實に今回の壞敗よ

り一層其急を告ぐるに至りたるなり其の狂瀾を回す所以の策は露帝一として之に施さざるものなかりしと雖も今や百計既に盡きたれば此上戦闘を繼續するが如きあらば獨り東洋に其地位を失ふに止まらず歐洲に於ても亦之れを失ふに終らんのみ

スタンダード曰く對馬海峡の海戦は能く人の機械に勝れることを證明せり天性航海に適し又之を練習するものは海戦に勝を制するの國民なり今や露國は極東に其位地を恢復するの望み絶えなければ（少くも爾後數年間は）平和克復の望は隨て起るべきの理なり然れども果して平和の克復せらるべきや否や記者茲に疑ひなきこと能はず凡そ敗衄を重ねる毎に夜叉の心を起し以て報復を圖るの暴君は獨り埃及王のみに止まらざればなり

デイリー、テレグラフ曰く此の如き大敗を取りて戦争を繼續するは頑迷不靈と云ふも愚なり蓋し是れ愚にして且つ罪惡を犯すものなればなり奉天の戦争後露國は直に平和を締結すべかりしに其機を逸せり當時さへ早く已に媾和の理由存せり况んや今日に於てをや此特筆大書すべき對島の海戦は此悲惨なる日露間の戦役を終結するに至らんことは記者の期して望む所なり而して英國の同盟國が千古無雙の連勝を結ぶに赫々たる戦勝を以てし能く東洋に雄視せんとするに至りては英國國民たるもの誰か之を祝せざらんや

デイリー、メールは「トラファルガルの戦勝を凌駕す」と題する社説を掲げ其結論に曰く今や露國の解決すべき問題は平和を締結すべきや否やにあらざりて如何なる平和條件を日本より得べき乎にあり今にして降伏を躊躇せば既に被れる損害をして益甚だしからしむるに至らんのみ

モーニング、ポスト曰く露政府にして苟も事理を解するものならんには日本の諾すべき條件にて一刻も速かに平和を締結するの外他に策の施すべきものあるを見ず或は列國會議を催し戦勝國をして戦勝の利を收めしめざらんと圖るものあらん然れども英國は斯る會議を開くことに同意する能はざるなり英國の當に務むべきは如何なる外交上の干渉にも加はることなく固く日英同盟の條約を守り海軍をして何時たりとも變に應じて起つの備へあらしむると是れなり

自餘の諸新聞の論調も以上掲ぐる所と大體其趣を同じくせり
同 三十一日のタイムズ新聞は平和問題に就き論じて曰く今や露國は戦闘を繼續するの望み全く絶えたるものにして強て之を繼續せば自國の不利となるに止まらんのみ斯の如きは理の尤も親易きものなるに拘らずツアルヌコエセロの行宮に於ては其慮の未だ此に出でざるやの觀あるは露國の爲に惜むべしとなす

又大陸新聞中に日本戦勝の結果として黃禍の益恐るべきことを説くものあるに對し論じて曰く佛獨其他何れの國に在りても正當なる戦勝の結果を日本に得せしめざらんと欲して聊かたりとも運動をなすものゝ如きは毫も之なきを信す苟も斯る類の運動をなさんとするものあらば英國は一切の手段を盡して飽くまで之を拒むべきの責あることは世の共に知る所なり遼東還附の當時に於けるが如き愚を今日に再びせんとするものあらば假偽の黃禍を變じて却て實際の黃禍となすの路を啓くに至らん斯る不條理の愚策に出づるものあるに於ては無論英國だけは之に對して峻拒措かざるべし

スタンダードはロヂェストウエンスキーの行爲の勇敢なりしこと及其國家に忠實なりしことを稱讚し

たるの後今回の大敗が露國に平和を促すの機とならんことを望み且曰く今や露は銳意平和の基礎とすへき條件を考究するに至りたるや疑ふべきにあらず日本の政治家は先づ平和の問題を提供するは露國よりせざるべからずと主張すべし是ハ理の當に然るべき所なれども開戦以來日本は毎に慎重の態度を執りて苟も中和を失するが如きことなかりしを以て其偉功を奏したる今日に在りても必ず過度の要求を爲すが如きことあらざるべしと而して筆を擱くに臨み日英同盟のことに及んで曰く該同盟の世に裨益あるとは勿論之を認めざるべからず而して又之をして永久に存せしむることを努めざるべからず或は英國の該同盟を繼續せんとするを妨げ又英國が該同盟より生ずる一切の責任を負はんとするを阻するの舉に出でんとするが如きは是れ實に國家を誤るものと謂ふべきなり苟も政治家にして國家に對するの責務を知るものは輕々一黨派の利を圖らんとして同盟條約の大義に戻るが如きの舉に出でざるべし

自餘の大新聞も亦自由黨の新聞と共に露國に勸告するに理の在る所に鑑みて和を請ふべきことを以てせり

米 國

五月三十日發刊紐育サン曰く、日本が露國艦隊を殲滅し以て事實上同國の海軍力を碎破したるは海軍史は云ふを俟たず世界の史乘にも其の類例を見ざる偉業なりと云ふも過言にあらず日本の文明世界に對して開國せるは今より僅に五十年前の事にして其泰西文明の典型を採用してより未だ二十五年を出でず而して其稍々觀るべきの海軍を有するに至りたるより未だ十年の星霜を経ざるも爰に一躍して世

界海軍國の首班に列することゝなれり日本は陸上に於て既に名のみ世界の最強國たる露國に對して優勝國たるの實を擧げたる末今回の朝鮮海峽に於ける海戦は世界の兵力及軍艦の分配上一大變更を來したるものと云ふべし今回の海戦に依りて卜知すべきが如く日本國愈々露國を制伏せんか強國としての日本の地位は駸々として向上し其進歩發達十年前征清以後の步趨に劣らざるに於ては今世紀の終らざるに先ち宇内に首位を占むるに至るべきは疑を容れざる所なり

新式海軍機器の實用に供せられ新式戰艦現今の發達程度に達したる以來充分の實試を経たるは實に朝鮮海峽に於ける海戦を以て嚆矢とす我米國海軍のマニラ及サンチャゴに於て西國艦隊を撃破したる事實は未だ以て此の如き實試と爲すに足らざりしものなり尤も其今回の日本海に於けるが如き成果の不可能にあらざるを證したるや疑を容れず何となれば西露兩國の艦隊とも敵國艦隊に著しき損害を加へずして撃碎せられたるを以てなり新式戰艦が堂々として交戦するに於ては互に損傷なきを得ざるべしとの説は今回の一戦にて全く打破せられたりと云ふべく日本は實に海戦史上最も著しき勝利の一に數ふべき勝利を博したるのみならず自ら損害を被ることなくして能く戦勝の功を收めたる者なり

日本が露國に對し軍事上海陸とも優等に位するや歴然たり日本は實に戰勝國なり借問す歐洲諸國中遙に優大なる海軍力を有する英國の外日本に對し露國に勝りたる結果を收め得べきものありや否や而して日本にして今回の勝利に準じ愈發達して止まざれば英國と雖も餘り遠からざる將來に於て其後へに瞻着たらざるを得ざるに至らざるなきを保すべからず我米國に至りては即ち如何去る土曜日日曜日の電報は二十世紀中文開化の趨向を全然變更すに至るも未だ知るべからず

五月二十九日の華盛頓タイムズ曰く露國の敗衄は文明の凱旋なり迷信に惑溺するもの及宗教の故を以て人を虐ぐるものゝ金城鐵壁を破壊するものなり随つて人類自由進歩の最大障礙物の崩解し去れるなり
 スラブ人種とアングロゼルマン種族とは二十世紀中決死の争闘を爲すべしとは嘗て那翁の豫言せし所なり此豫言は全然事實とならんも計り知れずと雖も今や果して其一部は已に實行せられたるものと云ふべし何となれば日本國はアングロゼルマン理想の正當なる承繼者にして又其發展者なればなり世界が露國の敗衄を喜ぶ所以のものは他なし世界に於て露國政府の目的と政略を惡み此敗衄は以て平和を來すべきを以てなり今や平和は必然の勢にして其事實となるべきの機大に近づきたりと云ふべし然れども余輩は此必然の趨勢を見て歡喜すると同時に兩交戰國の勇士と其家族に對し衷心深き同情を表せずんばあらず

此争闘に於て徒に人命を損じたるは大に世界の悲しむ所なり然も世界は此人命損傷の責を以て敢て露國民衆に嫁せず全く之を貪傲傲慢懦弱の統治者に歸せり世界は露國民衆に同情を表し其前途に望みを囑し又小軀勇戰の日本人に對しては其武勇を稱揚し其策略の巧妙を驚嘆し以て萬歳を唱ふるものなり
 矮小のダヴキットは巨大のゴライアスに會しダヴキット果して勝利を得たり

佛 國

我海軍大捷の飛報は佛國新聞界に至大の反響を生ぜり諸新聞は皆舉て其の終局的効果に關する確報の到來を待ち且つ我損害の皆無なるに對し幾分の疑念を發表すると同時に露國海軍の大々の敗衄を認め而して真面目なる諸新聞紙の語調より察するに佛國公衆平和克復を切望すること瞭然なりとす左に掲ぐる所は何れも大捷報道到着の第一着の報道にて發表せられたるものなるに付尙追々評論の特筆すべきものあるべし

五月二十九日夕刊タン新聞曰く露國は其の艦隊已に潰敗したるを以て全然制海權の回復を斷念せざる可からずして其の制海權を有せざる以上は再び旅順口を取らんことは不可能に屬すリネウイチ將軍に於て如何なる事をしたればとて戦前の舊状態に回復することは到底兵力を以てなし得べきにあらざること確然なりとす露國頑硬其敗績を挽回するの必要あるや否やは奉天戰後既に世人の思想に上りたる所の問題なるが予輩も當時速かに媾和を遂ぐるこそ策の得たるものならんと思惟したり然るに露國は猶最後の決闘を試みるに決したるが今日に至りては余輩が去る三月十一日に論じたる所益確實となりたるが如し露國は其版圖の一極端にのみ其全力を集注し以て其他の地域に於ける活動を萎靡せしむることを得ず吾輩冷靜の心胸より出でたる慎重の勸告は若し佛國にして露國に同情を宿することを止めたらば決して呈供することなかるべきものなり蓋し余輩は露國の同盟に熱中すること敢て前日に異なる所なく此同盟を以て我れに對しても將た露國に對しても歴史的必要のものとなすが故に余輩は露國並に我國の利益に適合するものと確信する所の意見を開表するを憚らざるなりと

五月三十日發刊ジュール新聞は先づロヂエストウエンスキー提督の勇敢に對し若干の稱讚を述べ烈しく露艦四隻の降伏殊にニコラス一世及びアリオールの降伏を批難し(其著しく日本海軍力を増加す

べきを云云し）たる後結論して曰く此海戦の今後の結果に付露國にとりて最も良好なる推測を下すも其海軍は全滅に歸したる事を認めざるを得ず而して日本艦隊は如何なる損害を受けたりとするも東郷大將は尙ほ偉大なる優勢を占むるものなり

ヒュブリック、フランセーイ新聞は露國は今後果して何事をなすべきやとの問題を起して而して述て曰く露國は己に海戦に敗績せること明白にして而して陸戦に於ても決勝を取ること蓋し難かるべし無謀の頑剛は無用なり今や露國は其自負心如何に傷害せらるゝも最早其妄想を脱却し去らざるを得ざるの時期に至れり

ジルラフ新聞は露國利益の爲めには勿論已に幾分か萎靡したる國際的利益のためにも亦平和の必要を論じ戦後に於ける日佛露三國協同の事に論及せり

ユーマニテー新聞は人道論よりの必要のみならず佛國の如く本戦争に利害の關係ある諸國の名を以て平和克復の必要を主張し且曰く日本國今回の戦捷は露國民の自由に關し殊に重要なりとす何となれば若し戦敗其處を異にする場合に於ては人權發展の機運は確に壓碎せらるべければなり

五月三十一日刊行レビユブリク、フランセース曰く、日本の勝利は單に戦争の期間に對して間接の影響を及ぼすに過ぎず即ち露國宮廷に於ける平和派の氣勢を興奮すべきことは是なり然かも戦争にして尙繼續せられんには戦争の唯一の効果は是れまで浦潮の攻撃を遅延せしめたる危惧の念を除去したるにあり然れども海戦に於ける日本の全勝は他の點に於て大に興味を有するものとす即ち太平洋に出生したる大海軍國は向後列國の連衝の動搖するに至るべきことなりとす英米の人民も爲に憂懼すべく佛國

に至つては既に久しく日本の成功の結果に關して焦慮する所ありたり佛國は日本勢力の非常なる増進を寒心しつゝある各國と遂に事を共にするの已むを得ざるに至らん佛國自己の利益の爲め即ち亞細亞に於て佛國の位置を維持せんが爲に事茲に出でざるを得ず

エコー、ド、パリ新聞はロヂエストウエンスキー艦隊の撃滅後に於て英佛兩國が各自の同盟國に對する友誼的干渉問題は不日現實上交渉の問題を構成すべく又官邊に於ても昨日平和談判は目前に迫りたりとの談論盛なりしとの風説を掲げたり

クレマンソー氏はワール新聞に於て從來親露論者が總て露國の敗績は其實勝利なりと解釋したりしとを痛く批評し又露國の親友は旅順陥落後媾和を勸告せしものなりと言明し進んで露國連敗後に於ける國狀に付冷評を下し且問ふて曰く此慘憺たる悲劇は何れの日か終了せんとする乎と

ロシユフル氏はアントラシジャン新聞に於て論じて曰く露國の爲めに平和が崩壊かの意なり而して崩壊は則ち死滅なり併し一國の君主は其臣民を率ゐて殲滅に陥るゝの權利を有するものにあらず他日露國人は假令ロヂエストウエンスキー及ネボガトフ死したるも露帝の尙生存せられ居るを認知するに至るべし事茲に至つて露帝が事の不可能に屬するにも拘らず尙且つ固執、敗衄の勢を挽回せんとするに方りて愈其責任を重大ならしむる有らんのみ皇帝は國運の危急なるを解せざるなり各強國は須く彼に勸告するに人命の尊重すべきを以てし依つて帝が更に許多の人命を落さんとするを抑止すべし

プチット、レビユブリック新聞は露國が波羅的艦隊の士氣粗喪せる勢力を以て氣運を挽回せんとする愚昧なる抱負を酷評して聲言して曰く斯の如き犯罪的愚策を頑守する者は實に之を監禁するの價値ある

のみと

グロアル新聞は大文字を以て其結論を書して曰く戦争愈永續するときは平和條件は愈苛酷となるべし(一句不明)革命黨は團結して竊に運動し露國政府は殆ど内外の敵に向ひ永く對抗するを得ざるべし左れば假令露國は其自負心に對しては忍ぶべからざる所あるにもせよ敗餘の今日將來無益の流血を避けんが爲め平和を請求せざる可からずと

獨逸

日本國今次の戦勝は伯林に至大の感動を與へ之れに依つて速かに平和克復せらるべしとの希望益多きを加ふるの結果を生せんとは一般公衆の信ずるところとなれり

獨逸新聞は其主義の如何を問はず總て異口同音に海戦の終局せるを唱へ露國が其陸軍を以て今日迄成効し得ず一に其の艦隊に向て囑望し居たる豫期顧念は全く地に墜ちバルチック艦隊の殘艦は最早何等の活動を爲すの力なく全く殲滅の運命に遭遇するは其の免る能はざる所にして露國は今や其最終の手段を盡したるものなれば其の戰運挽回唯一の望も爰に全く消亡し去れり而して露國今回の敗衄たるや極東に於ける其海上權の平衡を恢復するの望みを遠き將來に至る迄滅却し去りたるものと云へり

日本の大捷に對する祝電は獨逸國の各部より續々帝國公使館に來着しつゝあり

有栖川兩宮殿下が府中に御馬車を驅らるゝ毎に市民の兩殿下に對する歡呼湧くが如し五月三十一日觀兵式の歸路日本國武官は街路に市民より「日本バンザイ」の聲を以て盛んに喝采せられたり

伯林ロカール、アンツアイゲル新聞曰く、日本艦隊が戦勝の利に乗ずるや至らざる所なく其追撃は精

悍を極め且つ至倅の成果を收めて敵の敗殘艦を捕獲し一旦遁逃せるロヂェエストウエンスキイ、フェルケルザムの兩提督を俘虜とし巨艦四隻が久しからずして新に旭旗を其檣頭に輝さんとするの事實は日本軍の依然として安全なるべきを證するに餘りありと云ふべし

フォツジツシエ、ツアイツング新聞は論じて曰く日本軍の作戦は海上に於ても陸上に於ても均しく燦然たる光彩を放ち其將帥、組織、管理及交通制度は全世界の嘆賞する所にして將卒は居常如何なる任務に就くことをも辭せず且つ克く自ら抑損し勤厚以て事に當り命令あれば何時にても職務に服し連戦連勝の功を致し以て常に優者の地に立ち已に奉天を屠り更に滿洲の露軍に打撃を加へんとする準備中なるに今や東郷大將は敵國の驕慢なる最後の希望を絶ち露國皇帝の輔弼にして最も深く自信する所ある輩をも今回の東洋大戦争は結局日本の敗績に終るべしとの念慮を絶たしめたり是に於てか露國は今後多年間東洋海軍國の班伍に列する能はざるとなり嘗て獨逸皇帝をして最強國の元首として謳歌せしめたる威名赫々のニコラス二世も其戦勝者に對し大敗を恢復するの望なきことなれり露國は其國境を防禦し且革命運動を鎮定する爲め歐洲に數十萬の兵を留めざるべからざるに日本は則ち國を空うして海外に送兵するを得るの位地に在り何となれば寛大なる憲法のあるあり全國民舉つて皇帝の聖意に服すればなり露國皇帝より媾和を提議するは今の時を好機とす蓋し同皇帝若し今にして媾和せざれば波羅的艦隊の全滅は革命派に聲援を與ふると頗る大なるべく今後戦争を繼續するは媾和條件をして益重大ならしむるに止まるべく且諸外國も無謀の戦争を繼續するの資金を供給せざるべきを知悉せられざる理由なきを以てなり而して各中立國の位地は正に旅順陥落の後に均しく露國に對し自ら進んで忠

言を入れ或は何等の勢を執らんと提議するの要あるを見ず然り而して日本は其戰勝及其國民の良好なる徳義心及愛國心に依り文明國及強大國の間に無比の好地位を占むるを得たり此地位たる戰爭の今日終局を告ぐると其繼續せらるゝとを問はず永く失墜せらるゝとかなるべきものなり

日本戰勝は特に武人的性質を帯べる獨逸人民をして日本に對する尊敬及び稱讚を益深からしむるは毫も怪しむに足らず是れ獨逸のみならず其他世界各地に於ても亦同様なるべきは疑を容れず有栖川宮殿下が日本海軍の偉大なる勝利の報道發表せられたる日を以て伯林に御入京ありたるは奇遇と云ふべし獨帝親しく停車場に臨幸せられ軍隊の禮式を盡して之を迎へられたるの時に方り伯林市民は會々世界歴史に特筆大書せらるべき勝利を得たる國の代表者たる同殿下を拜するの機會を得たり従つて殿下及御一行に對する待遇の懇篤誠實なるは他に其比を見ざる所にして御一行は必ず軍事上の成功を認識するに於て毫も吝ならざる國土に在を感せられしなるべし

而して露國は既にバルチック艦隊を以て今回の戰爭の結果の依て繋れる最後の手段を盡し居るものなることを繰返したる同新聞は更に左の如く論せり

露國は其最後の手段を盡して現に見るが如き失敗を致したる今日、果して論理上明白争ふ可からざる最後の結論に首服すべきか而も露國が其艦隊の全滅を招きたるの後に於て如何なる措置に出づべきやを勸告するは獨逸の義務に非ず

次で同論文は「露西亞の將來は單に東亞のみに於て存するに非ず歐洲及中央亞細亞に於ても亦存するものなれば露國が日本との戰爭の爲めに疲憊することを避け之れと和を講せんことを切に祈る」との佛國ルタン新聞の意見を轉載して筆を擱けり

壘 國

日本海海戦に關する壘國新聞紙の論調左の如し

ノイエ、フライエ、プレツセ曰く露國が最終の努力を爲したるの今日此上戰鬪繼續の爲め何等畫策し得べしとするも是れ目的もなく成功の見込あることなし日本は極東海面の専全なる主人にして露國は日本の同意を得るに非ずんば亞細亞沿岸に於て其國旗を掲ぐるを得ず是を以て露國政府は其極東に於ける地位を抛棄するか若くは媾和するか二者其一を選ばざるべからざるの究境に陥りたり

エキストラ、プラット曰く勝利は争ふべからざる覇權を日本に與ふると同時に敗績は必ず革命の潮流に新刺戟を加へんとす然らば露國は媾和するの外他に策の出べきなし
ターゲ、プラット曰く今回の戰爭に於ける成功の要件は制海權なりき而して制海權は全然露國の喪失する所となりたるを以て露國は媾和するにあらずんば只だ敗衄に加ふるに敗衄を以てするに過ぎざるべし

ツァイト新聞曰く前途一縷の望さへなきに際し戰爭を憎忌する人民に向ひ更に戰費を徴收するが如きは犯罪なり狂氣なり

フォクル、スツァイツング曰く露國は最後の手段を盡したれども遂に失敗に了はれり今や東郷は恐ら

くは進んで浦潮を封鎖するならんと
ドイツチエー、ガゼット新聞の確信する所に依れば今や此敗戦ありたるに方り露國は是非とも媾和せざるを得ずと

伊 國

對馬海峽に於る日本海軍勝利の報音が最初全歐に傳播せるは伊國トリブヌナ新聞に由りてなり同新聞は五月二十八日午後に於て在天津通信員より電報を受け取り直に號外を發したり是れ蓋し伊國新聞に在りては異例に屬す

伊國の公衆は初め略電に接して之を疑ふの風ありしが追報によりて詳細を知るに及んで日本海軍の目覺しき成功に對し大に歡喜を表したり彼れ伊國人は凡そ日本の成功とあれば其の何たるを論せず之を歡迎するを常とす然れども今回我戰捷の報音は先づ彼等をして呆然自失せしめたり蓋し伊國人と雖も亦他の歐洲人の如くバルチック艦隊の戰鬥力を過重視するに偏し居りたることなれば今や此の驚くべき戰報に接し之が説明を求むるに窮したるなり而も遂に之を日本人の報國心及戰鬥能力の高度なるに歸し今世の武裝如何に發達せりと雖も苟も兵員の技能よく之に伴ふに非らずんば遂に其戰鬥力を發揮するに能はざる者なりと論せり

伊國の諸新聞は日本海軍に對し尊敬の意を表するは勿論なるが同時に此上戦争の繼續は人命を無益に殞するものなりと論せり左に諸新聞の所説を概述すべし

タビニラン曰く浦潮斯德に達せんとする露國艦隊の計畫は茲に破れて日本の軍艦見事成功せり吾人は今や五月二十七日の海戦を以て歴史上重要なる出來事と爲すことを確言するものなり然れども此の海戦を以て東亞に於ける露國の權力を終世蝕滅せしめたるものと爲すは誤謬たるを免れざるべし何となれば浦潮斯德の軍港は猶依然として存在するのみならず今猶無限の資力を有する露國に取りて既往百年の計畫を拋棄するは最も其嫌忌する所なればなり多少の歲月の後に於て露國も再び起つて日本と抗爭し得るに至るは疑ひなかるべし而も日本は亦今や世態一變したれば我は世界的政策に加入せざるを得ずと謂ふなるべし之れに對する吾人の所見如何といふに吾人は曾て所謂黃色患なるものを信じたることなし而して吾人は此確信は今回日本海軍の大決勝後と雖も敢て替ることなきなり若し露國以外の歐洲大陸に位する國にして今二十世紀の文明を以て彼我相互の意思と權利義務とを尊重する和好の意義に解せずして矢張り十九世紀に於けるが如く文明の擴張は宜しく之を砲門に訴ふべしと思惟するものありて爲に日本と戦を啓くものあらば黃色患なるもの茲に初めて發現するに至るべきも苟くも然らざる限り斯句は畢竟無意義たるのみ

吾人を以て見れば東郷提督は日本國民の智能の發現體なりと謂ふべし從來日本人を以て單に巧慧なる模倣家なりと爲したる吾々歐洲人は今日に至つて日本人が更に模倣者たるに止まらずして歐米積年の智識の上に更に一生面を啓くの能あるものと認識せざるを得ざるに至れり之に反して天運は飽まで露國に勝利を拒絶し開戦以來十六箇月間に一回の捷利をも得しめず意識的か將た無意識的か何にもせよ露國海陸の兵卒等は驚く可き勇氣忍耐を示し吾人をして最早飽き足る迄多數の死骸を見せしめたり思ふに露國革命黨は此無用の殺戮に對する非難を絶叫するならん

波羅的艦隊の潰敗は白耳義の人心に最も深刻なる感動を與へ其新聞紙は異口同音に露國向後の抵抗を以て愚昧無謀の擧なりとし今回露國御前會議に於る主戰の決議は徒に列國の同情を離反せしめ國內革命運動を猖獗ならしむるに止まる者なりとせり

和蘭及丁抹

和蘭の公衆は初め日本海軍の全勝を疑ふの觀ありしも追々詳報に接するに及んで其範圍の廣大なるに驚き今や一般に之をトラファルガルの海戰に對比せり

六月一日のアルオミーン、ハンデルス、ブラドはバルチック艦隊の全滅と之が大責任の歸する所を論じ畢竟今世の戰爭に於ける勝敗の決は物資に因らずして兵員に因ると論決せり

五月三十一日のニウス、ロットテルダム、クーランは今回の日露戰爭を以て露國に取りて危殆なるものとし海上權挽回の最後の希望を失ひたる露國は物資と兵員と兩ながら缺如せるに至りたることなれば此上戰爭を斷念して多數の民意に従ふの外なかるべしと論せり

五月二十九日の海牙ニウス、クーラント曰く極東に於る日本の優越なる位置は最早之を争ふものなきに至れり歐洲殊に佛國たるものは須く日本國民に就て注意する所あるべし蓋し日本國民は其他國より受けたる屈辱を忘るゝものにあらざればなり

五月三十一日のスタンダートは日本の勝利を認めながらも其艦船には損傷ありたることを疑へり丁抹國に於ては公衆は深く日本海軍成功に對する驚嘆と露國の恐るべき敗北に對する同情と相半し斯

る災禍の如何にして到來せるかを驚くのみ今や平和の望み増大せること、思惟せらるる
アムステルダム株式市場に於ける日本四分利公債は去五月廿七八日に八一八分の一なりしも同三十一日には一躍して八六と八分の七に騰れり(外務省着電)

露國

日本の海戰勝利に關して露國に於ては新聞檢閲官の嚴命に依り五月三十日迄は公衆に之を知らしめざりしが同日に至り最早之を秘する能はざるに至れりと云ふ而して其諸新聞紙は五月三十一日を以て初めて我公報の幾分を公にすることを許可せられしが是より生じたる感想大概左の如し

諸新聞紙は異口同音激烈なる語調を以て戰鬪指揮上の過失を指摘し國民代表者の至急招集せられんことを要求しノウオエ、ヴェレミヤの主筆は形勢の危殆なるを聲明し内務大臣を以て長とする委員會の調査結了を待たずして國民の代表者を招集あらんことを要求せり

又ガゼット、ド、プールス曰く英國の政治社會に於ては尙滿洲に於ても露國が新なる災厄に逢遇すべきを夢み居るに引替へ佛國の輿論は露國に向ひ此上の難禍を避くる爲め和を結ぶの緊急なることを友好的に説けり然れども外部の平和は目下根本的に攪亂せらるゝ内部の平和を回復するにあらずんば決して之を致すを得ずと而してノウオスターは今回の海戰敗北がリネウイッチ軍に殆んど致命的影響を及ぼすべきを指摘して曰く此海戰は浦潮港に對し容易ならざる危難を醸すものにして目下唯一の企望は時日亘久の間に確定の局を結ばしめ以て能く名譽ある媾和を可能ならしめん爲め陸海の殘力を巧に使用するにありて存すと

時局に對する露國新聞の論旨は何れも媾和の決をゼムスキーサポール(國會)に問ふ可しと云ふに歸着せり

ノウオエ、ツレミヤは曰く露國は當初片手を以て戦ひ漸く雙手を動かさんとするに至りて又片手を失ひしも其の戦闘力を失ひたるものにあらず然れども今や國會を召集するの時期は到來し最早片時も猶豫すべからず全國の良智と同情とを以てするにあらずんば國內の民心は到底鎮撫し得べからず

ルス新聞は論じて曰く今日は吾人が我國の敗績を黙止すべきの時にあらず宜しく奮勵して新露西亞を建立して以て將來の形勢を革新するに努むべし

ムロトウオ新聞は曰く官僚政治は又も我國民に汚辱を加へたり今や露國に取りて國會を召集するは誠に焦眉の急なりと

然るにメシチエルスキーは六月一日論じて曰く露西亞が望を繋ぎたるは一つに波羅的艦隊にありき左れば同艦隊の敗衄が痛く一般民心に影響せしは勿論特に我滿洲軍に大なる打撃を與へたるの事實は最も憂ふべきもの、一なり今や國民皆時局に對し取るべきの處置如何を論じ昨日まで余の平和論を罵倒したる所謂愛國の記者等も今日となりては異口同音に媾和の必要を説けり而も彼等は平和成立時期の半を失せしを覺るや否やノウエウレミヤ新聞は慌て、國會召集の必要を絶叫せり併し如何に急激に之を召集するも日本軍の進撃一層迅速なるに及ぶまじきとは同記者果して之を考慮せしか、余は信す平和の聲を聞かんが爲めに今の機を以て國會を召集するは却て紛擾を來す可きを以て決して策の得たるものにあらず若し召集の目的媾和にあらずとせば此際之を急ぐの必要なし媾和を爲さんが爲めに速に

國議院、議政院、教務院の聯合議を以てすること上策なり

露國に於ける感情に關しノウオエ、ウレミヤ新聞は左の如く論せり

我艦隊は對島海峽附近に於て重大なる戦敗を招き爲めに今後多年間露國をして何等海軍力無からしむることは吾人之を認識すと雖も其結果陸上に於ける戦争の繼續を不可能と爲せりとは見る可からず滿洲に於て五十萬の兵を有する露國は未だ媾和に耳を傾くるを得ず海軍の敗衄は陸上の戦局に變化を及ぼすものにあらず而して陸軍に於て露國が自國の兵力に信賴するを得ること開戦以來今日に至りても變る處なし對馬附近に於ける我海兵の損失は實に慄るべきものあり是即ち日本が提議する儘に媾和を容れんとする露國人多かるべしとの想像をして却て益無稽に陥らしむる所以なり

ルシアン、ブルスガゼットは露國官僚政治の動搖並に露國人民の不平困究及び疲憊に就き述ぶる所あり且左の言を爲せり露國官僚政治は外國に於て毫も友人を有せず従つて何等其援助を豫期する能ず同政治組織の廢絶にして一日を速かにせば露國國運の挽回亦一日を早くすべし露國は國家として敗衄又屈辱を受けたるものに非ず

明治四十年十一月十五日印刷
明治四十年十一月十八日發行

不許
複製

翻譯者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

定價金五拾錢
郵税金八錢

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地
時事新報社

長崎縣佐世保市濱田町八番地
田熊萬藏

東京市神田區中猿樂町四番地
藤澤外吉

東京市神田區中猿樂町四番地
秀光社

長崎縣佐世保市濱田町

海軍勳功表彰會本部

東京市神田區西紅梅町十一番地

海軍勳功表彰會支部

○本會出版物の種目及其概要

海軍勳功表彰會編纂

天日露海戰記

附錄戰域大海圖

定價金 貳圓

本書は日露戰役に於ける我海軍の行動を網羅して遺す所なく文章は潤色を避けて着實を旨とし尙文中詳密なる圖解を挿入して參考となし専ら日露海戰の正史として後昆に傳へんことを主眼として編纂したるものなり

附錄は日露兩艦隊の行動を明らかにせん爲め黃海蔚山沖日本海の三大海戰は固より軍艦及商船の沈没場所其他海戰日誌日露兩軍艦の噸數及艦形等を明寫せしものなり

時事新報社翻譯

露艦隊來航秘錄

定價金 五拾錢

本書は露國第二艦隊口提督の幕僚たりし將校の一人がバルチック港拔錨以來對島海峽迄の出來事を細大漏らさず筆記して最愛なる妻に寄せたる日誌なり
尙同人は日本海に於て無慘の最後を遂げたるに依り其妻たる未亡人は夫の靈を慰めん爲涙と共に公表せし珍書也

時事新報社翻譯

露艦隊幕僚戰記

定價金 五拾錢

本書の著者は同じく口提督幕僚の一人なるも戰國中觀況觀察の任務を帯びて筆記に従事したる將校なれば視界内にある露艦隊の行動は勿論旗艦スプロフの最後に到つては其慘憺たる光景を最も詳細に且つ寫實的に明記したるを歸國の後公表せしものなり

時事新報社翻譯

露艦隊最期實記

定價金 五拾錢

本書は同じく第三艦隊の幕僚なりし海軍中佐の著はせし戰記なり其特色は口提督の作戰計畫より脱起し彼我兩艦隊の巧拙を最も無遠慮に論破し然る後日本海大海戰奮闘の有様より降伏軍艦の大悲劇に到る迄快調なる文字を以て遺憾なく著述せし好文草なり

時事新報社翻譯

右三戰記合本 全

定價金壹圓五拾錢
郵稅 十 八 錢

本書は前掲の三戰記を合本とし最も斬新なる意匠を以て日露海戰記同様總クローヌ金文字入の美麗なる洋裝なれば紀念として珍藏せらるるに最も適當の頁書なり